
英子とびーこのあいどんのー!?

青楓ユーカリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英子とびーこのあいどんのー！？

【Nコード】

N8403T

【作者名】

青楓ユーカリ

【あらすじ】

超がさつ女の英子と超超超霊媒体質少女のびーこ。そんな二人のちよつと非日常的な日常生活を、ゆるーく見守る日常系ホラーファンタジー。

基本的に一話完結の短編連作となっております。

第一話 「夜の戸締りはしっかりと」

第一話 「夜の戸締りはしっかりと」

ぴちやつ。

あたしは、そんな頬に当たる冷たい感触で目を覚ました。

「英子ちゃん、うえええん、英子ちゃん起きてよーう」

眼の前には見慣れた顔、もとい見慣れた泣き顔。

どうやら、久しぶりの「アレ」らしい。

「ちつ。あーあー、起きたよ。もう起きたつっの」

あたしは投げやりにそんな言葉を放ちながら、その場でむくりと起き上がった。

「英子ちゃん！ うえーん。怖かったよー。寂しかったよー」

そう言っただけと鼻水まじりのぐちゃぐちゃの顔をあたしにこすりつけてくる眼の前の少女。

「くうおら、びーこ！ んな顔をあたしの服にこすりつけるな！

鼻水がついちまうじゃねーか、きたねーなーもう」

「だ、だっでえええ」

「だっでじゃねーよ。ったく。……で？ 今夜は一体何匹だ？」

「たぶん、一人です。英子ちゃん」
一人。

どーやら、不幸中の幸いってやつらしい。それならさほど時間は掛からねーだろう。

が、あたしが気になったのはそんな事ではなかった。

やれやれ。こいつはまだ、そんな言い方をしやがる。… 一人だ

と？ このアマちゃんは何にも分かっちゃいならしい。

「びーこ。お前も意外とガンコな奴だな。一人じゃねーだろ？ 一匹、だ」

あたしはいつものように、びーこに説教を食らわす。こんな状況にも拘らず、だ。

あたしに言わせれば、こんな状況よりも、眼の前のアマちゃんに説教を与える事の方が遥かに重要な仕事なのだ。

あくまで優先順位の問題なのさ。まあ、あたしのポリシーの問題とも言えるが。

「だって、だってー」

「まただってかよ。もうちつと言いつのバリエーションってのはねえのか？」

「い、今は売り切れ中なのです！ そーるとあうとです」

「ああ、そうかよ」

いつちよ前に横文字なんて使いやがって。

そんなにあたしの感情を煽りてーのか？ こいつは。

… いや、コイツの場合間違いなく天然だろう。

あたしは、小さく溜息をついたのち、部屋を見回した。が、その時、あたしの眼にとんでもねー光景が飛び込んできた。

！！！！！

…… 説教も確かに大切だし、あたしの優先順位としちゃーこの状況は下の下に位置してはいるが、だからといってコレを放置するわけにもいかない。

まあ、何事も柔軟性ってやつが大切なのさ。時と場合によって優先順位やポリシーを変えるくらいには。

「英子ちゃん、お説教は後にしてくださいよー。私たちのお部屋がぐちゃぐちゃになっちゃうよー」

びーこの言葉通り、あたし達の部屋は「アレ」によって見るも無残に変えられていた。

何を隠そう、あたしはこう見えて綺麗好きなのだ。

よって、部屋に土足で入られるのも、部屋のものを勝手に弄られるのも嫌いだ。

だが、あたしの優先順位を変動させるくらいに、嫌いなのが…。

「安心しな、びーこ。あいつはあなたにお願いされるまでも無く、無間逝きだ！」

あたしとびーこの部屋をまるで我が物顔で飛び回る、糞忌々しい一匹の浮遊体。いや、ゴミムシ。もとい、悪霊。

「おい、びーこ。あたし愛用のいつものやつ、とってきてくれねーか？ 部屋の隅に置いてあったろ？」

眼を真っ赤に腫らしたびーこは、一度だけコクンと頷くと、あたしの指示に従い、あたしの言ういつものものやつをとりに駆けて行った。

あたしは、そんな後姿を見送りつつ、ぽつりと呟く。

「… ったく。今更こんな事言ったって仕方ねーけど、やっぱ引き受けるんじゃないかったかもしれないな」

まあ、何を言ったところで後の祭りってやつなんだが。

それに、一度引き受けちまった以上は途中で投げ出すのはあたしの流儀に反する。それだけはあつてはならない。

そんな事を考えているうちに、びーこが例のブツをもって戻ってきた。

「英子ちゃん。持ってきましたよー、でも重いー、これ超重ーい」

「どんだけもやしなんだよ！ はん、流石はお嬢様だぜ。あたし何かとは育った世界が違ってたか？ まあいいや、ほら、とつとと貸しな」

あたしはびーこから受け取ったブツを構え、精神を集中した。

「きゃーきゃー。やっぱり英子ちゃんに似合いますねー、その金属バット」

「うっせーわ。それにちったー口を閉じてろ。集中できねーじゃねーか… つーか、それは褒めてんのか？ けなしてんのか？」

やっぱりこいつ、天然だ。ド天然だ。それも治療不可能レベルの。あたしは気を取り直し、改めて精神を集中する。

相変わらず、部屋は一匹の悪霊により、いいように荒らされている。だが、今はそれも無視し集中。

「…月は村雲花に風、月夜に提灯夏火鉢… 今宵の我が月は、満月…!」

直後、あたしの手にした金属バットが青白い光に包まれる。

やれやれ、これで下準備は完了。後は、ヤツを完膚なきまでにぶちのめすのみ。

「さてと、悪霊。念仏は唱えたか？ 神への祈りは済ませたか？ 心残りはあるか？」

そう言いつつ、件の浮遊物体に一步步近づくあたし。

ほら、死神の足音が聞こえるだろ？ 少なくとも、あたしには聞こえる。

そして、あたしは、悪霊の目の前に辿りつく。

「まあ、あったところで、あたしにや関係ねーけどな。… んじゃーな。あ、ば、よ…!」

あたしは、件の浮遊物体に向けて、蒼く煌くバッドを全力でフルスイング。

聞きたくも無い、汚ねー断末魔をあげながら、悪霊は、あたし達の目の前から、消滅した。

「はん。成仏なんて出来ると思うなよ？ あたしはそんなに優しくねーんだ。てめーにや、地獄すら生ぬるい。あんたに残されたたった一つの選択肢は、無、のみさ」

悪霊の消滅を見届けると同時に、バッドを放り投げ、部屋のとある一角に駆け寄るあたし。

「ちつくしょー。あー、糞が！あたしの命の酒瓶をこんなにしまいやがって…」

眼の前には、もはや見るも無残なガラス片と、ただの水溜りと化したあたしのお宝達。

ついてない。実についてない。

糞悪霊のくせに、あたしの命をこんなにしやがって。こんなの見せられれば、そりゃ優先順位だつて繰り上がるつてもんだ。

「ぷぷぷ。そこだけは悪霊さんに感謝しないとイケませんねー。英子ちゃん、知ってますか？ お酒は二十歳になってからなんですよ？」

ドヤ顔でそんなセリフを吐くびーこ。

こ、こいつ。

そもそも誰のせいで、こんな事態になったと思ってるんだよ。

「いーだろ、別に。1、2歳くらい負けろよ。減るもんじゃなし」

「そういう問題では無いのです。いいですかー、英子ちゃん。そもそも英子ちゃんは普段からもっと女の子らしく」

説教するはずが、逆にあたしが説教されちまうとは。

成る程。相変わらず、なかなかのいい度胸というか、据わった根性というか。

「あー、五月蠅せーな。少なくとも1、2、3のガキに、酒について説教されたくねー。つーか、どの面さげてあたしに説教しようつてんだよ。そもそも誰のせいでこんなことになったと思ってるんだ？」

びーこの超超超霊媒体質のせいだろーがよ。いや、一万歩譲ってそれはまあ、仕方が無いとしよう。だがな、おめーは未だに、一人であんなちんけな悪霊1匹対処できねーときてる。それについて何か反論はあるか？ あ？」

あたしのそんな疾風怒涛の言葉責めに対し、みるみるうちに顔を赤くし、眼に涙を浮かべ、頬を膨らませてしまっびーこ。

「だ、だって、だって、まだ学園ではそこまで習ってないんですもん」

おいおい、今日何回目だったって、だ？

あたしは、今日二度目の小さな溜息をつきつつ、びーこの頭をぼんぼんと二度撫でた。

「分かってるよ。びーこは頑張ってる。それはあたしも良く分かってる。……今のあたしもちつと大人気なかったな。ごめん、言い過ぎた」

素直に頭を下げる大人なあたし。

こいつはその人形のような白い顔に似合わず、かなりガンコなところがある。こうでもしないと納得しないだろう。

まあ、あたしも大人気なかったのは事実だし。

「それはそーと、びーこ。怪我は無かったか？ ったく、暴れまわってくれたよなあおの糞悪霊。やれやれだぜ」

「はい、それは大丈夫です。でも、1日でも早く、この体質をコントロール出来るようになります。英子ちゃんみたいに強くなりたい！」

真顔でそんな事を言われると、まあ、流石のあたしもちょっとは照れる。

そんな心境を悟られまいと、ぶつきらぼつにびーこに言い返す。

「仕事とは言え、巻き込まれる側としちゃー洒落にならねーからな頼むぜ？ 修道女様？」

「はい！ で、でも、その、今は見習い中といいますが、ただの学生といえますか」

「わーってるよ。びーこが一人前になるまでは、あたしが責任持つて守ってやる。あたしはツマラン嘘はつかねーことにしてるんだ」

「正直の頭に神宿る、ですね？」

「あん？ なんだそりゃ？ 相変わらず、意味無く難しー日本語知ってんじゃねーか。ギャップ萌えでも狙ってんのか？ キャラじゃねーぞ」

「それは言わない約束でしょ。もうっ。見た目は関係ありません。それに、私はこう見えて日本語しか喋れませんから！」

「はいはい。んで、いつになったらその一人前になれるんだ？ 実際のところどうなんだよ？」

「… あ、あいどんのー」

あたしは、苦笑いを浮かべながら、眼の前の銀髪異国少女の頭を再び撫でるのだった。

END

第二話 「クイズ番組ではしゃぐ大人になりたくない」

第二話 「クイズ番組ではしゃぐ大人になりたくない」

「なあ、びーこ」

「何ですか？ 英子ちゃん」

「ここってあたしらの部屋だよな？ あたしらのマンションだよな？」

「間違いないですよ、英子ちゃん。学園からの帰り道も、いつも通りでしたし。この階には私達の部屋しかありませんから」

「だよなあ… いつもと同じ道だったし、何度も通ってるんだ。今更、道を間違えるわけねーもんな」

「そうです。いくら方向音痴の英子ちゃんでも、流石に学習しますもん」

「ああ？ いちいち一言多いんだよなあ。… んで、びーこにはアレ、何に見える？」

「はい、十中八九、スフィンクスです」

「だよなあ… どう見たってそうだよなあ。死ねばいいのになあ」

大きな溜息をつきながら、あたしはそう呟いた。

帰宅した部屋の中に、突然見ず知らずのスフィンクスが我が物顔で鎮座していよーもんなら、誰だって愚痴りたくなる。

当然、あたしだって愚痴りたくなる。

強面おっさんの顔に、ライオンの体、鷲の翼を生やした巨大な黄色い物体。

この物体が何かと問われれば、確かにスフィンクスだ。紛れも無

くスフィンクスだ。完璧なるスフィンクスだ。

「英子ちゃん、英子ちゃん。私、スフィンクスって始めて見ました！ やっぱりおつきいんですねー」

「ああ、そうだな…………… ってふっざけんなああああああ。

「ああ？ スフィンクス？ はあ？ ここはエジプトですか？ ギザですか？ 観光名所ですか？ なんなんだこの状況は！！」

「まあ、まあ、落ち着いてください英子ちゃん」

「いやいやいや、あんたが落ち着きすぎなんだよ！ たかが悪霊一匹でぴーぴー泣き喚いてたくせに、何でそんなに落ち着いてんだよ！！」

そんなあたしのツッコミに対し、陶器のように真っ白なその頬を膨らませるびーこ。

「ぶう。私、ビービーなんて泣いてません！ メソメソ泣いてたんです！」

「知らねーよ！ どっちだって関係ねーよ！ …………… ああ、もういい。何か疲れたわ。理不尽マックスな状況のおかげで、思わずテンション上がっちゃったぜ。あたしらしくもない」

あたしは改めて、部屋の真ん中に鎮座しているスフィンクスを見上げた。

この部屋は、ぶっちゃけ広い。女二人が住むには広すぎるといつでも過言じゃねー程広いし、やたらと高価な調度品が揃っている。

勿論、あたしの趣味ってわけじゃねーし、そもそもあたしの部屋って訳でもない。

全ては、馬鹿親、もとい親馬鹿なびーこの両親によるものだ。まあ、今は関係ねーから割愛するが、あたしが何を言いたいのかといえば、そんな糞広い部屋の大部分を占めちゃうほど、糞デカイスフインクスがあたしの眼の前にいるってこと。

こんなのでつてー可笑しいし、最も恐ろしいものの片鱗を味わった気分だし、断じて認めたくない現実ではある。

…ではあるんだが、あたしがこのびーこと一緒に生活している以上、何が起こっても可笑しくは無いのだ。

どんな奇想天外な出来事が起きようと、現実と認定せざるを得ないのだ。

なぜならそれが、あたしとびーこの日常生活だから。

「この子、生きてるんですかねー？ 動くのでしょうか？ 私、幽霊の類は苦手なのですが、それ以外の超常現象でしたら大好物ですので」

そう言っつて部屋の片隅にあつたマジックハンドを使い、件の生物をツンツンし始めるびーこ。

「フーかやめろ！ アラレちゃんか、お前は！」

が、時既に遅し。

スフィンクスは、その両目をぱちりと開眼させた。

「あー、糞。だから言わんこつちゃねー」

やがて、その大きな眼があたしとびーこの姿を捉えると同時に、今度はその大きな口を開き始めた。

大きく鋭い牙を携えたその口元は、御丁寧にも明らかに人のものであるう鮮血に染まっていた。

つまり、こいつは 人を 食つたのだ。

「では、第一問」

「はあ？ 何だよ第一問つて。クイズか？ 糞っ、教科書どおりのスフィンクスつてわけかよ」

スフィンクス。

この手の類に疎いあたしでも、流石に知ってるくらいには有名な話。

旅人にいきなりクイズを吹っかけて、間違えたやつを食つちまつたつて御伽噺。

糞真面目にも、あたしらの眼の前のこのスフィンクス殿は、それを再現してくれるらしい。

有りがた迷惑この上ねー話だ。

だがまあ、有名な話ってことは、そのクイズの答えも有名なわけ
で。

「朝は4本足、昼は2本あ…」

「人間、人間、人間、人間、にんげん！」

あたしは、スフィンクスの言葉を遮る様に力の限り叫んだ。

「あー、ズルイです英子ちゃん。私が答えたかったのにー」

「知るか！ んなことより、正解したんだ。満足しただろ？ とつ
とと消えな」

あたしのそんなセリフに対し、明らかに顔をムスツとさせるスフ
ィンクス。

「あ？ 何だよ、文句でもあんのか？」

「では、第二問」

「うおい！ まだ続くのかよ！ てめー、言いたい事があるならハ
ツキリ言いやがれ！」

そんなあたしの言葉を無視し、スフィンクスは問題を進める。

「上は洪水、下は…」

「風呂、風呂風呂風呂風呂風呂風呂風呂風呂！！」

あたしは、怒涛の勢いでそう叫んだ。あらゆる怒りを込めてそう
叫んだ。

「それも私知ってたのにー！」

糞クイズ王殿はまだ満足出来ないらしく、明らかに怒りの感情の
籠ったそのおっさん顔を歪めながら尚も続ける。

「では、第三問」

「いい加減にしやがれ！ 何なんだよ、目的は何だ！」

「パンはパンでも」

「フリーラーイーパーイーーン!!!!」

あたしの人生において、これほどまでに全力でこの言葉を叫ぶことになるとは思っても見なかった。

たぶん、一生分のフライパンを使っちゃったと思う。

いや、まあ、自分で言うておいて意味分からんけど。

あたしの回答を受け、スフィンクスの目が血走り、その額に血管が浮き出たのが見えた。

「っかあたしが悪いのか？ こんな今時、幼稚園児だって鼻で笑うレベルの糞みたいな問題を出すほうに問題があるだろう。」

「それでは、汝に問う。最終問題」

「英子ちゃん英子ちゃん、最終問題ですって。今度こそ私が答えますからね、英子ちゃんは黙っててくださいね」

相変わらず、びーこがきゃいきゃいと能天気騒ぐ。

「びーこ、わかんねーのか？」

このスフィンクスの雰囲気さっきまでとは一変しちまったのを。

禍々しいくらいのオーラを発してるのがわからねーのか？ 悔しいが、こいつは、あたしの力でどうこう出来るレベルのバケモンじゃない。

あたしは、眼の前の半人半獣の化け物を睨みつけながら、その言葉の続きを待った。

「我を、納得させよ」

「えーっ、そんなー。英子ちゃん、私分かりません。英子ちゃんに回答権を譲ります。ズバズバと答えちゃってください!」

「……」

「え、英子ちゃん？ ま、まさか、英子ちゃんも分からないんですか？ …… うええええん、どうしよう。私たち、食べられちゃうよ」

「
またもビービー泣き出すビーこ。」

突如、あたし達に見せ付けるように赤く染まった大きな口を開き、その凶悪な牙を露にするスフィンクス。

やれやれだ。

あたしは、これまでビーこに見せた中で最も冷たい顔で、彼女を睨んだ。

「おい… ちょっと黙ってくれねーか？」

ビーこは、顔を真っ青にし、小刻みに震えながらこくこくと何度も黙って頷いた。

先程までの喧騒が嘘のようにしんと静まり返るマンション内。

部屋には、カチコチという大きな古時計の音だけが響き渡る。

そんな時間が、どれだけ続いただろうか。1時間にも永遠にも思えたそんな時間。

だが、実際は10分も経過していないであろうそんな時間。

その沈黙を最初に破ったのは、件のスフィンクスだった。

「合格。我は満足した」

その言葉と同時に、音もなく消えてゆく巨体。

…… ったく、やれやれだぜ。

「一時はどうなるかと思ったが、まあ、何とかあったな」

安堵の表情を浮かべ、ビーこの様子を伺う。

が、ようやく開放されたつてのに、様子の可笑しいビーこ。あたしの言葉にもこくこくとただ頷くのみ。

「あ？ もう喋って良いぜビーこ。つーか何で泣きそうなの？」

そんなあたしのセリフを契機に、まるで緊張の糸が解けたように、一気に涙を流しビービーと泣き出すビーこ。

「ちょ、何だよ。何泣いてんだよ」

「だ、だつてえ、ううう、英子ちゃんが、英子ちゃんが怖い顔で怒るから」

え？ ああ、確かに黙れとは言った。怖いかどうかは別として、睨んだのも事実だ。だがまあ、勿論それには理由がある。

何とというか、説明するのが既にメンドクセー。

このまま放置じゃ駄目？ 駄目？ …… ちつ。

「聞け、びーこ。あいつの最後の問題があつただろ？ 我を納得させろつて」

「どーせ、私にはさっぱりでしたもん」

そう言つて赤い目を腫らしながらツンと拗ねるびーこ。

「よく思い出せ、あいつはどんな状態だった？」

「どんな状態？ うーんそうですね、出す問題全部、英子ちゃんに簡単に答えられてちよつと怒つてたかも」

「それだ。あいつは怒つてたのさ。つまり、あいつが尋ねていたのは怒りに対する最上の答え。何だか分かるか？」

まあ、こいつはクイズつて言うより心理分析みてーなもんだが、怒りに対する対処法つてやつだ。

自分で言つのも何だか、あたしもこんな性格だからな、この手の対処方法つてのは嫌でも身についちまつたりする。

「… 沈黙、ですか？」

「正解。何だ、やれば出来るじゃねーか。怒りに対する最上の答えは、沈黙だ。言い訳したつて怒りはおさまらねえ。逆にさらに怒りを買つちまう事もありえる。そんなときは、沈黙。沈黙は金つてやつだな」

あたしのそんな解説を聞き、最初はぼかんとしていたびーこだったが、やがて、再びその両目に大粒の涙を溜め、声を上げ泣きだした。

「うええええん。よかつたー。私、英子ちゃんに嫌われちゃったのかと思つて、それで、それで」

「はあ？ あのなあ。確かにあたしは仕事としてあんたのお守役をやっちゃいるが、あたしだって人間だ。嫌いな人間と一緒に生活なんてするわけねーだろ？」

そう言っただけは、目の前で泣きじゃくる一人の少女を、ぎゅっと抱きしめるのだった。

まあ、たまにはこういうのも悪くない。たまには、な。

END

第三話 「鏡の前では苦笑い」

第三話 「鏡の前では苦笑い」

「うおーい、びーこ？ いねーのかー？」

あたしの仕事はびーこの子守役。

学園への送り迎えに加えてボディガード、時には保護者的な役割さえ担うこともある。

びーこの場合、どこにいようが、例えマンションの部屋の中に居ようが、安全だとは言いがたい。

それこそがあいつの持つ才能であり、呪いでもある。

尚もマンション内を探し回る私。

こういう時、あたしは無駄に広いこのマンションに怒りを覚える。どう考えたって、あいつの子守をするのに、この広さは不向きだ。部屋なんて、住めりゃ何でもいいんだよ。4畳半もあれば十分なんだ。

無駄に広ければ広いほど、あたしは部屋中を探し回らなきゃならなくなる。つたく、メンドクセー。

ぶつぶつと愚痴をこぼしながら徘徊していく。

と、1枚の大きな鏡の前で、あたしはその歩みを止めた。

何故ならあたしは、半ベそをかきながら何かを必死に訴えるびーこの姿を見つけたからだ。

……… そう、その鏡の中で。

ちなみにびーこの声は聞こえてこない。きっと、鏡の中だからだろつ。

よりもよって、何故鏡の中なんかにいやがるのか？ そりゃ探したって見つからぬー筈だ。

だが、愚痴を言っても仕方が無い。

何と言っても、びーこは超超超霊媒体質。厄介事に巻き込まれるのに、それ以上の理由はいらぬ。

あたしは、溜息を一つつきながら、その大きく古い鏡に近づいた。

「よお、びーこ。随分とおもしれー所にいるじゃねーか」

向こうの声も聞こえてこないし、こちらの声も聞こえてはいないらしい。

鏡の中のびーこは、あたしに何かを必死に訴えかけているものの、当然何を言ってるわからない。

やれやれ、どーすりやいいんだ？ この状況。

とりあえず件の鏡をぺたぺたと触って調べてみる。

が、無駄にデカくて古臭いってところ以外、特に変わったところは見当たらない。

勿論、一番の異質は中にびーこがいるってことだが。

後ろに回りこんでみるも、やはり入り口の類や霊的な気配すら感じ取れない。……。

ちなみに、この部屋はびーこの衣裳部屋である。

糞高そうなドレスから、てめーいつそんなの着るんだよ！ ってレベルのコスプレちっくなふざけた衣装まで、ありとあらゆる何百着の服がとろせましと並んでいる。

流石はお嬢様。あたしらとは住む世界が違う。

まあ、住む世界が違うっつーか、今は文字通り鏡の世界にいつちまったわけだが。

… まったくもって笑えねー。

念のため、衣裳部屋をぐるりと見回る。

当たり前だが、眼に入ってくるのは右も衣装、左も衣装。あたしには一生、縁もゆかりもねー代物ばかり。

なんつーか、頭が痛くなってる。

まあ、あいつの場合、お世辞じゃなく人形みてーななりしてやがるからな。それに、あれくらいの年齢の外人つてやつは何を着たって似合っちまうものなのさ。びーこも然り。残念ながら、誰も得しねーが。

びーこの話はどうでもいい。今は鏡の話だ。

手っ取り早いのは、この鏡を完膚なきまでに粉々にぶっ壊しちまう手だろう。

この古臭い鏡が何らかの力でびーこを取り込んだのだとすれば、それさえぶち壊しちまえば、何らかのリアクションが期待出来る。

が、反面、鏡を破壊したからといって、びーこが無事に鏡の世界から脱出出来るという保証は何処にも無い。

むしろ、出入り口たるこの鏡を壊しちまったら、普通に帰ってこれなくなってしまう可能性すらある。

さて、どうする？ あたし。

いずれにしても、一つだけ確かなのは、このまま何もせずにしたところで何ら解決には繋がらねーってこと。

うだうだ言っても何も始らねーってこと。

つまり、行動あるのみだ。

そうと決まれば話は早い。

あたしは、ジーンズのポケットをごそごそと探り、得物を探した。

出てきたのは一本のナイフ。護身用に常に持ち歩いているあたしのコレクシヨンの一つだ。

眼の前の馬鹿デカイ鏡を粉々にするにはちと心もとねーが、この

際警沢は言っていない。

あたしは、眼の前の状況を一旦遙か彼方へ忘却し、意識をナイフへと集中させた。

「月は村雲花に風、月夜に提灯夏火鉢： 今宵の我が月は： 無月！」

直後、あたしの手にしたナイフが青白い光に包まれる。

さて、準備は完了。

「悪く思わねーでくれよ？ 恨むんならびーこに魅入られちまった己を恨むんだな。それじゃ： あばよ！」

あたしは、全身全霊を込めて、ナイフを振り上げ、件の鏡に突き刺した。

これで全てが解決するはずだった。これでこの糞メンドクサイ事態からおさらばのはずだった。

が、そんなあたしの考えはただ甘だったらしい。

やれやれ、あたしは甘いもの苦手だったのによ。まったくついてない。

あたしの全力を込めたナイフによる一撃は、青白い閃光と共にいともあっさりとは弾き返されていた。

「ちっ、あたしの読みは大外れだったらしい。： 振り出しに戻る、だ。さて、どーしたもんかね」

全力が効かなかったのだ。これ以上切りつけたところで、傷一つけるどころか、恐らく、体力の無駄使いに終わっちまうだろう。

あたしは、一旦頭を冷やすため鏡の前で腰を下ろしあぐらをかいた。

鏡の中では、相変わらずびーこが大粒の涙を流しながら、口をぱくぱくさせている。まあ、概ねいつものことだが。

まったく、鏡の世界でも何も変わらねーな、あいつは。

…… は？

変わらない、だと？

あたしは、改めてびーこのその姿を確認する。

びーこは普段、学園の制服でいることが多いものの、部屋では珍妙なＴシャツを着ている事が多々あった。

ちなみに、今日のＴシャツはというと、彼女の好きな言葉の一つ、「天網恢々疎にして洩らさず」という諺がでかかとプリントされた、センスゼロのＴシャツ。

確かに色々と言いたい事や突っ込みたいところはあるものの、この際、重要なのはびーこのセンスなんかじゃない。注目すべきは、その文字列だ。

あたしは、今、Ｔシャツに書かれたその言葉を、極普通に読みとる事が出来た。

当然だ、普通に書かれた文字を普通に読んだだけだからな。

あたしだって馬鹿じゃない、それくらいの漢字は読める。

つまり、あたしが言いたいかといえば、文字が、左右逆になつてねーということだ。

その事実が指し示す意味はたった一つ。

「糞っ。あたしとした事が、とんでもねー勘違いをしていたらしい。その上、びーこのＴシャツでその事に気づかされるとは、情けねーことこの上なしだな。格好悪っ」

あたしは、今日一番大きな溜息を一つついた後、未だ青白く煌き続けるナイフを再び構え、立ち上がった。

「今度こそ、完全におさらばだ。あいつのいねーこんな世界は、二度とゴメンだぜ。んじゃ、あばよ！」

そう言っただけであたしは、自分自身にナイフを突き立てた。

瞬間、あたり一面に鏡の割れる不気味な破壊音が響き渡ると共に、あたしは、光を失った。

「…ちゃん。英子ちゃん！　しっかりしてください。眼を覚ましてください」

「あ？　何だ、ビーこか」

「どうやらあたしは、ビーこに膝枕されているらしい。」

「何がどうしてこんな状況に陥っているのか？　数秒だけそんな事を逡巡した後、すぐに先程の記憶が鮮明に蘇ってきた。」

「…ってことは、どーやら脱出成功したらしいな」

「うええええーん。良かったよー。英子ちゃんったら私の目の前で急に鏡に吸い込まれてしまっんですもの、私、私、どうしていいかわからなくて、凄く不安で」

「そう言っつてビービー泣くビーこ。」

「あーもー、相変わらず五月蠅せーなー。」

「…　まあ、元の世界に戻ってきたっつて確然たる証拠でもあるんだが。」

「今回の話、鏡の世界へ誘われたのはビーこではなく、あたしだったっつてオチ。」

「ビーここと生活している以上、超常現象のターゲットがあたしに向く事もざらにある。」

「そのことを失念していなければ、もっと早く解決できただろう。」

「認めたくねーが、完全にあたしのミスだ。」

「まったく、やれやれだぜ。」

「それにしても、嬉しくても泣く、悲しくても泣く、安心してても泣く。こんなんで本当に、立派なシスターってやつになれるのかね？」

だがまあ、今回ばかりは多めに見てやるぜ。

あたしは、眼の前で泣きじゃくる少女に言う。

「おい、びーこ。… それ、いいTシャツじゃねーか」

「でしょでしょ？ 英子ちゃんの分もありますから、今度二人で一緒に着ましようね？」

そんな満面の笑顔に対し、あたしは、苦笑いを浮かべながら頷くしかないのだった。

END

第四話 「金曜日は眠らない」

第四話 「金曜日は眠らない」

その日、あたしは疲れていた。疲れ果てていた。

「なあ、おい、びーこ。今ので何匹目だ？」

「12です、英子ちゃん」

じゆうに？ 12匹？

… 糞っ、聞くんじゃなかった。

あたしは、深い溜息をつくと同時に、手にしていたナイフをその場で手放した。

「お疲れ様です、英子ちゃん。はい、これ」

そう言っつてミネラルウォーターのペットボトルをあたしに手渡すびーこ。

あたしは、それを受け取ると一気に喉の奥へと流し込んだ。

一時の静寂に満たされたマンション内に、ゴクゴクというあたしの喉音だけが響き渡る。

「つぶはああ。ちつきしょー。だからあたしは金曜日が嫌いなんだよ！ 特に13日の金曜なんて、その存在すら許せねえ。死ぬっ。

氏ねじゃなく死ぬ。カレンダー上から消えちまえ」

「英子ちゃんつたら、またそんな子供みたいな事言っつて。金曜日がなくなつちやつたら、全国のカレンダー屋さんが大変ですよ？」

「そういう問題じゃねーし、そもそもカレンダー屋さんて何だよ！ ガキかてめーは」

びーこの天然つぶりが披露困憊のあたしに追い討ちをかける。ヤバイ、突っ込んだら余計疲れちまった。

つーか、何でこんなことやってるんだらう、あたし…。

あたしはぐったりしながら今日1日の出来事を振り返った。

あたしの基本的な一日は、びーこに始りびーこに終わる。

朝、目覚まし代わりであるびーこの騒ぎ声で眼を覚ます。

あたしは夜行性だ。

だから寝起きはすこぶる悪い。むしろ最悪だと言ってもいい。

目覚ましの2、3個くらいではとてもじゃねーがどうすることも出来ない。

つまり、誰かに起こしてもらおう以外に、あたしが時間通り起きる術は無いってこと。

そして、悲しいかな、この部屋にはまともな人間と呼べる類の生物は、あたしとびーこしかない。

となれば必然的に、毎朝びーこに起してもらおうという、恐ろしく不安で不服な方法を取らざるを得ないのだ。

毎朝、あたしが一番最初に眼にするのは、そんなびーこの膨れっ面。

びーこは、あたしに往復ビンタをお見舞いしたり、あたしの腹の上に本を山のように積み重ねてみたり、時には口と鼻を同時に塞ぐなどという実にアグレッシブでチャレンジ精神に溢れる方法でこのあたしを起してくれる。

人の優しさってやつが骨身にしみる。

ありがたすぎて涙が出てくるぜ。

簡単な朝食を済ませ、あたしは愛車のスクーターでびーこを学園へと送り届ける。

基本的に、学園にいる間だけは、びーこの霊媒体質が悪い方向へ働く事は無い。

あたしと二人でマンションにいるよりよっぽど安全なのだ。

そして、あたしはその間だけビーこのお守役から開放される。

その時間、あたしは別件の糞メンドクサー仕事をこなすこともあれば、丸々自由な時間として勝手気ままに費やす事もある。

よっぽどすることが無い場合や、ビーこに涙目で懇願された場合は、まあ、学園内について回る事も稀にはあるが。

そこがあくまで学園である以上、放課後はやってくる。

安全だからと言っても、所詮は一時しのぎ。学園は、ビーこのためのシエルターや隔離施設ではないっつーこと。

夕刻、あたしはビーこを迎えに行くため再び学園へと赴く。

後はまあ、二人でマンションに帰って馬鹿話をしたり、飯食って寝るくらいだろう。

勿論、途中で何度か、メンドクサー厄介ごとに巻き込まれたりするのは日常茶飯事。

だが、金曜日はそうはいかない。

真実はあたしもしらねーし、別段しりたくもねーし、興味もない。だがまあ、あたしが言えることは一つ。

金曜日には魔物が住んでいるんだ。

比喻とか例え話ってわけじゃない。言葉通り、そのままの意味だ。

金曜の夜つてのは人間を解放的な気分にするが、それはそのまま人間以外にも当てはまる話らしい。

金曜日の夜は、何故か良くないものたちが騒ぎ出す時間帯なのだ。

特に13日の金曜日なんて最悪だ。眼も当てられない。

現に、こうしてあたし達の部屋には既に、ビーこに魅入られた12匹の不届き者達が侵入してきやがった。

1匹1匹はさほどではないといっても、ただでさえ1週間の疲れがどつと押し寄せてくるこの時間帯に、休みなく連戦。

そんなの疲れるに決まってる。むしろ疲労しないわけが無い。

だからとって油断をすれば、あたしもびーこもただではすむわけがない。

常によく緊張状態。永遠とも思える時間。長い長い夜。

だからあたしは、金曜日が嫌いなんだ。

「英子ちゃん？ まだ眠ってしまっではいけませんよ？ ほら」

そう言っただけが指さす先に、青白い炎が上がった。呼応するように部屋全体が振動し、激しい風が吹き荒れる。

休む暇もなく13匹目のおでまし。つまり、どーやら今夜は徹夜確定らしい。

… たった、やれやれだぜ。

あたしは、部屋の壁面に飾られていた一振りのレイピアを掴み取り、一気にその刃を突き立てた。

金曜日は、まだまだ眠らない。

END

第五話 「日曜日は眠れない」

第五話 「日曜日は眠れない」

「私、明日は学園に行きたくありません！」

あたしの長い夜は、そんなびーこのセリフで幕を開けた。

実にメンドクサーことこの上ない事態。

これは、そう、言うなればびーこの病気の一つみてーなものだ。勿論、心の病ってやつだが。

毎度毎度、こいつは日曜日の深夜、突然そんな事を言い出す。

「ああ？ またかよ、びーこ。っーか今何時だと思ってる？ 寝ろ、全てを忘れてとっと寝ちまえ」

ちなみに今は、深夜の1時。

良い子っーか、お子ちゃまはとっくに寝ている時間ってわけだ。「そうは参りません。だってだって、どーせ私は駄目駄目なんです。何をやっても駄目駄目なんです」

そう言っってベッドの上でしょぼくれるびーこ。

どうやら、今夜も重症らしい。

「よっよう、びーこ。あたしだってこんな事は言いたかねーが、もう決めた事だろ？」

「…っ。そ、それは分かっています。でもでも」

「でもも、だっても無しだ」

あたしはそう断言しながら、びーこのベッドに近づき、そしてその小さな頭を撫でた。

「いつも言ってるんだろ？ びーこなら大丈夫だって。おめーならきつと出来るってな」

そんなあたしのありがたいセリフにも、ふるふると首を横に振って拒絶を示すびーこ。

こいつは何だかんだで頭が堅い。というか妙なところで意地っばりなのだ。

全く、メンドクサーことこの上ない話だぜ。

「厳しいことを言うようだがよ、びーこのその呪われた才能ってやつは、現状あたし達にはどうすることも出来ない。確かに、実際に起きちまった事に関しては、解決に協力してやることは出来るし、それがあたしの仕事ってやつではあるが…」

「分かっていきます。私だって、この力をコントロール出来たら、普通の生活が出来たらどんなにいいかっていつも考えてますもの」

「… だったら何が問題なんだ？」

あたしは、その質問の答えを知りつつあえてそんな言葉を投げかけた。

これまでも何十回と交わされてきたやりとり。

それでもあたしは、黙ってびーこの返答を待つ。

「ううっ。私には、自信が無いんです。私は、英子ちゃんみたいに強くはなれないんです」

やっぱりまたその話か。

あたしは深い溜息をつきながら、しっかりとびーこの目を見据えた。

「良く聞けびーこ。確かに、おめーのその呪いとも言える才能ってやつは、誰のせいでもない、勿論びーこのせいでもない。もって生まれちまったギフトってやつだ。けど、その力は使い方一つで、いや、制御出来るか出来ねーか。たったそれだけでびーこの人生そのものを変えちまえない代物なんだ。そりゃあたしだって、厄介ごとに巻き込まれるのはゴメンだし、びーこには真つ当な人生ってやつを送って欲しいと思ってる。嘘じゃねーぜ？」

びーこは俯きながらもあたしの言葉を聴いてくれる。

「びーこはあたしが強いやつだなんて思ってるようだが、そりゃ勘

違いも甚だしいってもんだ。あたしだって、こえーもんはこえーし、断じて強く何かねーぜ」

「英子ちゃんも… その、怖いんですか？」

「ああ。勿論怖い。おめーが普段あたしをどう思ってるのか知らねーが、あたしだって一応年相応の女の子なんだぜ？　びーこと同じで怖いもんは怖いし、逃げ出したい時だってある」

あたしのそんなセリフに対し、ぴくりと反応し、ようやくその顔をこちらに向けてくるびーこ。

「でも、英子ちゃんは逃げ出したりしません。いつも私を護ってくれて助けてくれます」

「そりゃ、それがあたしの仕事ってやつだからな」

一瞬だけ寂しそうな顔をしたびーこは、目元だけを赤く腫らせ、再びその白い顔を伏せてしまう。

毎度の事とはいえ、つたくしょーがねーやつだ。

あたしは、再びびーこの頭をくしゃくしゃと撫で回しながら言う。

「だが一番の理由は、… あたしがびーこを信じてるからだ」

再び顔を上げるびーこ。

「何度も言ってることだが、あたしはびーこに賭けてんだ。おめーのその才能… いや、努力や頑張り期待してんのさ」

先程の泣き顔はどこえやら。目を輝かせてあたしの顔を見つめるびーこ。

「びーこなら、あんたならきつと、この歪んじまった世界ってヤツを正しい方向へ矯正出来るって。あたしはそう確信している。だからこそ、あたしは命を賭けてあんたを護る事が出来る。もう後戻りできないくらいに、あんなバケモン達に喧嘩を売れるのさ」

「英子ちゃん…」

いつの間にかびーこは、あたしの直ぐ横に来て、あたしの手をしっかりと握っていた。

「私、間違っていました！ 私、頑張って強くなってみせます！！」

ローマは一日にしてならず、私明日も学園に行きます！！！！」

どうやら、びーの中で何らかのケリがついたらしい。まったく、やれやれだぜ。

「それはそうと英子ちゃん。私、今、やる気や情熱でいっぱいになっちゃいまして、その…全然眠れそうにありません!」

先程の泣き顔とは打って違って変つてめっちゃくちゃ元気良くなんな事を言いやがるびー」。

きたよ。毎回この話のオチはいつもこうだ。

あたしは、次のびーこの言葉を身構えるようにして待った。

「だから、眠れるまでまた英子ちゃんのお話を聞かせてください。

私、英子ちゃんのお話大好き」

「まったく、飽きねーやつだな」

あたしは、小さく溜息をついた後、ベッドの上で実に良い顔で正座する異国少女に言う。

「いいぜ、何度でも聞かせてやる。耳の穴かっぽじってよくきけよ? 今夜は寝かせてやらねーからな」

「望むところです!」

そんなあたしの日曜日は、まだまだ眠れない。

END

第六話 「月曜日は誰だって憂鬱」

第六話 「月曜日は誰だって憂鬱」

「おい、びーこ。忘れモンはねーか？」

「はい。ばっちりですよ英子ちゃん。それでは参りましょうか？」

「へいへい、あいよ」

あたし達は、そんな言葉と共にマンションを出た。

びーこを学園へと送り届けるのもあたしの仕事。

あたしはスクーターに跨ると、いつものようにヘルメットを渡し、びーこを後ろへと乗せた。

ちなみに今日は月曜日。

また、長い長いあたしとびーこの1週間が始まるのだ。

余談だが、あたしは月曜日が嫌いだ。大嫌いだ。

金曜日も嫌いだが、この月曜日ってヤツも、また違った理由で大嫌いなのだ。

もともと低血圧なあたしだが、それに加えて昨日の夜の酒が残っていて頭が痛い。

そんな状態で先の見えない1週間が始まるのだ。

だから、月曜日のあたしのテンションは死ぬほど低い。例えるなら歩くゾンビ状態だ。

いや、むしろ月曜日が大好きだなんてやつは断じていねー筈。

むしろ、そんなやつがいたら見てみたい。

どんなドヤ顔で毎日を謳歌しているのか、是非お目に掛かりたいもんである。

そんなことを考えていると、後ろのびーこが俄かに騒ぎ出した。

「英子ちゃん！ あれ、あれ見てください」

相変わらず騒がしいヤツ。全く、だからあたしは、月曜日が嫌いなんだ。

「つたく、月曜朝から何だつてんだ？」

あたしは、渋々びーこの指差す方角を睨んだ。

そんなあたしの眼に飛び込んできたもの、それは。

「…ゾ、ゾンビ？」

そう、ゾンビだ。間違いなくあのゾンビだ。

映画やゲーム、小説や漫画。今となつては様々な形で絶賛大活躍中の、あの生きる屍だ。

そりゃ確かに、月曜のあたしのテンションの低さはゾンビ並だなんて言つちまつたが、まさか本当に出てくるとは思わなかった。

しかも、実に最悪な事に、目の前に広がるゾンビ達は1匹2匹なんてレベルじゃない。

「なんじゃこりゃああああああ。おいおいおい、あたし達の知らねー間にバイオハザードでも発生したつての何か？ 一体全体何なんだこの数は！！」

奇妙な事に、ふらふらとあたし達の前を歩くゾンビ達は、ある者はスーツに身を包み、ある者はどこぞの学園の制服を着用し、またある者はやけにカジュアルな格好をしていた。つまりは、多種多様。あたしたちには眼もくれず、服を着て一心不乱に、それぞれの目的地へと歩いていくゾンビたち。

何ともシユールな光景だ。

「これは、あれじゃねーか？ びーこが昨日の夜、性懲りもなく学園に行きたくねーとか駄々をこねたからじゃねーのか？」

「だ、だつてえええあれはー」

「だつてじゃねーよ… つたく、まあ、今ところは奴等に敵意はねーみたいだし、ここは華麗にスルーしてこのまま学園に行くぞ。」

いいな？」

「そんなあたしの言葉を聴いているのかいないのか。びーこは何故かその眼を輝かせながらゾンビたちを見つめている。」

「ああ？ 何だよびーこ、お前にしちゃ珍しくびびらねーんだな」

「何を言っているのですか、英子ちゃん。私、こっぴど見えてこの手のゲームは大得意なんです！ 1から5まで全部クリアしましたもん」
興奮気味にそんなことを言い出すびーこ。

「っか、いや、知らねーよ。」

「いいですか？ 英子ちゃん。腐れゾンビどもを屠るには頭を一撃で。これが基本なんです」

「く、腐れゾンビ共？」

「びーこ、お前がバイオ好きなのは分かったけどよ、その、むやみにゾンビ達を煽っちゃいけねーな」

「あたしはくれぐれも慎重にびーこを諭す。」

「相手に敵意がねーってんなら、それに越した事は無い。」

「なのに、こいつときたら、こいつときたら…。」

「何言ってるんです英子ちゃん。ゾンビなんて燃やしてバラして粉砕してなんぼですよ。あんな腐れ脳みそ共に遠慮も配慮もいりません！！」

「何があつたの？ むしろ、このお嬢様とゾンビの間に一体なにがあつたの？」

「あたしは慌ててびーこの口を塞いだ。」

「が、やっぱり、いつも通り、時既に遅し。」

「周辺のゾンビ達の雰囲気が一気に変わったのが分かる。」

「お、おい。覚えとけよびーこ。今日の説教はいつもの3倍だからな！」

「えー。何ですか英子ちゃん。私、間違ったこと言ってますもん。それとも英子ちゃんはあるなゾンビ共の味方なんですか？ 同病相憐れむ、ですか？」

「知るか！　んなことより、びーこ、とつとあたしに掴まれ。い
いか？　絶対振り落とされるんじゃないぞ！」

「え？」

きよとんした顔で呆けるびーこを後ろに乗せ、あたしは慌ててス
クーターを爆進させた。

何故かって？

理由は簡単。

先程のびーこの煽りのおかげで、某映画よろしく、ゾンビ達が全
力疾走で一斉にこちらに向かってきたから。

数が数だ。ぶつちやけ、シャレにならない。

朝からなんだよこの仕打ちは。

神はいねーのか、神は。

「馬鹿が！　100%、びーこが煽りやがったせいだ。あーもう糞」

「だ、だつてええ」

そう言っつていつものごとくびーびー泣き出すびーこ。

泣きたいのは間違いなくこっちだ畜生。

「あれだけの数だ、1匹ずつ相手してたらキリがねえ。予定通りこ
のまま学園まで突っ切るぞ」

もはや喋らなくなってしまうたびーこは、そんなあたしのセリフ
に対して、真つ青な顔でただただ頷き続ける。

まるでゾンビのようなそんなびーこの顔に苦笑いしながら、あた
しは荒い運転で学園へとひた走る。

あたし達の真後ろには眼を血走らせ、狂ったように全力疾走であ
たし達を追いかけてくるゾンビ軍団。

やべーなこれ、今夜絶対夢に出てくるよ。

「おい、びーこ。まだ学生とは言え、お前だつて一応聖職者だろ。
何かねーのかよ、聖水とか銀の銃弾とかあるだろ？」

が、肝心のびーこからの返答が無い。…　どうやら、恐怖が臨界
点を超えちまつて気を失ったらしい。

それでも、あたしを掴む手が緩まないのは本能ゆえなのだろう。
「嘘だろお前。幾らなんでもそりゃねーだろ。こーなったら今日の
説教はいつもの10倍にしてやる!」

あたしはそう叫びながらもスクーターを飛ばす。

自分でもかかつてないほど必死に飛ばしたためだろう、気がつく
と眼の前には学園の門が見えてきた。

唯一絶対の安全地帯。非日常から日常へのスイッチポイント。あ
たし達が辿りつくべき目的地。

が、その門は既に固く閉ざされた後。

どうやら、あたし達がゾンビ騒ぎをしているうちに登校時間を過
ぎちまったらしい。

つまり、完璧な遅刻だ。

「だああああ、こうなったら止まってる時間も門を開ける余裕もね
え。このまま突っ切る」

スクーターを限界速度まで上げ、そのまま門の前でスクーターこ
とジャンプ。

が、当然門を越えるには高さが足りない。

あたしは、口から泡を吐き失神し続けるびーこを小脇に抱え、空
中でスクーターを足場にしてさらにジャンプ。

馬鹿でかい音を立てて、そのまま学園の門に衝突するスクーター。

何とか門の頭上を超え、学園敷地内に突入、びーこをかばいつつ
地面へと不時着するあたし。

…… た、助かった、のか？

体中に痣を作りつつも、何とかその場で立ち上がり眼の前の光景
を確認する。

なにがどうなったのか？

あたしにはさっぱり分からねーが、眼の前のゾンビ達はその姿は忽然と消し、代わりにいつも通りの朝の通勤通学の光景が広がっていた。

やれやれ、どうやら助かったらしい。

「おい、起きろびーこ。学園に御到着しましたぜ、お客さん」

「ん、んみゅう」

ようやく眼を覚ますびーこ。はん、まったくいい気なもんだぜ。

ひと安心したところで、改めて、あたしは眼の前の光景を見渡す。擦り傷だらけのあたし。

傷一つないびーこ。

大破したあたしのスクーター。

半壊した学園の門。

今日はまだ月曜日。

あたしの憂鬱な一週間は、まだまだ始ったばかり。

…… だからあたしは、月曜日が嫌いなんだ。

大きな溜息をついたあたしは、びーこを連れて学園内へと向かうのだった。

END

第七話 「月光照らすはシリアルキラー」

第七話 「月光照らすはシリアルキラー」

皆さんこんばんは、びーこです。

現在の時刻は、草木も眠る丑三つ時。

今、私は、とある理由で英子ちゃんを尾行しています。

私は知っていますのです。

ここ最近、英子ちゃんがこの時間になるとマンションをそつと抜け出す事を。

勿論、私に内緒で。

… うーっ、英子ちゃんのばかばかばか。絶対許さないんですからね！

と、まあ、そんなわけで、こんな真夜中に私は英子ちゃんを一人でつけているのです。

正直言つてとても怖いです。恐怖です。

でもでも、私にとっては英子ちゃんに隠し事をされたり、英子ちゃんに見放されちゃうほうがよっぽど恐怖なのです。

幸い、今のところ英子ちゃんに尾行がバレた様子はありません。

それにしても英子ちゃんってば、さつきからどんどん人気の無い方へ進んでいってます。

ううう、暗いよー、怖いよー、寂しいよー。今にも何か出てきそうな、そんな雰囲気なのです。

最近、この町では嫌なニュースが飛び交っています。連続殺人鬼、シリアルキラーの出没です。

ホラーや幽霊、怪奇現象も確かに怖いですが、やっぱり一番怖い

のは人間。

被害者は既に数人。それも全て10代の少女。今、この町は混乱と恐怖の真っ只中にあります。

… 分かっています。そんな大変なときに、こんな時間に、それも一人で出歩くななんて自殺行為だつてことくらい。

それでも、それでも私は、英子ちゃんを放っておけない。英子ちゃんを信じたいのです。

そんな事を考えていたその時、確かに先程まで私の目の前を歩いていたはずの英子ちゃんが、忽然とその姿を消してしまいました。

「英子ちゃん？ そ、そんなー」

見失った？

慌てて走り出そうとしたその瞬間、後頭部を激しい衝撃が襲うと共に、私は、唐突に、その意識を失ってしまいました。

… ああ、私って、ほんと馬鹿。

「とつとと消えやがれ！」

あたしは、今夜7匹目となるその獲物に、蒼く煌くナイフを突き立てた。

獲物は、音もなくその場で倒れ、やがてびくりとも動かなくなつた。

「へっ、ざまーみろだぜ」

あたしは、息を切らせながらその場に座り込む。

ふと、昨日降った雨によって出来た水溜りに、自分の顔が映りこ

む。

……… 我ながら何てツラだ。こんな顔、びーこのやつには絶対みせられない。

何故なら、今のあたしは、あたしが先程まで相手をしていた輩より、よほど酷い顔をしていたからだ。

どうやらあたしは、笑っていたらしい。

醜く顔を歪ませながら、ケタケタと笑っていたらしい。

… あたしは、こんなところで何をやっている？

そんな取りとめも無い自問自答を始めた矢先、あたしの眼の前に、あたしを一気に現実へと引き戻す光景が飛び込んできた。

どういうことだ？

迷っている暇も、眼の前の光景を疑う暇も無い。あたしは、無我夢中で走り出した。

糞ッ、頼む、間に合ってくれ。

「知っているかな、お嬢さん。人間の肉は酸っぱくて食べたもんじやない。一般的にはそう言われているだろ？ あれは嘘だ」

ここはどこかの廃屋でしょうか？

頭が痛い。気分が悪い。そして、動けない。

私は、そんな最低の状態で眼を覚ましました。

でも、何より一番最低なのは、眼の前の相手が、件のシリアルキラーだと、すぐにそう確信出来てしまった事です。

いつそのこと悪い夢であれば、どれだけ良かった事か。

私は、目の前に横たわる数人の少女とおぼしき遺体を一瞥しながら、そう思ったのでした。

おぼしき。私がそんな曖昧な表現を使ったのには、勿論理由があります。

私は、吐き気と震えを押し殺しつつ、再び目の前の、かつて少女であった物に眼を向けました。

人間、心の底から絶望と恐怖で満たされると、涙すら出ないものなのです…。

「僕はね、自分で試してみないと気がすまない性質なんだよ。何でも実験して、実践して、納得しないと気がすまない性質なんだ。だからさ、食ったんだよ、僕は」

腕、足、胴、そして頭。

眼の前の少女達の亡骸は、私の見る限り、そのどれもがどこか一部を欠損し、苦痛に歪んだ表情を浮かべていました。

まるで、生きながらにして、体を食いちぎられたかのように、苦痛と恐怖に満ち満ちた顔をしていました。

「結論から言うかね？ すっぱいだなんてとんでもない。きつと、僕の選別眼が良かったんだろ？ね。君くらいの年齢の少女の肉つてやつはね、… 甘いんだよ。嘘じゃない。全部本当のことさ。だって、ほら、こんなに実験… いや、実食したからね」

そう言って一歩ずつ、まるで私のどこを食べようかと値踏みするように、男はゆっくりと私に近づいてきました。

「ごめんね、英子ちゃん。今までずっと英子ちゃんに迷惑掛けてきて、助けられて、その結果がこれだなんて… そんなの絶対可笑しいよね。」

英子ちゃん、やっぱり私は最後までダメダメなものでした。

「今夜君に出会えたことは、僕にとって実に幸運だった。日本人の少女の肉は、酸っぱいどころか甘かった。確かにそれは実験から導き出した答えだ。それじゃ今度は、君のような外人の少女はどんな味がするのか？ それって、実に興味深いとは思わないかい？」

眼の前の男は、とうとう私の目の前までやってきて、興奮気味に私の頭を撫でるのでした。

英子ちゃんとはまったく違うその穢れた手で、私を撫でるのでした。

「特に、君のような透き通るように色白で、輝くような銀髪を持ったオッドアイの少女なんて、どんな味がするのか見当もつかないよ」

男はポケットから赤く染まったナイフを取り出し、私の顔に手をかけ、そして…

が、その時、静寂に包まれた暗闇を切り裂くように、あの人の声が響き渡りました。

「そいつはあたしも同感だ。けど安心しな、これから先、てめーにそれを確かめるチャンスは巡ってこない。永遠になー!!」

そんなセリフとともに、あたしの投じたナイフは見事殺人鬼の右肩に命中。

あたしは、バッドを片手にしながら、一気に殺人鬼の元へ駆けた。

「誰だ？ 僕の崇高な実験を邪魔するヤツは」

「はん、誰だと思う？ …… 言ってみる、あたしは誰だ！！」
あたしの振り上げたバッドを、コンバットナイフで受け止める殺人鬼。

「知らないな。興味も無い。だって君は、酸っぱいって言うより、激辛っぽいしね。残念だな、僕は辛いものが嫌いなんだよ」

「奇遇だな。あたしもためーみたいなのヤツが大嫌いなんだ」

威勢よく飛び出したのは良かったものの、あたしのバッドは尽くかわされていく。

逆に、あたしはヤツの攻撃を防ぎきれず、徐々に押されていってしまう。

ちっ、糞野郎のくせして、一撃一撃が早い。まるで頭のネジが何本か飛んじまつてるような動き。

いや、この惨状を見る限り、確実に飛んじまつてるんだろう。

だが、このままだと…。

「成る程、正義の味方気取りかい？ 言っておくが、僕は何も悪くない。ただ追求しただけ。納得したかっただけさ」

弾かれ飛ばされるバッド。

ただでさえ、あいつらとの連戦で体力が残ってねー状態。加えて、どうやら血を流しすぎちゃったらしい。やばい、ふらふらしてきた。「威勢良く登場したわりには、随分とあっけないんだね」

糞が、好き勝手いいやがって。こっちにはこっちの都合つてもんがあんだよ。

あたしは、足元に転がるあるものを確認した後、その場でしゃがみこんだ。

「… そんなに人の肉が好きなら、こいつでも食らいやがれ！」

あたしの足元に横たわる、腹を大きく裂かれた少女の遺体に手を突っ込み、その臓物を男の顔に思い切りぶちかます。

仏さんには悪いが、使えるものは何でも使うのがあたしの主義だ。ドス黒いその塊は、男の顔にぶちあたり、不気味な音を立てながら破裂した。

「がああつ、き、きさま」

「命の賭け合いに、奇麗だとか汚ねーなんて概念はねーんだよ」

よろめく男を尻目に、数歩引いた位置であたしは、精神を集中し始める。

「外面如菩薩： 内心如夜叉、鬼面仏心」

あたしは、懐から紅く煌く10本のナイフを取り出した。

「てめーがどこで何をしようが、どこで誰を殺そうが、あたしの知った事じゃない。勝手にやってくれ。正義を気取る気は全くねーかな。だがな、あいつだけは駄目だ。びーこに手を出す不届き者だけは、絶対に許しちゃおけねー。…さて、お仕置きの時間といこうじゃねーか。準備はいいか？ あたしはとつくの昔に、出来てるぜっ！！！」

紅い閃光を描きながら、あたしの放った10本のナイフが男の四肢に突き刺さる。

聴きたくもない男のきたねー断末魔が、月の輝く夜にこだまする。それと同時に、男は大の字でその場で倒れこんだ。ちなみに、そのナイフによる血は、一滴たりとも流れていない。

「あたしは、あんたと違って絶対に人間を殺したりはしない。いや、人間だけは殺せないのさ。そして感謝しな、代わりといつちや何だか、あんたのその 異端 を奪ってやった。つて、もう聴いちゃいねーか。まあいい、暫くそこでおねんねしてな」

あたしは大の字で横たわる男をスルーし、椅子に縛られ顔を真っ青に染めたびーこに駆け寄った。

「よお、びーこ。今夜は随分と妙なところで出会っじゃねーか。何だ、夜の散歩か？ まあ、言いたいことは山ほどあるが、とりあえず帰ろうぜ。そこらじゅう痛てーし、貧血でぶっ倒れそうだぜ」

そういいながら、びーこの口元に張られたガムテープを一気にはがす。

「ッつ。… ばかばかばかばかばかばかばかばかばか。英子ちゃんのバカー」

「おまえなあ、それが命の恩人に対して言うセリフか？」

「え、英子ちゃんこそ、いつもいつも、一人で何やってたんですか！ 私、凄く心配してたんですよ！」

成る程、合点がいった。それでわざわざあたしをつけてきたってわけか。

「つーか、あたしとしたことが、たかがびーこ程度の尾行にすら気がつかなかったのか。一生の不覚だなこりゃ。」

「いや、まあ、確かに何も言わなかったのは悪かったと思ってる。」

「ほら、この前のゾンビ騒ぎ覚えてるだろ？ あの時のゾンビの残党がこの辺りにいるって噂を小耳に挟んでな。所謂、後始末つてヤツだ」

「そうならそうと言ってくれれば良かったじゃないですか！ 私、私、てつきり……」

「ま、まあまあ、そう怒るな。話の続きは帰ってからにしようぜ。よし。今回はあたしも悪かったからな、ほら、特別におぶってやるよ」

そう言ってあたしが背中を差し出すと、びーこは素直にあたしの言葉に従った。

「英子ちゃんの、ばか」

びーこは、そう呟いたきり、何も喋らなくなってしまった。どうやら、緊張と恐怖から開放された事で彼女の疲労は臨界を突破してしまっただけらしい。

つまりは、ぐうぐうと、安心しきった顔をしながら、あたしの背中であつちまつたこと。

「……あたく、あたしはあんたの保護者だよ。」

「……そういや、保護者だった。まったく、やれやれだぜ。」

END

第八話 「電車の寝心地の良さは異常」

第八話 「電車の寝心地の良さは異常」

がたんごん。がたんごん。

オレンジ色の夕日に照らされながら、あたし達は揺れる電車の中にいた。

ここ最近のびーこの送迎には、もっぱら電車を利用している。何故かって？

理由は簡単。

あのゾンビ事件で、あたしのスクーターがスクラップになっちまったからだ。

一応修理に出しちゃあいるが、当然ながら時間が掛かる。

つーわけで、その間の足として、あたしとびーこはこのローカル線を利用しているのだった。

まあ、そんな事情はどうでもいい。

この際、あたしが言いたいのは一つだけだ。

…… 電車って、何でこんなに眠くなるんだろう。

あたしに寄りかかりながら、すうすうと寝息を立てるびーこ。

そんなびーこを見つめつつ、あたしの瞼もまた、いつの間にか降りてきて…

ふと、目を覚ますと、車窓はオレンジ色から闇色へとその姿を変えていた。

くっそ。

どーやら、びーこにつられてあたしまで眠っちまったらしい。

慌てて窓の外を確認する。

あたしの目に飛び込んできたのは、全く見たことの無い風景。

… 最悪だ。完璧に乗り過ごしちゃった。

とはいえ、ここで毒づいていても仕方が無い。一先ずあたしは、隣で未だに眠ったままのびーこを揺り起こすことにした。

「おい、起きろびーこ。どーやらあたし達、随分と寝過ごしちゃったようだぜ… っであたしの服によだれをたらすんじゃない!」

「ふええ? ああ、お早うございます英子ちゃん」

そう言つて、あたしの服で垂れ流しのよだれを拭くびーこ。

「だああああ、垂らすのも拭くのも禁止だバカ。つたく、しょーがねーな。ほら、こいつを使え」

あたしはポケットからハンカチを取り出し、びーこに手渡す。

ファンシーなウサギちゃん柄のハンカチで、口元をぬぐうびーこ。

…… 言つな。何も言つな。

「え、英子ちゃん、英子ちゃん」

ぐいぐいとあたしの袖をひっぱるびーこ。

「あ? 今度は何だ? トイレか?」

「違います! あ、あああ、あれ、あれを見てください」

そう言つてびーこが指し示すその先にあるもの、それは。

車内に佇む複数の骸骨、シャレコウベ達の姿だった。

「じ、こいつは…」

焦ったあたしは、改めて車内を見渡す。

先程まであたし達と一緒にいた乗客達は尽くその姿を消し、代わりにいるのは何故か骸骨軍団。

それだけでも失神したくなるくらいの事態だが、問題は車内だけにとどまらない。

車窓から見える風景。

さっきあたしは、見た事が無い風景って言った。

どうやら、早くもその言葉を訂正せざるを得ないらしい。

窓から見えるその風景は、見慣れぬ風景どころか、そもそも日本の風景であるかも怪しい。

辺り一面、水面。視線の先にはレールすら存在していない。

この電車は、そんな水面の上を、まるで浮かぶようにして進んでいた。

ジーザス。

これらから導き出される答え。それは。

「英子ちゃん、私達…… 死んでしまったのでしょうか？」

「バカ言っつんじゃない。そんなわけねーだろ…… たぶん」

少なくともあたしは、誰かに殺された記憶はない。

ないっつーか、そんなのあってたまるかよ。

恐らくだが、これは黄泉列車だ。

死者を黄泉の国へと運ぶため、一路、三途の川をひた走る黄泉列車…… なのだろう。

憶測の域をでねーのがもどかしいが。

「一先ず様子を見て回ろう。このままこいつに乗ってちゃ駄目な気

がする」

震えるビーこにぎゅっと腕を掴まれながら、あたし達は列車内を徘徊する。

「ほねほねさんが一人、ほねほねさんが二人、ほねほねさんが三人」「シャラップ！ いちいち数えんていい。つーか、ほねほねさんって何だよ。そんな可愛らしい見た目じゃねーだろ、これ」

シャレコウベ共は、何故か皆一様にうなだれ、俯いている。

まあ、これからあの世ってやつに逝くわけだし、そもそも浮かれているヤツがいるわきゃねーんだけど。

そして、暫く見て回ってもう一つ分かった事がある。

こいつらは、一様にして五体満足では無いという点。

腕の骨の無いもの、足の骨の無いもの。ひび割れているもの、砕けているもの。

大なり小なり、こいつらには欠損が見受けられた。

恐らく、死ぬ直前に負った傷や怪我なのだろう。まあ、それらが死因かどうかは判断しかねるが。

成る程、これはつまり…。

怖いもの見たさってやつなのだろう。ビーこはそんなシャレコウベ達を先程からじーっと見つめている。

これだけヒントがあるんだ。流石のあいつも、気がつくレベルの筈。

あたしは、ビーこの口から真相が語られるのを待った。

「英子ちゃん、私、分かりました！」

ほら。きた。

「よし。聞かせてもらおうじゃねーか、ビーこの回答ってやつを」
自信満々に頷いた後、ビーこはその口を開いた。

「私達、ほねほね星人さんの」

「違う！ ぜんぜん違う！ ふざけんなエセシスター」

「え、エセシスターじゃありません。ぷちシスターです」

いや、意味分からんから。

「時に落ち着け。そして聴け。良いか？ あたしたちはこうなる前、何処で何をしていた？」

「学園から電車で帰る途中、その、あまりにも気持ち良くなって寝てしまったような、そうでないような」

「いやいや完璧に寝てたからな？ むしろあたしより先に寝てたからな？」

そんなあたし達の漫才のようなやりとりを見て、カタカタと笑うシャレコウベ達。

笑ってるんだよな？ あれ。

「でもでも、がたんがたんって定期的に揺れて、どうして電車に乗ると眠くなってしまうんでしょうか？」

いや、知らねーよ。

確かに眠くはなるが、今そんなことはどうでもいい。

「どーやらあの電車。あたし達が眠りこけちまつてる間に事故を起こしたらしいぜ。しかも相当でかい」

そう言っただけは、後方車両を指し示す。

「見るよびーこ。後ろの車両がないぜ。まるで千切れたみてーに、連結部分が壊れてる。しかもこの列車、よくみりゃあたし達の乗ってた列車そのものじゃねーか」

何というか、全体的に黄泉仕様になっちゃいるが、確かにあたし達の乗っていた列車そのものだった。

「ううううう、やっぱり皆死んじゃったんですか？ 英子ちゃんも死んじゃったんですか？」

… まったく、ちよつとは自分自身の心配もしろってんだ。

「安心しな。あたし達は死んじやいねーよ。びーこはそう簡単に死ぬたまじやないだろ？ あたしだって、そう簡単に死ぬるわけがな

い

「今までやってきたことを考えるのなら、あたしは間違いなく地獄
逝きだろうし。」

「たく、やれやれだぜ。」

「それによ、幸いあたし達の姿はシャレコウベになっちゃいねーだ
ろ？ こいつがあたし達がまだ生きてる何よりの証拠だ」

「そう、まだ、今は。」

「骨でないあたし達は、まだかろうじて生きている。」

「だが、断じて談笑してられるような状況じゃない。」

「つまり？」

「つまり、あたしたちは生死の境にいるってことさ。かなり曖昧で
中途半端な位置だ。それこそ、生身でこんな異様な列車に紛れこん
じまうくらいにな」

「あたしとびーこは死んじやいない。だが、確実に死に掛けている。
というか、このままここにいれば、マジで黄泉の国ってやつに逝
っちゃうかもしれない。」

「つーか、あーだこーだと言ってる時間は、もはや無い。」

「びーこ。あたしに考えがある」

「それは危険な事ですか？ 英子ちゃん」

「…… こいつ、どういうわけかこういう時の感だけは良いんだよ
な。」

「危険かどうかは考え方による。で、簡単に言つとだな。あたしは
こいつで自分を刺す」

「そういつてあたしが懐から取り出したのは、一本のハンターナイ
フ。」

「これもあたしのコレクションの一つで、その禍々しいまでに研ぎ
澄まされた刃先が特徴の一品。」

「今日に限ってこれを持って来たってのは、果たして幸運なのか不」

幸なのか。

だがまあやはり、迷っている時間は無い。

「実のところ、あたし達はまだ眠っているのさ。あたし達の魂は現実世界では眠ったまま。だから、こいつでサクツと切って目を覚ます。無理やり目を覚ます。言わば、目覚まし代わりだ」

自分で言っておいてなんだが、世にも恐ろしい目覚ましがあったものだ。

「で、でもそんなことしたら英子ちゃんが」

「分かってる。ただでさえ、現実世界のあたし達がどんな事になっているか想像もつかねーからな。勿論手加減はするつもりさ。で、あたしが現実世界で目をさましたら、びーこを病院へ叩き込む。以上だ」

「でもでも！」

未だ納得をみせないびーこ。だが何にしる、選択肢はない。

これは、あたしにしか出来ない方法なんだ。

「でもは無しだって、いつも言ってるだろ？ 考えてみるよ。こんな荒療治、あたしにしかできねーだろ？ ましてや、あたしがびーこを刺せるわけがない」

だからこそ、これはあたしにしか出来ないやり方。

「時間がねー。びーこの許可を貰ってちゃ日が暮れちまうどころか、本当に逝っちまいかねないからな」

今回は、かつての鏡の世界に迷い込んだときは訳が違う。

このナイフで刺すのは、あたしの体、魂そのものなのだ。一歩間違えば、正にトドメになりかねない。

あたしは、最後にぼんぼんとびーこの頭を撫でた後、ナイフに力を込め… 自らのわき腹に突き立てた。

そして、突き立てた後に後悔した。

これ、目覚まし代わりになんだから、別に刺す所は腕でも足でも良かったんじゃないだろうか、と。
カツコつけて腹に刺しちまったけど、その必要は全くなかったんじゃないだろうか、と。

ザ・後の祭り。

あたしは、苦笑いを浮かべながら、目を瞑った。
目を覚ますため、目を瞑った。

地獄絵図。

むしろ、さつきまでの黄泉列車内が天国にさえ見える。

あたしの眼に飛び込んできたのは、正にそんな表現がしっくりくる、そんな凄惨な光景だった。

どう鼻屑目に見ても、この中に生きている人間がいるとは思えなかった。

無造作に床に転がる人体のパーツ。いや、パーツと言うのも憚られる、生物の肉片、元は何かだった肉片達。

これまで、びーこに巻き込まれ様々な怪奇現象や、オカルト、魑魅魍魎や超常現象の類に出くわしてきたが、この光景は、明らかに異質だった。

床が真っ赤に染まっている。

血生臭いとは、こういうことを言うのだろうか。

あたしは、眼の前の光景に聊かの吐き気と頭痛を覚えながらも、びーこを探すため、何とか自分を奮い立たせる。

ガラス片が幾つも突き刺さり、打撲や擦り傷は幾つもあるものの、不幸中の幸いにも、一先ずあたしの体に致命傷や四肢の破損はない

ようだった。

勿論、黄泉列車内で自分で刺した傷を除いて、だ。

ビーこ、あんたは今、どこにいる？

わき腹に応急処置を施した後、あたしは辺りの搜索を始めた。

が、あたしが探すまでもなく、ビーこはそこにいた。

白い肌を紅く染め、ビーこは確かにそこにいた。

あたしは、自分の鼓動が早くなるのを感じた。

…これは、どういうことだ？

あたしは かつて人であったもの達 を丁寧に払いのけ、ビーこを抱え起こした。

ビーこの体は鮮血により赤く染まっていたものの、それはビーこの血ではない。

それどころか、驚くべき事にビーこのその体には、ただのかすり傷一つさえ無かった。

こんな異常事態において、大事故において、凄惨な現場において、ビーこの体にはかすり傷一つさえ無かったのだ。

そんな、あたしの見た光景。それは……

まるでビーこを護るかのように、ビーこの周りに壁を作るかのよ
うに、幾人もの人達が彼女の周囲に折り重なっていた。その様子は
さしずめ肉の壁。人間による壁、ドームである。

果たしてそれが何を意味しているのか？

残念ながら、今のあたしはそれを考える時間も余裕も持ち合わせ
てはいない。

改めてあたしは、そんなびーこの恩人達に一礼をした後、びーこを連れて列車から脱出した。

そこからの記憶は、正直よく覚えていない。

気がつけばあたしは病院にいて、むしろびーこに看病される結果となった。

勿論、原因は腹のあの傷だ。

どうやらあの車両で助かったのは、あたしとびーこだけだったらしい。

原因は機体の老朽化による脱線事故。そんなツマラネー事故。

それでもあたしは、あの時見た全ての光景を、決して忘れる事が出来ないだろう。

あの光景の意味を、あたしとびーこが理解出来る日がくるかどうかは別として。

だからこそ、今、あたしが言える事はたった一つだけ。

暫くは自転車通学にしよう。

そっ心に固く誓ったあたしなのだった。

END

第九話 「油性マジックは永久に落ちない」

第九話「油性マジックは永久に落ちない」

「むにやむにやー、英子ちゃん、もー食べられないよー」

漫画やアニメの中でしか聞いた事が無いような、そんなテンプレートなセリフを吐きながら、ビーこはすやすやと寝息を立てている。食いたただけ食って、言いたただけ言って、遊びただけ遊んで疲れたらその場で寝る。

お前はガキか！ そう突っ込みをいれたいのを何とか堪えるあたし。

ここで起こしちゃうのも無粋ってもんだ。

ビーこが一体どんな夢を見ているのか？ んなことは別に知りたくもねーし、そもそも興味が無い。

まあ、確かに興味はねーが… ったく、幸せそーな顔しやがって。あたしは、そんなビーこの横顔を暫く眺めた後、起こさないよう注意しつつ、彼女をそっとお姫様抱っこした。

「こんなところで寝たら風邪ひいちゃうだろーが。ただでさえお前は、お嬢様体質ってやつなんだからよ」

こいつの体調管理も、認めたくねーがあたしの仕事の一部と言えなくも無い。

あたしの仕事がお守だと揶揄されるのは、とどのつまりこういふところにあるんだろうな。

まあ、愚痴っても仕方ないが。

あたしは、ビーこをそのままゆっくりと彼女のベッドルームに運んだ。

起こさないよう注意していたとはいえ、相変わらずぐっすりと眠り続けるびーこ。

つーか起きる気配は微塵も無い。

ベッドに寝かせてやった後も、逆に気を使ったのがアホらしいくらいに、ぐっすりと涎を垂らしつつ眠るびーこ。

そんな顔を見て、あたしは…………… やべえ、無性にイライラしてきた。

はぁ。

つーか何であたしは、こんなお嬢様のお守なんてやってるんだろう。

今でも、この仕事を引き受けた自分自身を、信じられなくなる瞬間がある。

どう見てもあたし向きの仕事じゃねーし、どう考えてもあたしの柄じゃない。

だからってわけじゃ全然ねーが、たまには「こんな事」をし
たつて、決して罰はあたらねー等。むしろ許されて当然の行為だと
言える。

だからこそ…………… あたしは、ポケットからあるものを取り出した。

びーこが眠ってから数時間、時刻は深夜。

基本的に夜行性であるこのあたしも、いい加減眠くなるような深夜帯。

辺りは不気味なくらいに静まり返っている。

時間帯を考えれば当たり前のことなのだが、何分びーことの日常に当たり前や常識なんて言葉は通用しない。

人が想像できる全ての出来事は、実際に起こりうる現実である。

なんて格言もあるが、びーこの場合は正にその逆。

あたしが想像も出来ねーようなことばかりが次々と起こる。そんなおかげで、退屈しない、退屈知らずの日常生活ってやつが今も続いている。

だが、どうやら今夜は、そんな非日常とは無縁の夜らしい。あたしだって人間だ。いくら夜行性であるとは言え、1日仕事をこなしてきた身である。そりゃー、疲労もたまると、眠くもなる。

つーわけで夜も更けた… そろそろベッドに向かうとするか。あたしがそんな結論に至りソファから立ち上がった、まさにその瞬間、部屋のドアが勢い良く開かれたのだった。

忌々しい事に、あたしが眠りの世界へこの身を投じるのは、まだまだ先の話らしい。

「英子ちゃん英子ちゃん英子ちゃん」

「英子ちゃん英子ちゃん英子ちゃん」

いつものびーこのすつとんきょーな声が、何故か今日に限って二重に聞こえる。

こだまだろうか？ いや、むしろ仕事のしすぎて幻でも見てるっ
てか？

つーか、これ、声だけじゃなく、びーこの姿まで二重に見える。

…… 成る程、いつの間にかあたしは寝ちまつたらしい。

つまり、これは夢だ。夢に違いねえ。

「時にびーこ。スマンがあたしのほっぺをちよいとつねってみてくれねーか？」

あたしのそんな呼びかけに対し、二人のびーこは、それぞれ両サイドからあたしの頬を思い切りつねる。

「い、いふあいふあい、もういいふあらもうふあふあっふあ……」

って、もういいつってんだろーがよー！

あたしは、赤く腫れた頬をさすりながらそう叫んだ。
実に残念な事に、こいつは夢じゃねーらしい。現実。よりもよ
って現実だ。

よーするにいつもの事、いつもの事態って事らしい。
びーこのやつ、またよからぬものを惹きつけやがって。
まったくもってやれやれな事態だぜ。

「あのねあのね、私、目が覚めたら隣に私が居て、でも私もここに
いるから、私が二人になっちゃいました」

「あのねあのね、私、目が覚めたら隣に私が居て、でも私もここに
いるから、私が二人になっちゃいました」

見事に八モるびーこ達。

騒がしさが2倍なら、苦勞は2乗。あたしは既に、頭が痛くなっ
ていた。

「あーあー、何となく事態は飲み込めたから、てめーら騒ぐな。い
いか？ 確かにこの世には自分と似た姿の人間が3人はいるなんて
逸話があるが、普通、人間は分裂したり分身したりしねーんだよ。

つ、ま、り。お前ら、どっちかが偽者ってわけだ」

恐らく、ドッペルゲンガーとかそんな類だろう。

この手のやつらは、やる事が単純なだけにその力は洗練されてい
て厄介だったりする。

ぶっちゃんけ、瓜二つってレベルじゃねーぞ、これ。

背格好はおるか、声も髪型も、御丁寧に服装まで一緒ときている。

とはいえ、解決方法事体は至ってシンプル。

どっちかが偽者だというならば、その偽者をぶった切ってやれば
それで終了。

簡単だろ？

まあ、問題はどちらが本物のびーこで、どちらが偽者野郎かって
ことなんだが。

「うええええん、英子ちゃん。私が本物です、あっちが偽者なんですー。信じてよー」
「うええええん、英子ちゃん。私が本物です、あっちが偽者なんですー。信じてよー」

…………… さっぱり分かん。

何から何まで一緒の二人。びーびーと泣くその姿まで一緒なのだから始末が悪い。

一瞬、別にこのままでもいいんじゃないかなんて思ったものの、一人でも糞面倒で苦勞のたえないこのびーこの子守が、単純に2倍になったらと思うとゾッした。

それだけはまずい。

一刻も早く解決しねーと。あたしの命に関わる。

あたしは、何かヒントを探ろうと、手で顔を覆いびーびー泣き叫ぶ目の前のびーこ達を、必死に凝視した。

服装は二人ともパジャマ。ふりふりのフリルのついた、胸焼けがしそうな感じの可愛いパジャマ。

肌は二人とも透き通るような白。白人のガキ特有の高級陶器のような白さ。

顔はまるで人形のように整った小さな顔。今は、その長い金髪を揺らしながら目を腫らして泣いている。

ん？ 顔？ ……………… !!!

見つけた！ 圧倒的で、確実な、二人のびーこの相違点。

間違ねえ。まさか「アレ」がこんなところで役に立つとはな。流石はあたしだけ。

さて、それさえ分かっちゃえば話は早い。とつとつこんな茶番を

終わらせて、ベッドにダイブしようじゃねーか。

あたしは、ポケットをまさぐり、手に触れた1本のマジックペンを取り出した。

ああ、そうか。今日はナイフを携帯してなかった。

仕方ねーな。こうなったらこいつでカタをつけるしかない。

まあ、格好はつかねーが、何だかんだいっても今回の場合、これはこれで御詠え向きかもしれない。

あたしは、一本のマジックペンを片手に持ち、ゆっくりと精神を集中し始めた。

「月は村雲花に風、月夜に提灯夏火鉢。… 今宵の我が月は、初月」
直後、あたしの手にしたマジックペンが青白い光に包まれ、やがてビームサーベルよろしく、その光の刀身をすらりと伸ばした。

「へえ、悪くねーな。… さて、それじゃあ、準備はいいかよ？」

びーこ」

あたしの光剣を見て、がくがくと震え言葉も出ない様子のびーこ。

… たたくしよーがねーな。

「びーこ。心配すんじゃないよ。あたしはあんたのお守役だぜ？
と言っても、あたしがあんたの面倒を見ているのは、何も仕事だからってだけじゃない。前にも言っただろ？ あたしは、嫌いなやつとわざわざ一緒の部屋で暮らしたりしない。あたしは、あんたのことを特別だと思ってるんだ。びーこの事を気に入ってるんだ。それともびーこは、そんなあたしのことを信じてくれねーのか？」

そんなあたしのクサイセリフに対し、物凄い勢いで首をフルフルと横に振って答えの代わりにするびーこ。

よし。びーこの覚悟も決まったようだし、もう一踏ん張りしてやるか。

あたしはニヤリと口元を歪ませながら、一方のびーこに対し、思い切りペンセイバーを振り下ろした。

例え見た目がビーこそつくりだろうと、それはビーこではない。
あたしが守りたいのは、ビーこの外見や外側なんかじゃない。
だからあたしには、躊躇も戸惑いも一切無かった。

あたしの一撃を受けた偽ビーこは、青白い光に包まれつつ、やがてその正体である黒い影のような体を露にしつつ、音も無く闇夜に消えていった。

二つに一つ。

あたしの選択は、どうやら正しかったらしい。

ほっと胸を撫で下ろしたあたしに向かって、ビーこが涙と鼻水まじりのぐしゃぐしゃ顔を携えて飛び込んできた。

「私、わたし、英子ちゃんのこと信じてましたから。英子ちゃんならぜええつたいに本物の私を選んでくれるって信じてましたから。私たちは以心伝心だって信じてましたから」

「あ、ああ。んなもんだら。なんつってもあたしとビーこの仲間だからな。あ、あはははは。よし、ビーこ。今夜はもう遅い、一緒に寝ようぜ、な？」

「はい！」

そう言って、眩しいくらいに純真で無垢で穢れの無い笑顔をあたしに向けるビーこ。

…………… 言えない。

ビーこが寝ている間に、このマジックペンで、その白い額に「肉」というイタズラ書きをしたなんて、口が裂けても言えない。

そして、そんな腹いせレベルのイタズラ書きが、本物と偽者を見分けるための決定打だったなんて事実、言えるわけがない。むしろ言わぬが花つてやつだろ、そんなのは。

終わりよければ全てよし。無事解決したんだから、そんなことは

些細な問題。

そうなる？

END

第十話 「タイムカプセルはパンドラの箱」

第十話「タイムカプセルはパンドラの箱」

とある休日の午後。

ビーこが厄介なのは、何もその才能だけが原因ではない。

ヤツの疑う事を知らない、そして何にでも首を突っ込みたがる性格。

これこそが、ビーこのビーこたる由縁。

だからこそ、ビーこがこんなセリフを吐きながらニコニコ顔であたしの前にやってきたとしたら、あたしは即座に臨戦態勢に入らざるを得ないのだった。

「英子ちゃん！ 見てください、これ。私、すごいもの拾っちゃいました！」

そうやってビーこがこれ見よがしにあたしに見せ付けるもの。

それは、一つの薄汚れた化粧箱だった。

何を隠そう、ビーこには収集癖がある。ところかまわず興味を引いたもの、自分の知らないものを拾ってきては、こうして自慢げにあたしに見せるのだ。

これだけは、あたしが何度説教を加えても治らない。治るところか日に日に重症化しているから性質が悪い。

「で？ 今度は何を拾ってきたんだ？ なんつーかまた、怪しげな

箱だな。触るべからずってオーラがむんむんしゃがる」

「何を言っているんです英子ちゃん。そこに山があったら登る。ひもがあつたらひっぱる。スイッチがあつたら押す。箱があつたら開ける。ね？」

いや、何が ね？ なのかあたしにはさっぱり理解出来ない。

「びーこ、あたしの話聞いてたか？ 見るからに怪しいって言ってるんだよ、それ」

あたしにそれと称された件の箱を抱えながら、びーこはその白い頬をぶくーっと膨らませる。

あくまで、あたしの意見を聞き入れるつもりは無いらしい。

「ぶーぶー。怪しくなんてないですもん。きつと私達の想像もつかないようなものが入っているにちがいありません！」

「あーそうですか。つーかよ、一体何処で拾ってきたんだ？ ちょっと散歩してくるって言ってたが」

「はい、近所の土手に埋まってました」
は？ 埋まってた？

それはもう怪しいってレベルじゃない。十中八九ヤバイ。

間違はなくパンドラの箱ってやつだ。

「待てびーこ。いいか？ それは罠だ。孔明の罠だ。ゼーったいに開けるんじゃない、今すぐ元の場所に戻してこい」

が、時既に遅し。

眼の前のびーこは、何の躊躇もためらいもなく、その箱を……
開けた。

こんなことから、昼寝なんてしてねーであたしもついていくべきだった。

後悔先に立たずとはまさにこのこと。

一先ず、いきなり爆発したり、中から煙が出てきてばーさんにな

つちまうなんてオチはないらしい。

代わりにあたし達の眼に飛び込んできたもの、それは、一通の手紙と、小さな黒い箱だった。

「手紙？　おいおい、ますます怪しいぜ、これ」

「では英子ちゃん、そちらの手紙は英子ちゃんにお任せします。代わりに、こちらの黒くて四角い箱は任せてくださいね」

「やれやれだ。まあ、開けちゃったもんは仕方ねーな。とりあえず手紙を読んでみるからよ、ぜーったいあたしの許可無くそっちの箱を開けるんじゃないぞ」

そんなあたしの忠告に対し、じーっと黒い箱を見つめつつコクコクと頷くびーこ。

駄目だコイツ、あたしの話なんか聞いちゃいない。すっかりブラツクボツクスの虜ってやつじゃねーか。

とはいえ、ここまでできたらもう後戻りは出来ない。

あたしは、溜息を洩らしながらも件の手紙に目を通す事にした。

「んじゃ読むぜ？　えーっと、なにになに……　この箱を見つけてくれた方へ、これは、ワタシのタイムカプセルです」

あ？　タイムカプセル？

「お、おい、やっぱ開けちゃまずかったんじゃないか？　タイムカプセルっていったらあのタイムカプセルだろ？　幾らあたしでも、

そんな他人様の大事な思い出ってヤツを踏みにするのは趣味じゃねーぜ」

「英子ちゃん、続きを」

びーこはいつもの調子と異なり、やけに真剣な顔つきで短くそう言った。

そんな彼女に内心驚きながらも、仕方なくあたしは続きを読む。

「なにになに……　ワタシはもう、疲れました。何故ワタシが、ワタシだけがこんな目に逢わされるのか？　この世界は、理不尽で満ちています」

何だこれは？

タイムカプセルにしちゃ、やけに暗いつつーか、えらく恨み節つーか。

とはいえ、続きが微妙に気になるのも事実。

あたしは懲りもせず続きを読み上げる。

「非情に遺憾ながら、ワタシは自ら命を絶つ事を選びました。これ以上、こんな生活に耐えられない。心も、体も、限界なのです」

ところどころ滲んだその文字を読むうちに、何だかあたしまでブルーな気分になってきた。

隣のびーこの様子を伺うと、やはり先程の真剣な表情を浮かべながらも、未だにブックボックスを凝視し続けている。

びーこがそこまでこのパンドラの箱に惹かれる理由は分からねーが、あたしはさらに読み進める。

「だから、ワタシはこの箱を遣します。この箱を見つけたシアワセな誰かさんのために。この箱にワタシの……………」

……………
嘘だろ？

続きを読んだその先、あたしは、思わず固まった。

そして、思わずその口を止めた。いや、止めざるを得なかった。

「英子、ちゃん？」

そんな様子を不審に思ったびーこが、その箱に手をかけながら、あたしの顔を見上げる。

こいつ、まさか開ける気か？

駄目だ、それだけは駄目だ。ぜったいに駄目だ。何があっても、それだけは。

「どけっ、びーこ」

あたしは、ブックボックスに手をかけたびーこを払いのけ、懐

からいつものナイフを取り出し精神を集中させた。

「月は村雲……… って、まどろっこしい。悪いな、今はカッコつけてる場合でも、体裁を気にしてる場合でもない」

あたしは、何かを叫んでいるびーこを無視して、その箱に蒼く煌くナイフを突き立てた。

瞬間、箱はドス黒いオーラを放ちながら徐々に薄れゆき、やがてその姿を完全に消した。

恐らくだが、在るべき場所へ、元の場所へ還っていったのだろう。

……… 一先ずは、これでいい。これでいいんだ。

「な、何事ですか英子ちゃん？ 手紙には何て書いてあったんですか？ 何で箱を刺しちやったんですか？ 箱には何が入っていたんですか？ ねえ、英子ちゃん、英子ちゃんってば！」

大粒の汗を滲ませながら、あたしは、眼の前のびーこの頭をぽんぽんと二度三度撫でて諫める。

何て書いてあったかだと？

そんなの、言えるわけねーだろ。

絶対に言える訳がない。

手紙の主が… 差出人がびーこだったなんて、そんなの言えるわけねーだろ。

その上、手紙の最後に書かれていた日付は今から数年前。丁度、あたしとびーこが出会った頃の日付だった。

とはいえ、少なくとも、びーこはこの箱について何も知らない様

子だった。

もしかすると覚えていないだけ、忘れてしまっただけなのかもしれないが。

少なくともこれが、単なるビーこの悪戯とは思えなかった。

眼の前のビーこが、これを書き、そして埋めただなんて思いたくなかった。

タイムカプセルという名の、こんな、こんなパンドラの箱を埋めただなんて思いたくなかった。

それでも、ビーこがこの箱に惹かれ、どこからともなく持ち帰って来たのも事実。それが意味する事実は…。

それからあたし達は、あたし達にしては珍しいくらいのじくじく平穏な休日の午後を過ごした。

ビーこは、箱の事などすっかり忘れてしまったように、無邪気に笑っていた。

そんなビーこを見守るあたしもまた、事実から目を逸らすかのよう一緒に笑った。

まるで、何事も無かったかのように。現実から目を背けるように。いや、これが現実だなんてあたしは認めない。絶対に。

そんなあたしとビーこが、この出来事の本当の意味を知ることになるのは、まだ、随分と先の話。

それはまた、別の話。

だから、あの箱の中身はあたしだけの秘密。

少なくとも、今は、まだ。

END

第十一話 「誰か口癖をいじめるのよ」 (前巻)

第十一話 「鎧は口ほどにものを言ひ」

第十一話 「鎧は口ほどにものを言ひ」

気がつくにあたしは、真っ白な空間に佇んでいた。

ひたすらにどこまでも真っ白でただっ広い、何も無い虚無の空間。

ここは、どこだ？ そもそもあたしは、何でこんなところにいるんだ？

そんな疑問があたしの脳を支配する中、突然、背後に重たい金属音が響き渡った。

音の発生源へ振り返り、その光景を見た瞬間、あたしはこの状況を理解した。

ああ、そうか。またどっかの馬鹿が、びーこに惹かれちゃったってわけか。

あたしは、大きなため息を一つついた後、改めて目の前の状況に視線を走らせる。

まるで、御伽噺の西洋の城にでも出てくるような大きな玉座と、そこに座るびーこ…そして、その傍らに直立する何故か首の無い西洋騎士の鎧。

首なし騎士。

最悪だ。

確か、アイルランドに伝わるケルト神話の魔物。死を予言する者、人間の魂を狩る者なんて呼ばれる鎧野郎。所謂、デユラハンってやつだ。

相手は伝承憑き。いつものネームレス、名無しの悪霊の類とは比べ物にならねー存在。

スフィックスの時同様、もしもガチンコ勝負にでもなるうものなら、あたしの力で何とかなるかどうかは……。

びーこは玉座にその体を預け、ぴくりとも動かない。どうやら、気を失っているらしい。

あたしが、必死になって最善の手に考えを巡らせていると、首無し騎士がその金属音を響かせながら近づいてきた。

そして、あたしの真正面。約5メートルほどの距離のところ立ち止まる。

… あたしには分かる。

この甲冑騎士に顔は無いが、今、こいつは確かにあたしを睨みつけている。

その鋭い眼光で、あたしの眼を、真正面から見据えている。

全身から嫌な汗が流れ出すと共に、多量のアドレナリンが分泌される。

あたしは、自分が震えている事に気がついた。

そして、自分が笑っている事に気がついた。

そんなあたしの態度を確認した首無し野郎は、どこから取り出したのか、洋風の手袋を地面へと投げつけた。

手袋？ おいおい、上等じゃねーかコイツ。

思わず笑みが零れるあたし。

つまり、これは決闘だ。

あたしは、今この首無しナイトに決闘を申し込まれたのだ。
勿論、件の眠り姫、ビーこを巡ってだ。

これまで、ビーこに魅入られた魑魅魍魎、オカルト、超常現象、
変態の類はごまんといた。

あたしは、そんなやつらを容赦なく葬ってきたし、そもそもあいつらは、節操も礼儀もプライドも持ち合わせちゃいない。

だからこそあたしは、眼の前の光景に驚愕し、心を躍らせている
のだった。

こいつは間違いなく今までの類とは違う。こいつは、ビーこに魅
入られながらも、その理性の光を失っていない。

そして何より、こいつの放つ禍々しいくらいに冷たいオーラは、
少なくともあたしの闘争心に火をつけるには充分だった。

そのときになってようやく、あたしは腰に一振りの日本刀を携え
ていることに気がついた。

それは、あたしの部屋にある中で一番の業物。

血と呪いに塗れた曰く憑きのじゃじゃ馬。

ちなみに、あたしがこの問題児を使用したのは過去に一度だけ。

まあ、そのときは、思い出したくもないので割愛するが。

とにかくそれ以来、あたしの部屋に札付きで封印を施してきた代
物。

それがなぜ今、あたしの腰にあって、なぜ、この空間に存在して
いるのか？

…… いや、今はそんな下らねーことを考えるのはやめよう。

今は、この「秋艶」があたしの腰にある。その事実だけで充分だ。
あんな首無しのバケモンを相手にするとあっちゃ、特にな。

鎧は、そんなあたしの顔を睨む事に飽きたのか、踵を返し再び玉座の前へと戻ると、びーこの前で片膝をつき、その小さく白い手を取るのだった。

これまたあたしには分かる。

あいつは今、びーこの手を取り、キスしやがったんだ。勿論、首がねーんだから出来るはずも無いんだが。

けどまあ、ヤツがどこまでもスカした鎧野郎だったのは嫌って程分かった。

そんな一連のツマラン礼式が終わると、首無し野郎はその黒いマントを翻し、再びあたしの前に対峙する。

白と静寂だけが支配する世界。

音もなく、時間の概念すら超越したそんな世界。

その下らねー世界をぶち壊すため、あたしは、鞘から刀を抜いた。

対する眼の前の甲冑も、ぽっかりと空いた首の穴から、一本の光り輝く剣を取り出した。

相手にとって不足は無い。

あたし達は、示し合わせたように同時に剣を振り上げた。

その時私は、激しい剣響で眼を覚ましました。

辺りは一面、白の世界。まるで世界で独りぼっちになった気分でも、やっぱり私は一人ぼっちなんかじゃありませんでした。

英子ちゃんです。

私の目の前で繰り広げられる、英子ちゃんと首の無い鎧さんの激

しい斬り合い。

また私のせいで、英子ちゃんが危険な目に合っている。

その事實は、私の心の奥底に重くのしかかります。

私は、英子ちゃんに何か言葉を投げかけようとして、けれど寸前でその言葉を飲み込みました。

だって、だって、英子ちゃんのその顔があまりに真剣で、怖くて嬉しそうだったから。

だから私は、唇を噛締め、両の拳をぎゅっと握って、黙って英子ちゃんを見守るしかないのでした。

糞つたれ、何て馬鹿力だ。

一撃一撃が腹が立つくらいに正確で、重い。

常にあたしの一步先を読んで立ち回り、あたしの猛攻を受け流し続ける鎧騎士。

それは、相手の力量ゆえか、それともあたしがこのじゃじゃ馬たる妖刀を使いこなせていないだけか。

あたしの剣戟は、甲冑野郎に殆ど届いていない。

最悪だ。

あたしは、眼の前の相手にのまれ、そして、この妖刀にさえのまれ、拳句の果てにこの勝負自体にのまれていたのだった。

改めて、刀を握るあたしの両手が微かに震え始める。

これが、ただの武者震いであればどれだけ良かった事か…。

恐怖が徐々にあたしを支配していく。

少なくとも勢いだけは勝っていたあたしの剣戟だったが、それすら押され始める。

こんな時に限って、いや、こんな時だからこそなのだろう。
あたしの脳裏に、かつてこの妖刀を初めて振るった時の記憶…
この刀があの人血に染まった時の記憶が鮮明に蘇る。

…… やめる… やめてくれ… あたしは… あたしは……。

戦闘中にそんなツマラネー事を考えていたのだ。あたしの左腕が
ヤツにぶった切られたのも、ある意味当然の事だと言えた。

真つ白の空間に、突如として咲いた紅い華。

静寂の空間に、突如として響き渡ったあたしの断末魔。

あたしは、体を紅く染め上げながら、尚も妖刀を振り上げる。

たかだが腕一本もがれたくらいで、あたしはびーこを手放したり
しない。

首無し騎士は、そんなあたしの一撃を軽々と受け止め、代わりに
あたしの左足を奪っていった。

再び、白の空間に紅い華を添えるあたし。

左足の膝から下を失ったあたしは、バランスを失い、その場で片
膝をつく。

たかだが足一本失ったくらいで、あたしはびーこから逃げたりし
ない。

それでも、甲冑の攻撃は終わらない。

更なる一撃加えるため、甲冑騎士はあたしに向かってその黄金色に耀く剣を素早く降り下ろした。

… 間一髪、その一撃をかるうじて受け止めたあたし。が、それと同時にその輝きを増す騎士の剣。

つたく、最悪だ。こいつの黄金の剣は、あたしの妖刀と正反対の性質。このままだと…。

次の瞬間、あたしの妖刀「秋艶」は音もなく、折れた。

そして、そんな光景をまざまざと見せつけられたあたしの闘争心もまた、完膚なきまでにぶちのめされたのだった。

つまりは、終わりだ。 何もかも。 終わりだ。

あたしは、刀身の折れた秋艶をその場に放り投げ、目の前のデュラハンを見据える。

「…………… どーやら、あたしの負けみてーだな。悔しいが完敗だ」
ぼつりとそう呟いたあたしは、その場で静かに眼を瞑った。

すまん、びーこ。結局あたしは、最後まであんたを守り通す事が出来なかった。

まあ、お前と関わりあいになっちまった時点で、碌な最後になんねーだろうなとは思っちゃいたさ。

きつとあたしは、地獄逝きだろーな。まず、間違いなく。

全てはあたしの力量のなさ故。

全てはあたしの慢心が招いた結果だ。悔いはないし、後悔はない。確かにないが、せめて…… せめてお前が一人前になった姿つてやつを、この眼で見えてみたかったぜ。

首の無い剣士は、あたしにトドメの一撃を加えるため、その剣を高く高く掲げ、そして……。

「だめー！ーっ！」

そう叫びながら、あたしと剣士との間に割って入った人物。

この空間には、あたしと剣士と、そしてもう一人しかいない。

つまりは、びーこである。

「駄目、駄目です。これ以上は駄目。だって、だって英子ちゃんが死んじゃう。ねえ、お願いです鎧さん、これ以上英子ちゃんを傷つけないで。私はどうなってもいいから、英子ちゃんの命をとらないで！」

先程までと打って変って、その動きを急激に緩める騎士。

そんなびーと騎士との睨み合いは、一体どれだけ続いたのだろう。

そしてとうとう、騎士はその場で再びびーに膝まずついたのだ。つた。

助かった？ いや、助けられたんだ。このあたしが。

「く、糞が、んな同情はいらねーんだよ」

あたしは、びーを払いのけ、再び騎士の前に這い出る。

「え、英子ちゃん、もう良いんです。もうやめてください！」

そんなびーこの必死の訴えを無視しあたしは言う。

「よう、首無し野郎。あたしは、まだ、やれる」

首無し騎士は、そんなあたしの様子を黙って傍観した後、再び、その剣を振り上げた。

パサツ。

ドサツでもバタンでもなく、パサツである。

首が落ちる音にしても、あたしが真つ二つになる音にしても、聊か軽すぎるその擬音。

いや、まあ、自分が死ぬ時なんてのは、案外こんなもんなのかもしれねーが。

徐々に薄れゆく意識の中、あたしがその空間で最後に見た光景は、あたしの切られたポニーテールを拾うデュラハンの姿だった。

気がつくときあたしは、とある部屋のとあるベッドに横たわっていた。

徐々に覚醒していくあたしの脳みそが、ここがびーこのマンション、びーこの部屋のびーこのベッドであるということを理解した。

あたしは、あるはずの無い左腕を動かし、何とか起き上がると、あるはずの無い左足を撫でた。

五体満足。

部屋の片隅にそつと置かれたあたしの秋艶も、やはり、折られてはいない。

あの悪夢のような出来事がまるで夢であったかのように、あたしは五体満足のまま、びーこの部屋にいた。

ただ、そんなあたしの短くなった髪型がだけが、その出来事が現実だったと言うことを如実に物語っていた。

つまり、あたしは、負けたのだ。それも惨敗。完膚なきまでに叩きのめされたのだ。

その上、こんな風に情けを掛けられて、惨めにも生き残っちまった。生き恥を晒すように。

胸の中に、ドス黒く、そして冷たい感情がこみ上がってくる。

「……畜生、ちくしょう、チクシヨウ」

その時、何も言わずあたしの傍らに居てくれたびーこが、あたしの涙をそっとぬぐい、優しくそして力強く抱きしめてきた。

それでもびーこは何も言わない。

ただ微笑を浮かべるのみ。

「う、うう、うわああああああああああ」

そんなびーこに対し、一気に感情が爆発するあたし。

びーこはその細い腕により一層の力を込め、あたしを強く強く抱きしめるのだった。

END

第十二話 「大人とは、全てを包容出来る心を持った子供」

第十二話「大人とは、全てを包容出来る心を持った子供」

例え、あたし達にどんな出来事が襲いかかろうと、あたし達がどんな目に逢おうと、世界はその歩みを止めない。

あの悪夢のような首無し騎士との一戦から一夜明けた今日、あたしはいつも通りびーこを学園へと送り届けた後、そのまま真っ直ぐにマンションへと帰ってきた。

今日のびーこは、学園で泊り込みの実践授業。

学園が学園だけに、魑魅魍魎の類が活発になる夜の時間にしか出来ない事も多々あるためだ。

ついでに、翌日の帰りの送迎も学園側が行ってくれるらしい。つまり、いつものようにあたしが出向く手間もないって事。

加えて、今日の予定は突然の白紙。

何件か糞メンドクサー仕事を予定したものの、明らかに意図的に一方的にキャンセルされたためだ。

…… いや、この期に及んで深く考えるのは辞めよう。

つーか、今は何も考えたくない。

あたしは、自室へと戻るとベッドに横たわり、ぼーっと天井を見上げた。

真っ白のその天井は、どことなく例の白い空間を想起させた。

惨めな敗北。

完璧なる敗北。

敗北どころか、勝負にすらならなかったという事実。
その上相手に情けをかけられ、生き恥を晒しながら、あたしは今、
ここにいます。

あたしは、びーこを護る事が出来なかった。

不甲斐ない自分。

口先だけの自分。

弱く脆い自分。

そんな自分が嫌になる。

自己嫌悪のリピート。

どん底ブルー。

折角のオフだったのに、何をやっても手につかない。ったく、あ
たしらしくねーよな、本当に。

そういえば、昨日あれからびーこと一言も会話をしていない。

今朝も、あたしたちはお互いに言葉を交わすことなく、学園へと
向かった。

果たしてびーこは、今のあたしをどう思っているのだろうか？

護るはずのびーこに、逆に護られる事になっちまった情けない昨
日のあたし。

ボディーガードとしちゃ、勿論失格だろう。

その上、折角びーこに助けられたのに、みすみす殺されにい
くようなマネまでしちゃって…。

あいつは、そんなあたしをどう思っているのだろうか？

あたしが、何百回目かのそんな思考のリピートを繰り返している
と、唐突にあたしの部屋のドアが開いた。

「ただいまー、英子ちゃん」

「は？ びーこ？」

「ちょ、お前、随分早いじゃねーか。泊まりでの実践授業ってやつ
はもう終わっちゃったのか？」

「えー？ 何言ってるんですか英子ちゃん。時計を良く見てくださ
い」

言われた通り、あたしは部屋の片隅に置かれたデジタル時計に目
を通す。

人間ってやつは、のまず食わずで一步も動かず、丸々1日を思考
を巡らすだけに費やす事が出来る生き物らしい。

…………… どうやら、あたしの休日は、そんな思考のスパイラル
だけで終わってしまったようだ。

「やれやれだ。本当に。」

「が、もう一つ、あたしの眼には驚愕の事実が映し出されていた。」

「びーこ、お前、その髪……………」

「べ、別に英子ちゃんのために短くしたんじゃないんですからね！
なーんちゃって。どうですか？ これ、似合ってますか？ 英子
ちゃんとお揃いのショートカットですよ」

「びーこは、長く美しかったその銀髪を、ばっさりと短く切ってし
まっていた。」

「どうやらあたしは、この能天気娘に随分と気を使われてしまった
らしい。」

「それほどもでに、あたしは惨めな姿をしていたのだろう。」

「それとも、こいつなりの優しさってか？ 愛情表現？」

… ったく、バカヤロウが。

あたしは、思わずにやけてしまいそうな口元を必死に隠しながら、照れ隠し気味に叫ぶ。

「おいびーこ。夕飯はラーメンでも食いに行こうぜ、今のあたしはかつてないほどに腹が減ってるんだ。今日は特別だ、おかわりもアリだぜ」

「やたー！ 私、とんこつが良いです。と、ん、こ、つ、 とんこつさーん」

そんな笑顔を見て、あたしはふと思う。

もう二度と負けるわけにはいかねーと。

そして、もう二度とこの笑顔を手放さないと、そう固く心に誓うあたしなのだった。

END

第十三話 「家に帰るまでが遠足」

第十三話「家に帰るまでが遠足」

ビーこの実地訓練の日々は続く。

今回は、そう、山籠りだ。

とある山で、様々な道具や荷物をもつての強行軍。

まるで、軍隊か何かみてーなこの訓練方法。普通のミッション系お嬢様学園なら、天地がひっくり返ってもやらねーであろうこの訓練。

だが、ビーこの通う学園は、所謂普通とはちよつと言いがたい場所。

彼女らは、断じて普通の学生なんかじゃない。

だからこそ、彼女らにとっては、こういう馬鹿みたいなやり方で体力づくりつてやつも実は重要だったりする。

それは勿論、あのやしっ子にも言える事。

「英子ちゃん、私、もう一步もあるけましえーん」

「うるせー、たかだか山んなかをちよつと歩いたくらいでへばってんじゃねーよ」

「だ、だつてえー」

「だつてじゃない。いいか？ あたしなんてなあー、あの糞じじいの修行という名の憂さ晴らしで」

「もう！ 英子ちゃんの話なんて聞いてません！」

「何だよ、思ったより元気が残ってるじゃねーか。それだけ文句が言えれば、家まであつという間だぜ？」

今回は学園から聊か離れての訓練つーことで、あたしはお守役として朝からビーこに付き合い、別に義務でもないのに同じ訓練を受

け、こうして現地解散による帰りの送迎をもこなしている。

よーするに、びーこによるびーこのためのびーこにつくす1日ってわけだ。

まあ、あたしとしては勿論これも立派な仕事の一環だし、この間は図らずもびーこに借りを作っちゃまったわけだから、何の文句もねーわけだが。

だが、そんな仕事熱心なあたしと違って、当のびーこ本人は先程から不満たらたら。

やれやれ、こいつは何にもわかつちゃいねー。重要な事を理解していないのだ。

「びーこ、遠足ってヤツはな…… 家に帰るまでが遠足なんだよ！」

「何を言ってるんですか英子ちゃん。そもそもこれは遠足じゃないですし、訓練だってもう終わったじゃないですかー」

「いや、だからな？ …… まあいいや。何だかあたしも疲れた。とっとと帰ろう」

あたし達は黙々と山を降りる。

びーこのその雪のような真っ白の顔には、疲労の色が如実に現れていた。

というか、あれだけ山を歩き回ったくせに、日焼けの一つもしてねーのが不思議だ。

荒い呼吸に大粒の汗。

流石にちよつと無理をさせすぎただろうか？

ただでさえ体力が皆無なびーこが、曲がりなりにもあの強行軍をこなしたのだ。

せめて帰りぐらいは楽させてやるべきなのだろうか？

そんな事を自然に考えてしまうあたしは、やはり過保護になりすぎなのだろうか？

この間の一件もあってか、あたしの中の基準ってヤツがイマイチ曖昧になってきちゃってる。

うーむイカンな。

あたしが、うんうんとそんな思考の迷路を彷徨っている最中、びーこがスットンキョーな声を上げる。

「英子ちゃん、あちらの森林地帯を突っ切りましょう！ 私、知ってます。あちらが近道なのです」

間違いない。

やはり、あたしはびーこに対して甘くなっちゃっていらしい。

だってそうだろう？

普通に考えて、そんな今思いついたような、いつものびーこの考え無しの提案に従えばどうなるか？ どんな結末が待っているか？

そんなの、火を見るより明らかだったし、普段のあたしなら、そんな審議の余地もないような糞みたいな提案、鼻で笑って却下している筈なのだから。

…………… だからこそ、今、あたし達がこうして森の中ですっかり迷子になっちゃまったっていう事実も、きつとあたしの緩みきつた脳ミソが招いた結果なのだろう。

「英子ちゃん、ここ、どこなんでしょうか？」

あたしは、頭を抱えていた。ああ、あたしは何て馬鹿だったんだ。やはりあたしは、びーこの優しいおねーさんでも、気のいい同居人でもなく、ヤツの鬼教官であるべきだったんだ。

くっそ。

あたしって、本当バカ。

「まあ、こうなっちまったもんは仕方ねー。後悔なら帰ってからでも十分出来るからな。おい、ビーこ、コンパスと地図をだしな」

「え？ あ、あのー、その、てっきりもう必要ないかと思ひまして、訓練終了の折に、置いてきてしまひまして……」

不幸つてのは、どうしてこうも重っちまうものなんだろう。

あー、早くも頭痛がしてきやがった。

「家に帰るまでが遠足だつて、あたしはあれほど言ったのに」

「なるほどー、さっすが英子ちゃん。こういう意味だったのですね？ 私、また一つ勉強になりました！」

「そりゃ良かった。本当に良かった」

待て待てあたし。やけになるな。

こんな時だからこそ冷静になる必要がある。仮にもあたしはビーこの保護者だ。

これまでだつてもつと酷い目にさんざん逢つてきたじゃねーか。これくらいなんだつてんだ。

一先ずあたしは、あたしとビーこの荷物を確認してみる事にした。

……… 食料は、ビーこのおやつチョコが少々。加えてあたしのケロリーメイトが少々。500ミリペットのミネラルウォーターが半分。

ここは森。いざとなつたら現地調達が出来なくも無いはず。

地図やコンパスの類は無い。ケータイは持ち込み禁止につき、部屋に置いて来ちまった。まあ、あつたところでどーせ圏外だつたらう。

後は、ビーこの着替えくらい。元々、最小限の装備で最大限の重荷を持つての山歩きつてコンセプトだつたからな。

それに、いくら現地解散つていつても、ほぼ1本道で、数刻たらずで山から抜け出せるはずだつたのだ。

迷つたり迷子になるような要素など何もなかつたはずなのだ。

ビーこの、性格と体質を除いては。

あたし達は、互いに言葉を交わすことなく、重苦しい雰囲気の中ただ歩いた。そこに出口があると信じて。

こんな時ヘンゼルとグレーテルだったら、パンの屑でも落として目印にして歩いたのだから、生憎あたし達はそんな上等なものを持ち合わせてはいない。

あたしは、変わりに目印になりそうな木や分岐点になりそうな場所にナイフで傷をつけながら歩く。

そうして何本目の木に傷をつけようとした瞬間、あたしの中の疑惑は確信へと形を変えた。

「可笑しい。もう傷がついてる。あたしのナイフでつけた傷がついてやがる。あつちの木にも、この木にも……」

「英子ちゃん英子ちゃん、私、この道、さっきも通った気がします」その木には、既に何本ものあたしのナイフによる傷がつけられていた。つまりこの場所を通るのは1回や2回どころではないってこと。

「同じ場所をぐるぐる回ってるってのか？ 尋常じゃない回数を？」

「う、うええええええーん、英子ちゃん私たち完全に迷子だよー。疲れたよー」

びーこの泣き声があたしの焦燥感を駆り立てる。

落ち着け、冷静になれ、クールになるんだ。

シヤレにならねーぜ、よりもよって迷子になって遭難死なんて。

いつもみみたいな怪異や魑魅魍魎、超常現象の類なら荒業や力技で何とかなるってのに、よりもよって森で迷って遭難だと？

笑うに笑えねーよ。

……いや、待てよ？

これは本当にただの迷子か？

思い出せ、こうなったのはそもそも誰の言葉が原因だった？

そうだ、勿論びーこだ。

あいつが関わる以上、これはただの迷子なんかじゃない。森はただの森ではなくなり、遭難はただの遭難で無くなる。

もしもこの迷子が、意図的に何ものかによって引き起こされたものだとしたら？

びーこに魅入られた何ものかによって引き起こされたもの、もしくはびーこに魅入られたこの森事体が引き起こしたものだとするれば？
つまり、何らかのサインや、その原因となる何かが潜んでいるはずなのだ。

あたし達をニヤニヤ顔で見ている何かがいるはずなのだ。

あたしがそんな風に思考を巡らせていたその瞬間、前方の木陰からガサツという物音が聞こえてくる。

瞬時に、その発生源の方へ顔を向けるあたしとびーこ。

そんなあたし達の目に飛び込んだもの、それは…。

「クマーーーーーっ！！！」

気がつけば、あたしとびーこは同時にそう叫び、全力疾走を開始したのだった。

END

第十四話 「森のクマさんはストーカー」

第十四話「森のクマさんはストーカー」

「まってクマー、オトシモノクマー」

カタコトの日本語でそう言いつつ、まるでスプリンターのようなフォームであたし達を追いかけてくるクマ。

疑う余地も無い、遭難の原因は間違いなくあれだ。

… ツーか、クマ？

鋭い牙と鋭い爪を持つ日本最大の猛禽類のあのクマ？

いやいやいやいや、断じて否だ。

普通のクマは喋ったりしねーし、そもそもあんな走り方しない。

それにしてもあのクマ……… ちょーはええええええええ。

駄目だ、このままだと追いつかれる。

ただでさえここは森の中。地の利はクマ野郎に分がある。

加えて、限界寸前のびーこの体力はもう長くは持ちそうにねえ。

というか既に、今にも倒れそうなふらふらとした足取り。

はあ。

ったく、しょうがねーな。

こうなったら手は一つ。

「びーこ、お前は先にいけ。ここはあたしが何としてやる」

と、まあ、びーこの手前格好をつけてみたものの、相手はクマで

ある。

しかもどう考えても普通とは言いがたいクマ。自慢じゃねーが普通のツキノワグマ程度となら、何度かやりあった事がある。いや、まあ、思い出したくも無い負の歴史ってやつだが。

さて、このクマさんは果たしてどう出る？

「クマ野郎。相撲でもしようってか？」

その口元を真っ赤に染め、こちらに迫ってくるクマ。

目は完全に充血しちまつてるし、呼吸も荒い。

明らかに、さっきまでお食事中だったということが分かる。

それが人間の血でないこと祈りながらその場で足を止め、あたしは、コンバットナイフを構えた。

が、クマはそんなあたしを華麗にスルーして、そのままびーこを追う。

… どうやら、あたしのことなどはなから眼中に無いらしい。

「このロリコングマが！」

そう愚痴りつつ、あたしもびーことクマを追う。

「いやああああ、こーなーいーでーくーだーさいー」

「ハアハア、まつクマー」

「待てやーてめーらー」

びーこを先頭に森の中を爆走するあたし達。クマに追いかける人間と人間に追いかけるクマ。

何ともシユールな光景だ。

だが、こんな状況がいつまでも続くはずが無く。

「も、もう駄目です。わ、わた、私、もう一步も歩けませーん」

「く、く、クマママ」

びーこがその場で倒れこむと同時に、クマもまたその歩みを止め

た。

そして、そんな一人と一匹にようやく追いつくあたし。

「はあ、はあ、おいこらそんなクマ。覚悟はできてんだろっな？」

「な、なんのクマー？」

あたしは、再びナイフを構えびーこの前に立ちはだかりながら言う。

「決まってるだろ、あたしに消される覚悟だよ」

そんなあたしの気迫に対し、震えながら一歩下がるクマ。

何だ？ 戦意は無いってのか？ そんな凶体して？

「待ってください英子ちゃん。この子、もしかしたら悪いくまさんじゃないのかもしれない」

びーこのそんな言葉に対し、首を激しく上下に降り、肯定を示すクマ野郎。

「おいおいクマに良いも悪いもねーだろ。それともびーこ、お前にはこいつがぷーさんにも見えるのか？ 好物がハチミツに見えるか？」

相変わらず、眼の前のクマの口元、牙、爪は真っ赤に染まっている。とてもじゃないがハチミツを齧って生きている類には見えない。そんなあたし達のやり取りに対して、クマ野郎がぼつりと一言。

「コレは、とまとケチャップクマー」

「うおい！ 紛らわしいんだよ、っーか何でクマがトマトケチャップ齧ってるんだよ！ 大人しく鮭でも啜えてやがれ」

思わず我を忘れて突っ込んだじまったが、やっぱりこいつは普通じゃないってことが分かった。

「でもでも、そういえばさきほどこのクマさんは落し物がどうとか言っていました」

ああ、そう言えば確かにんなことを言っていたかもしれない。

あの時は逃げるのに必死で聞く余裕も無かったが。

「で、びーこ。お前、何か落としたのか？ 少なくともあたしは落としてねーぞ」

「い、いえ。私も特には、何も」
微妙な沈黙があたし達の間流れる。

が、そんな空気を破ったのは、他でもないクマ自身だった。

「タシカニ、おとしたクマー。ぼくに、愛、という名のバクゲキを」

先程より、さらに重苦しい沈黙があたし達に襲いかかる。

ひたすらにドヤ顔のクマ。

何が何だか分からず、茫然自失状態のびーこ。

血管をいくつも浮かび上がらせ、ナイフを逆手に持ちかえるあたし。

「ああ、確かに落としたかもしれねーな。ただし、てめーが、その粗末な命を、な」

問答無用で、眼の前のクマを肉塊へと変えようとしたその時、びーこが躊躇気味に言う。

「ストップ。ちょ、ちょっと待ってください英子ちゃん。やっぱり私にはどうしても、その子が悪いクマには見えないんです」

「悪いクマには見えないだと？ 少なくともあたしには、最低に頭の悪いクマに見えるけどな」

びーこはじーつとあたしの顔を見つめる。

その目は、必死に何かを訴えかける。

…… びーこは頑固だ。これ以上あたしが何を言っただって無駄だろつ。

これだからお嬢様ってやつは。

「わーったよ。あたしはあんたのお守役だ。びーこがそれで良いっていうんなら、もう何も言わない」

「ありがとうございます、英子ちゃん」

あたしが後ろに引下った後、びーこはにっこりと涼しげな笑顔を携えながら、クマ野郎を見つめる。

「オジョウサン、ぼく、キミに一目ぼれしたクマー。白い肌ニ、ギ

ンイロの髪。食べちゃいたいくらいにスキクマー」

あーあ。

クマから告白されるびーこ。

いや、というか待てよ？

「お前、アレか？　びーこの才能ってか能力に魅入られたんじゃ無くて、ただ単にびーこの見た目に惚れちゃったのか？」

コクコクと、肯定を示すように二度頷いたクマ。

「……ぶつ。く、くつくくく、あつはっはっはっは。お前最高だよ。クマの癖に、人間に惚れちゃったのか？　しかもよりもよってこのびーこに」

「もう！　失礼ですよ英子ちゃん！　それはそうと、あの、ありがとうございますクマさん。でも、私、英子ちゃんみたいに強いかたが好きなんです。ごめんね？」

びーこの言葉を受け、クマが恐る恐るあたしの顔を覗く。

「お？　何だ何だ。やっぱりあたしとやるってのか？　いいぜ。今夜は熊鍋だ」

猛烈な勢いで首を左右に振るクマ野郎。つたく、クマのくせに度胸がねーな。まあ、びーこに告白する辺り、怖いもの知らずではあるんだが。

ま、なにはともあれ、つまりはご愁傷様。降られちゃったってわけだ。

その場で頂垂れる妙に人間くさいクマ。

そんな態度に呼応するかのように、森が本来の姿を取り戻した。

どうやら、出口は直ぐそこ。っーか、あたしたちはこんな出口の近くで迷ってたのか…。

「さて、勝負ありだな。つてもあたしは何にもしてねーが。おい、帰るぞびーこ」

「はい。それではクマさん。お元気で」

そんなあたし達の背後から、あきらめないクマーなどというセリ

フが聞こえてきたのは、あたしの気のせいではないはず。

あたしは、体力の限界に陥ったびーこを背負いながら帰り道を往く。

「しかしなあ、まさかクマに告白されるとはな。いつそ付き合っつまえば良かったのに。案外いいボディガードになるかもしれねーぜ」

「酷いです。幾ら私だってせめて相手は人間が良いですもん」

「ああ、さっきの話で言うどびーこはあたしが好きなんだっけ？」

「もう！ さ、先程の話は例えです。あくまで例え。その、英子ちゃんみたいに強い殿方が良いって言っただけですもん！」

「あー。はいはい」

「…………… 英子ちゃんの、バカ」

こうして、あたしとびーこの長い遠足が終わった。

訓練に付き合っつての山歩き、森林探索、加えてクマとの追いかっつこ。

どう考えても、明日は筋肉痛だろうな。

まったく、やれやれだぜ。

END

第十五話 「贈り物選びは慎重に」

第十五話 「贈り物選びは慎重に」

「英子ちゃん英子ちゃん、お届けものみたいですよ」

そう言っつて一つの怪しげな小包を抱えながら、びーこは嬉しそうにあたしの元へ駆け寄つて来た。

「どうやら、さっきのインターホンは宅配業者のおっちゃんによるものだったらしい。」

「んで、誰から何が届いたんだ？ この時期だからお中元お歳暮の類じゃねーだろうし」

「名無しさんからですよ、英子ちゃん」

「ななし？ そんな知り合いあたしに居たかな？ いや、それともびーこの知り合いか？」

「お名前もご住所も書かれてませんねー、これ」

「待て待て、それは限りなく厄介事の匂いがする。」

「おいおいおい、待て。それって差出人不明つてやつじゃねーかよ！」

「ああ、それなら私も知ってます。ニュースやドラマで良く犯人が一方的にものを送りつけるアレですね」

「そうだ。つーかそこまで分かつてんなら言うまでもねーと思うが、いいか？ 開けるなよ？ ぜええええつたいに開けるなよ？」

目を輝かせて小包を見つめるびーこに対して、あたしは早々に釘を刺した。

「これはデジャヴでも何でもない。以前のタイムカプセルの時と同じパターンだ。」

「が、そんなびーこが大人しくあたしの言葉に耳を傾けるはずも無

く。

「ちつつち。それはむしろ逆効果つてものです。開けるなど言われれば開けたくなるのが人の業」

「ちょ、待て、待てびーこ！」

「と、言うわけでオーブンぎボックス」

あたしの忠告も虚しく、びりびりとその包装を破り、ついに、びーこはそのブラックボックスを開けた。

その瞬間、カチっという明らかに異質な、まるで何かのスイッチが入ったような、そんな音が部屋内に響きわたった。

そして中から出てきたもの、それは…… 一つのエレベーター。

「あつ。エレベーターですよ、英子ちゃん。私、エレベーター好きなんです」

この期に及んで何を呑気な事を……。

これがただのエレベーターであるはずがない。

だってそうだろう？

普通のエレベーターは、カチツカチツ何て電子音を奏でないし、そもそも配線が伸びているはずがない。

だったら、目の前のこの物体は一体何なのか？

「目覚まし時計でしょうか？」

「アホか！ 爆弾だろ、爆弾！」

「ば、ば、ば、ば、ば、ば、ばくだん？」

そうやって嘔みまくったびーこの手足は、既に震え始めていた。

「うおい！ 落ち着けびーこ。落とすな、絶対に落とすんじゃないぞ、その箱。今度という今度は振りでもなんでもねーからな？」

あたしのそんな必死の訴えに対して、顔を真っ青に染めながら激しく上下に頷くびーこ。

やれやれ、いつもこれくらい素直だと、子守としちゃ楽なんだがな。

びーこの腕に支えられ小刻みに揺れるその箱の中身を、改めてそつーつと覗くあたし。

一見ただの林檎。

だが何度見直してみても、底からカラフルな赤と青の二種類の配線が伸びているし、カウントダウンのデジタル表示までついている始末。

林檎にはご丁寧に罫線マークまで描かれている。

加えて綺麗な筆記体で愛しの白雪姫へ、なんて書かれやがるから始末に負えねー。

ふざけんな！ とんだ毒林檎じゃねーかよ。

依然として、あたし達の部屋には不気味なデジタル音だけが響いている。

…… 落ち着け、あたし。いつもの要領でやれば間違いない筈。

「びーこ。自慢じゃねーが、爆弾の解体は何度かやらされたことがある。まあ、見てな」

あたしは、ポケットからいつものナイフを取り出し、静かに解体作業に取り掛かった。

爆弾ってやつは、作成者の癖や思考ってやつが如実に表れる代物だ。

むしろ、意図的に思いのたけというやつを爆弾に詰め込んでくる輩もいる。

そう、今回の、この爆弾の作成者のように。

「あたしも専門家じゃねーから、そこまで詳しいわけじゃねーが。そんなあたしにも分かる。この爆弾の製作者は、完全にあたし達を馬鹿にしてやがる」

「ど、どいうことですか？」

びーこが青白い顔で恐る恐る言った。

「見るよ、この2本の配線。これみよがしに伸びたこの配線。テレビや映画なんかで使い古されてカビが生えたネタってやつだな。どつちかが本物でどつちかがフェイク」

つまり、正解を切れれば爆弾が止まるが、ハズレを切ると……。

まさか、こんなベタ展開にあたしが巻き込まれるとは思ってもよらなかった。つか、出来れば一生したくなかったよ、こんな体験。

単純な構造だからこそ、最後は二択。

映画とかだと、こういうときラッキーカラーとか、好きな色を選んだりするんだよな。

「あー、一応聞いておくが、びーこは赤と青どつちが好きだ？」

「し、しし白です。英子ちゃん」

「何だよ！ 聴け、頼むからあたしの話を聞いてくれ。つか、お前、あさつての方向むいてんやねーよ。現実を直視しやがれ！」

「え、ええええ、英子ちゃん、私、これ以上、持って、い、られない」

大粒の汗を流しながら、カチカチと歯を鳴し涙目のびーこ。つか、ターミネーターかよ！

「はいはいはい、分かった。分かったから、一先ずその箱を置け。な？」

びーこは、再び激しく首を上下させながら爆弾箱をそつとテープルの上に置いた。

「さて、そうこうするうちにタイムリミットが後5分と迫っちまったわけだが」

…………… こういつちゃ何だが、ぶつちゃけメンドクサクなってきたあたしは、半ば投げやりになんて答えた。

「英子ちゃん、そういえば私、急に用事を思い出しました！ と言う事で私、帰りますねー」

「待てやコラ！ どこに帰るんだよ！ ここがためーん家だろーが

よ

「あ、あいどんのー」

悪く思わんでくれよ、びーこ。

何といつても今日は、お前に頑張ってもらわなきゃならねーんだからな。

「びーこ。ぶつちやけあたしもお手上げ状態だ。だから、あたしはあんたに賭ける事にした。あんたの天性の才能、カンってやつに賭けて見ることにした。つまりな、青か赤か、どっちを切るのかお前が選べ」

そんなあたしの言葉がよほどショックだったのか、口をあんぐりと開けたまま固まっちゃまったびーこ。

「へいへい、びーこ。どーやら固まってる時間もねーみたいだぜ。ほら、見てみるよ」

林檎のデジタル表示、カウントダウンは残り3分。

まったく、やれやれだぜ。

「え、えええ、えええ、英子ちゃんは、その、ど、ど、どどっちだと思えます?」

「知らん。あたしの命はびーこの選択に預けたんだ。あたしの役割はもうびーこの選んだほうを切るだけだ」

「そ、そんなー」

「おっと、そんなもだっても禁止だぜ。さあ、時間がねーんだ。とつとと覚悟を決めな。… あたし達が爆死しちまう前にな」

そのぱつちりとした目を白黒させながら、びーこはひたすらに林檎爆弾とあたしの顔を交互に見つめていた。

残り1分。

頼むぜびーこ。お前の可能性を見せてくれ。

残り30秒。

びーこの視線が、やがて爆弾の配線の前で止まった。

「分かりました。… 青です。英子ちゃん、青を切ってください」
青。空の色。海の色。自由の色。そして、あたしの好きな色。

「…………… 良いんだな？ さて、それじゃあいくぜお嬢様？」
こくりと一度だけ深く頷いたびーこ。

その表情は、先程までの怯えと焦燥の入り混じった顔などではなく、何かを決意した強さに満ちた顔だった。

何だ、やれば出来るんじゃないか、そんな表情も。

あたしは、ニヤリとその口元を歪めながら、手にしたナイフで一気に青のコードを切った。

その瞬間、林檎のカウントダウン表示とその不気味な電子音が一様に消え去る。

「おめでとーさん、解除成功だ。やったなびーこ。お前はやれば出来る子だと信じてたぜ」

やれやれ、疲れた。無駄に疲れた。

こんな事に付き合わされるのは、もうこれっきりにして欲しいもんだぜ。

だがまあ、上手くいって良かった。

この後の展開は……………

あたしがそんな思考を巡らせていた瞬間、また別の電子音がマンシヨン内にこだまする。

一瞬、びーこが驚きのあまり数センチほど飛び上がったものの、すぐにそれが己の携帯電話から発せられているものと気づき、ポケットを弄るのだった。

「はい… え、ダディ？ はい？ た、誕生日？ サプライズ？
もう！ ダディのばかばかばかばかばかー」

そう言って、携帯電話を放り投げ、膨れ面であたしの前に立ち

だかるびーこ。

やれやれ、本当の地獄はこれからってか。

「つまりは、そう言うこった。誕生日おめでとさんびーこ。お前幾つになつたんだっけ？ まあいいや、で、どうだった。サプライズプレゼントは？ あたしの迫真の演技つてやつは？」

「そんなの知りません！ もう、ダディはともかく英子ちゃんまでグルだつたなんて信じられません！ 私、本当に怖かつたんですからね！」

「気持ち分かるが、そう拗ねるな。グルというか、あんたのバカ親、失礼、親バカな両親に頼まれてこんな三文芝居をやつたのは事実だ。まあ、あたしとしてもあんまり乗り気じゃなかつたんだがな……プレゼントやらサプライズ云々はともかくとして、あたしとしては、そろそろびーこに自らの手で選択する事、決断する事を経験してほしいかつたのさ。そのためには良い機会だとそう思つたつてわけだ」

先程までの青白い顔はどこへやら、その顔を怒りで真っ赤に染め、びーこは尚もあたしを睨み続ける。

「ついでに白状すれば、あたしはこう見えて花も恥らう乙女だぜ？ 当然、爆弾の解体なんてやつとは無い。むしろあつてたまるかよ。それともう一つ、ここに届く荷物はびーこのバカ親、失礼、親バカな両親の手で一度検閲を受けてんだぜ？ 知らなかつたのか？ 確かにびーこのお守はある程度あたしに一任されちゃいるが、お前は常に両親にも護られてるつてことさ。だからよ、爆弾なんか届くはずがねーんだよ、このマンションには、最初っからな」

あたしが喋り終えると、びーこは大きな溜息をついた後、今度は満面の笑顔を浮かべながら言う。

「はあ、全く、どうして私の両親はこうもお茶目なんでしょうか？ でもいいです。確かに、いつまでも英子ちゃんに頼りっぱなしの自分から卒業しなきゃと思っていましたから」

「へえ？ 言うじゃねーか」

「それに、英子ちゃんのお芝居なんて滅多に見られるものではないじゃない。ぷぷぷっ、英子ちゃんってば、演劇の才能もあるんじゃないですか？」

「… 忘れる。そのことについては、今すぐ忘れて良い。っと、そんな事言ってる場合じゃなかった。ほら、行くぞお嬢様。両親がお待ちかねだ。本家でお前の誕生日パーティーがあるんだとさ」

「はい！ でもダディとは暫く口ききませんからね、私」

あーらら、ご愁傷様。んなことしたらあの親父さん、絶対泣くだろっな…。

そんな事を考えながら、あたし達は揃って部屋を出たのだった。

END

第十六話 「人に夢と書いて墓無い」

第十六話「人に夢と書いて墓無い」

可笑しい。この状況はどう考えたって可笑しい。たまらなく、嫌な予感がする。むしろ嫌な予感しかしねー。

今日は日曜日。

今の時刻は午前11時を少し回ったところ。

休日のそんな気だるい空気の中、あたしは、リビングの時計を眺めながら大きな溜息を漏らした。

ガキつてのは、どういうわけか休日はいつてもより早く起きたりする。

言わずもがな、びーこもその一人。ご多分に漏れずその一人なのだ。

いつもなら、二日酔いでグロッキーなあたしをお構い無しで朝の6時あたりに叩き起こしたりするびーこ。

早起きは三文の得だと喚きながら、あたしをベッドから引きずり落とす筈なのだ。

むしろ三文くらいの得なら、あたしは一秒でも長く寝ていたい。つーか、あいつは知らないのさ。

その諺は元々、早起きしたって三文ぼっちの得にしかならねーから大人しく寝てろ、って意味だと言っことを。

少々話が脱線しちゃったが、今、あたしはリビングにいる。

いつもの喧騒からは想像も出来ねーくらいに静まり返ったマンシ

ヨソ内。

びーこが未だに起きて来ない。

たったそれだけの事実が、この平穏と静寂を生み出している。

平穏、静寂。

あたしたちの生活にはまるで縁のないその言葉。

手を伸ばしても決して届かぬその言葉。

それが、今、あたしの手の中にある。

……おっと、感傷に浸ってる場合じゃねーな。

柄じゃねーんだよ。こんなのはさ。

それに、そろそろ偽りの静寂ってやつにも飽きてきた頃合だ。

やっぱりあたし達にお似合いなのは、こんな静寂よりも、誰かさんの笑い声や騒ぎ声に溢れた、賑やかな日常ってやつらしい。

ったく、しよーがねーな。

あたしは、我らが眠り姫を叩き起すため、彼女の部屋へと向かった。

こうして実際部屋の前に立ってみても、やはり物音や生活音の類は聞こえてこない。

と、なると、やはりそういうことなのだろう。

あたしは躊躇することなくびーこの部屋のドアを開けた。勿論、ノックなどしない。

そんなあたしの目に飛び込んできたのは、ベッドの上で眠るびー

こと……… 一匹のおぞましい獾だった。

獾。そう、人のユメを食うっていうアレだ。

何だよ、身構えた割には何ともちんけな相手じゃねーか。

… いや、待て、果たして本当にそうか？

獾程度の下級の魍魎の類なら、あたしは何度も葬ってきた。

だからこそ、その存在を、気配を感じ取れなかったというのがまず可笑しい。

そして、何より可笑しいのが、獾は普通あんなに禍々しい雰囲気をもとつてはいないという点だ。

あれは獾というより、何か全く別の存在… なのかもしれない。

何はともあれ、一先ずあたしは彼女の隣にぴったりと居座っている獾モドキと、びーこを引き離す事にした。

やっぱり、念のためにこいつを持ってきてよかったぜ。

あたしは右手に携えた金属バッドに精神を集中させた。

「月は村雲花に風、月夜に提灯夏火鉢。… 今宵の我が月は、半月」

青白い光に包まれたバッドを掲げながら、あたしは一気に獾モドキに詰め寄る。

「うおら、獾だがバグだが知らねーが、とつととびーこから離れやがれ！」

直後、あたしのバッドから逃れるように、身を翻し、部屋の隅へと飛んだ獾。

はあ？ 飛んだだと？ あの獾が、こんなにも身軽で俊敏な動きをするなんて聞いた事がない。

が、今はそれよりびーこだ。

これがただの獾なら、多少悪夢を見せられるくらいで済むが、残念な事にこいつはただの獾じゃない。

あたしは慎重にびーこを起す事にした。

「おい、びーこ。起きろ。目を覚ませ。何をされた？ あいつに何をされた？」

そう叫びながら、あたしはびーこの頬をぺちぺちと叩く。

それでもびーこは目を覚まさない。覚まそうとしない。

「お前、びーこの何を喰いやがった？」

糞ツ。こんなことなら、もっと早く起きるべきだった。もっと早く様子を見るべきだった。何がお守だ。何がボディガードだ。

結局、成長してないのはびーこじゃなくてあたしの方じゃねーか。あたしが、そんな後悔の念に押し潰されそうになったその時、びーこがゆっくりとその目を開けた。

「びーこ！ 良かった。おい、大丈夫なんだな？ あたしのことが分かるか？」

「英子ちゃん……」

あたしの目を見ながらぼつりとそう呟いたびーこ。思わず安堵するあたし。

だが、その安堵感も次のびーこの一言で、完膚なきまでに叩き潰される事になる。

「英子ちゃん、私を… 私を、殺してください」

その言葉を聞いたとき、あいつが何を喰ったのか？ あたしはそれを唐突に理解した。

あれは猿でなくバグ。

あいつは、性質の悪い残留思念、怨念の類だ。夢の果て。そんな人間のバグ。負の感情の塊。

あれはユメを食うのではなく、夢を喰らう。

あいつは、英子の夢、つまりは、志、目標、指針、生きる希望を喰ったのだ。

だと思っっているんですか！」

いつもの、誰かさんのやかましい声があたしの脳内に響き渡る。
何だ、びーこか。

つてことは、もう朝か？ やれやれ、相変わらず起こすの早すぎ
んだよ……………ん？

次の瞬間、あたしの脳が一気に覚醒する。

「びーこ！ おま、お前、大丈夫か？ 気をしっかり持つんだぞ？
頼むから、殺してくれなんて言わないでくれ」

涙目でそう訴えかけるあたしに対して、びーこが一言。

「はい？ 英子ちゃん、やっぱりお酒はもう少し控えましょう」

「あ？」

「そもそも時計を見てください英子ちゃん。13時ですよ？ 13
時。いくら何でもお寝坊がすぎます。もう、英子ちゃんが昨日、無
理やりお酒なんて飲ませるから、私までお寝坊さんになっちゃった
じゃないですかー。ぶんぶん」

ああ、この緊張感のないツラ。いつものびーこだ。間違いない。

「よ、良かったぜええ。本当に良かった」

そう言って、柄にも無くびーこに抱きつくあたし。

「ふえ？」

まあ、たまにはこういう逆パターンもアリってことで。

それにしても、とんだ悪夢だった。こりゃ絶対今夜ユメに出るな。

…………… あっ、おい、その猿。あたしのこのユメ、ちゃっちゃと
食っちゃまってくれよ。…え？ 駄目？ 駄目なの？

まったく、やれやれだぜ。

END

第十七話 「チビにも人権はある」

第十七話 「チビにも人権はある」

「英子ちゃん英子ちゃん、私、ペットを飼いたいです」

「何度言っても駄目なもんは駄目だ。いい加減諦めやがれ」

先程から何度と無く繰り返されるやりとり。

業を煮やしたあたしは、無言でテレビの電源を切った。

何やらびーこがビービーと喚き散らしているが、あたしは断固無視を決め込む。

今宵の我らがお嬢様は、どうやらペットをご所望らしい。

まず間違いなく、さっきまであたしと一緒に見ていた動物番組の影響だろう。

何が「動物大好きペット天国100連発！」だ、コンチクショウ。こんなメンドクサー状況を招きやがって。今更ながら腹が立ってきた。

… 勿論、動物達に罪はねーが。

「聞け、びーこ。あたし達がペットを飼えない理由は大きくわけて三つある。まず一つ目、このマンションは元々ペット禁止だ」

そんなあたしの言葉に対し、再びびーぶーと一丁前にブーイングを垂れるびーこ。

「例えここがびーこの馬鹿親… 失礼、親馬鹿な両親のマンションであつても、ルールはルール。他にも住人はいるんだ。当然だが、ルールは守らなくちゃな」

徐々に小さく、弱弱しくなるびーこのブーイング。あたしは、構

わず話を続ける。

「二つ目。びーこ、お前に動物の世話が出来るとは、到底思えない」
こんなあたしの言葉に対し、再び勢いを取り戻すびーこのブーイング。

「まったく、五月蠅せーなー。むしろ、あたしに世話されてるくせに。」
「三つ目。まあ、ぶつちやけこれが一番の理由なんだが… 動物は、悪霊や魍魎の類の媒介になりやすい。あなたのボディーガードとしちゃ、これは見過ごせない点だぜ。つーわけで、とつと諦めて寝る。寝ちまえ。寝てさっさと忘れちまえ」

「犬は？ 犬はどうですか？ 英子ちゃん」

「だーめ」

「猫は？」

「媒介としちゃ最も適した動物だな。当然だめ」

「じゃあじゃあ、ハムスターは？ 小つちやくて可愛いですよ？」

「往生際が悪いぜ、びーこ。潔く諦めな」

と、いうわけで、一旦この日は納得したような素振りを見せたびーこ。

だが、それは大きな間違いだったと言うことを、あたしは身をもつて知ることになる。

全てはこの翌日。

それは、あたしにとっての悪夢の幕開けである。

「なんじゃこりゃあああああああああ！！！！？」

その日、あたしは珍しくびーこに起こされる前に、自分で目を覚ました。

もしかすると、自分自身の身に起きたこの超常現象を無意識のう

ちを感じ取っていたのかもしいし、たまたまだったのかもしいない。

理由はどうあれ、あたしは目を覚まし、眠い目をこすりながら周囲を一瞥した後、力の限りそう叫んでいた。

叫ばずにはいられなかった。
起き抜けにも関わらず、だ。

眼の前に広がる広大な光景。

どうやらあたしは、巨人の国にでも紛れ込んだらしい。

… だが、それが大きな間違いであるといことにすぐに気づかれる。

何故なら、あたしのいるここは、巨人の国でも何でもなくて、どうみてもあたしとびーこのマンションだったからだ。

一部、あたし以外の全てが巨大化しているという点を除いて。

待て、待てよ。あたし以外の… ?

と言う事は、この場合、あたしが小さくなっちまったって方が自然な考え方なのか？

そもそもどうしてこうなった？

昨日は確かびーことペットの話をして、その後一人で呑んで、そのままソファで寝ちまって、それから…。

あたしがうんうんと唸りながら逡巡しているうちに、眼の前に巨大な人影が迫る。

「あれー、英子ちゃん？もしかして英子ちゃんですか？」

それが、巨大なびーこの姿であると気づくのに、数秒の時間を要した。いや、違うな、これが普通。普通サイズのびーこだ。

だが、おかげで確信がもてた。

やはり、認めたくねーが、どうやら… あたしが縮んじまったっ

てのが正解らしい。

そんなあたしに対して、びーこが投げかけてきた言葉。

「英子ちゃん、ズルイ！ また一人でそんな楽しそうな事してー」
人の気も知らず、またすつとんきょーなセリフを吐きやがって。

「知るか！ あたしだって好き好んでこんな格好してるわけじゃねーんだぞ！」

巨大なソファアーの上で、巨人びーこを見つめながらじたばたと必死にそう訴えるあたし。

「か、か…」

「か？ 何だよ？」

「かつわいいいいいいー」

そう言っであたしをその巨大な掌の上に乗せるびーこ。

つまりあたしは、掌サイズになっちまったってこと。例えるならハムスターサイズってところだろう。

「こ、こやらやめやがれ！ あたしを撫でるのはやめろー！」

「おーよちよち。私がいい子いい子してあげまちゅからねー」

だ、駄目だ。びーこのやつ、あたしを見る目が完全に、ペットを見るときのそれそのものになっちまってやがる。

幸いにも今日は休日。びーこの送り迎えをしなくていいってのは不幸中の幸いだが、この後あたしはどーすりゃいいんだ？

というか、そもそもあたしがこんな情けねー姿になっちまった原因ってやつは、一体何だ？

「やいびーこ。さてはお前、また良からぬ事を考えたんじゃねーだらうな？」

「な、何の事ですか？」

「おいこら、今動揺しやがったな？」

「だ、だつてえー」

「だつてじゃねーよ。泣きたいのはこっちだつっの」

びーこの妄想は時として、思いもよらない超常現象を招いちゃう

事がある。

未だその才能を制御し切れていないビーこのその力。なんつーか、呆れると言うより何でもアリで神様じみてきちまってる。

これは一刻も早く一人前ってやつになってもらわねーと、この先もつとんでもない事体が起きてても可笑しくは無いってわけだ。

… まあ、何はともあれ、今はこのペット化もとい、チビ化を何とかしねーとな。

だが、そんなあたしの考えを知ってか知らずか、ビーこは今のあたしを完璧にペットの類にしか見ていない。

「英子ちゃん英子ちゃん、エサ食べますか？」

「ぶっ飛ばすぞ！」

「じよ、冗談ですつてば。でもでも、そんな愛らしい姿で凄まれても、全然怖くないですね。これなら普段出来ない事も、今なら出来るかも」

そう言うてにつこりと満面の笑みを浮かべるビーこ。

何というか、物凄く嫌な予感がする。むしろ嫌な予感しかしない。

「英子ちゃん、一緒にお風呂に入りますよう」

「はっはっは。悪いな、ビーこ。あたしは朝風呂は入らねー主義なんだ」

だが、こんななりであたしの主張がまかり通るはずもなく。

あたしの必死の抵抗も虚しく、あっという間に丸裸にされるあたり。最悪だ。

「ううううう、ビーこに、よりもよってビーこに脱がされた。裸にされた。犯された。もうお嫁にいけねーよう」

「はい、一緒に入りましょうねー。キレイキレイしましょうねー」
ひょういと掴まれて、そのままバスルームにGOされるあたし。

眼の前には広大な海原もとい、湯船に張られたお湯。

元々無駄に広いバスルームだが、今日はまた一段と広く見える。ぶくぶくと湧き上がるジェットバスが何とも凶悪だ。

「ふっふっふー。英子ちゃん、私が体を洗ってあげます」

「いや、別にいい。むしろ遠慮するぜ、あたしは」

「ふふーん、遠慮は無用です。今日は私に任せてください！」

そう言っつて巨大な泡泡スポンジをあたしに多い被せるびーこ。死ぬ。

びーこに、泡に、スポンジに殺される。

「や、やめるペタンコ！ まな板！」

「何ですか？ 自慢ですか英子ちゃん？ 私だつて、私だつて英子ちゃんくらいの年齢になればきつと！」

完璧なる逆効果。

激しさを増すスポンジ。

全身を包み込む泡。

ぐっつたりなあたし。

「ゆっくり肩まで浸かつて一緒に100まで数えましょうねー」

見渡す限りの水面。あるのはびーことあたしの体のみ。

昔、海のご真ん中で取り残されたダイバーの映画を見た事があるが、あんな感じ。サメがいねーのがせめてもの救いだ。

あたしは、朦朧とする意識の中、溺れまいと必死にびーこの体にしがみつく。

「あははは、英子ちゃんつてば、くすぐりたいです」

一軒微笑ましい光景に見えるだろーが、あたしは必死だ。一歩間違えば普通に死ねるレベルなんだと言うことを理解して欲しい。

この野郎。人の気も知らず暢気に笑いやがって。

今日の説教は三倍増しだぞコラ。

だが、どんなに困難な状況にも終わりは来る。明けない夜が無いように。やまない雨が無いように。

あたしがびーこの掌の上でぐったりしなながらバスルームから出た瞬間、びーこが唐突に叫び声を上げた。

「どうやら、休息の時間は与えてもらえないらしい。」

「英子ちゃん英子ちゃん英子ちゃん。出ましたー、えええん。出ちやいましたー」

のぼせる体に鞭打って何とか顔を上げ状況を確認する。

眼前には一匹のちんけな悪霊。

叫び声を上げるのも馬鹿馬鹿しい、そんな取るに足らない相手。

勿論、いつもの大きさでの話だが。

「ったく、こんな真昼間っからご苦労なこつたな。おいびーこ。どうする？ あたしはどうすることも出来ねーぜ」

あたしの姿をこんなミニマムサイズにしちまった原因がびーこにあるとしたら、元に戻せるのもまた、びーこだけ。

加えて、こんな日の高いうちに魍魎の類が現れちまったのも、元を辿ればあたしをこんな状態にしちまったのが原因。

「そ、そんなー。私、やっぱり可愛い英子ちゃんよりいつものカツコイイ英子ちゃんがイイですー。うえええええん」

びーこのそんな言葉の直後、あたしの体が光に包まれる。

…… どうやら元に戻れるらしい。

「やれやれ、手間かけさせやがって。こんな体験、もう二度とごめんませ。」

「ふん。いつもの大きさってのは見晴らしがいいぜ」

あたしは、壁に飾られている一本のサーベルを手に取り構えた。

「きゃーカツコイー。やっぱり英子ちゃんはこうでなくてはいけませんよ。でも、服はきちんと着てくださいね、英子ちゃん」

五月蠅せーよ。

そもそも誰のせいでこんな事になったと思ってんだこいつは。

あたしは山ほどある文句をぐっと堪えて、眼の前の雑魚にサーベルを突き立てた。

「びーこ、これやるよ」

そんなミニマム騒動も落ち着いた頃、あたしはびーこにあるものを手渡した。

「知ってるか？ あたしがガキの頃に流行ったやつなんだが」

「うわー、たま っちー！」

「ああ。これなら飼っても問題なし、だぜ。ま、ペットは無理だがこの辺で妥協してくれ」

「でも、英子ちゃんがたま っちを持っているだなんてちょっと意外ですね」

例えばPC上のデジタルペットとか、携帯型ゲーム機のペットゲームの類、はたまたアイボなんて手も考えてみたが、びーこにやこれが一番しっくりくるような気がしたのだ。

そうさ、100%あたしの趣味さ。

「っか、わりーかよ、全シリーズ持ってたわりーかよ。可愛いもの好きでわりーかよ。こんなデジタルペットに哀愁を感じちゃわりーかよ。」

「そんなあたしの険しい表情に対し、びーこが慌てて一言。」

「嘘嘘。一緒に育てましようね？ 英子ちゃん」

「やっぱりペットを飼うなんて無理な話なのさ。」

「なんつっても、並みのペットよりよっぽど手間がかかるからな、びーこは。」

「本当、やれやれだぜ。」

E
N
D

第十八話 「ダジャレ好きに悪い奴はいない」

第十八話 「ダジャレ好きに悪い奴はいない」

皆さんこんばんは、びーこです。

誰ですか？ 今、露骨に嫌そうな顔をした人は。

もう！ 英子ちゃんじゃなくて残念でしたー。べーっ。

……凄く、虚しいです。

でもでも、独り言くらい許してください。

何か喋っていないと、私、可笑しくなってしまうそうだから。

だって、だってえええー！

だー！ーれも、いないんですもん。

しんと静まりかえった学園内。

誰も居ない教室。

見当たらないクラスメイト達。

いつまでも始らない授業。

やって来ないいぢわる先生… あっ、それは別にいいんですけど
ね。

そういうわけで私は、教室で唯一人、ぽつんと席に座って待ちぼうけをしているのです。

可笑しいです。こんなの絶対可笑しいです。

英子ちゃんだったら絶対に、やれやれだぜー とか言ってるレベルです。

うーん、今日は皆さんお休みなのでしょうか？

皆さん風邪をひいちゃったとか？

それとも学園に行くのが億劫になってしまったのでしょうか？

分かります。私にはその気持ちが良く分かります。

私も日曜の夜などには英子ちゃんに…… あれ？ そういえば今

日は、何曜日なのでしょう？

何月何日の何曜日の時ごろ？

私は、慌てて教室内の時計やカレンダーを探しますが、何故か一向に見当たりません。

待つて、待つてください。

私はいつからここにいるのでしょうか？ どうしてここにいるのでしょうか？

そもそも私は、学園にいるにも関わらず制服を着ていません。部屋着である諺Tシャツを着ています。

ちなみに今日の諺は「天を怨みず、人を咎めず」です。とってもステキな諺ですよ？ ね？

… ごほん。ちょっとだけ話が脱線してしまいましたが、これは明らかに変です。

もう何もかも変です。あべこべです。

英子ちゃんのパジャマくらい変です。

だからといって、このまま何もしていないでいるわけにはいきません。例え寂しくても、怖くても、虚しくても、泣きたくても、立ち止

まっているわけにはいきません。

だって私は、英子ちゃんに頼りっきりの私を卒業すると心に誓ったのですから。

だから私は、涙を拭いて椅子から立ち上がったのでした。

とはいえ、何のプランも無い私。

一先ず学園の外に出てみたものの、やっぱりだーれもいませんしんと静まり返った、まるで映画のセットのような町並み。

世界はこんな広いのに、ここにいるのは私だけ。

私一人に、この世界は広すぎます。

やっぱり、私の隣には英子ちゃんがいてくれないと。

だから私は、私と英子ちゃんのマンションを目指す事にしました。

いつもは英子ちゃんと二人の登下校。

だけど、今日は私一人の帰り道。

誰もいない道路を一人で歩くのは確かに寂しいですが、やっぱり隣に英子ちゃんがいないのが一番寂しいのです。

普段からお嬢様ーとか、天然なんて、さんざん英子ちゃんに馬鹿にされていますが、私だって帰り道くらい知ってます。

英子ちゃんに護られなくても、私一人でも安全に帰れます。

だって、私以外にはだーれもいないんですから。

どれくらい歩いたのでしょうか？

時計もないし、そもそも誰もいないので時間を尋ねることも出来

ません。おまけにどれだけ歩いてても雲一つ動かない、可笑しな空。

英子ちゃんは、神様を信じていません。

例え神を信じていなくても、地獄はある。それが酔った時の英子ちゃんの口癖です。

もしかしたら私は、その地獄という場所に紛れ込んでしまったのかも知れません。

そんな諦めにも似た思考が、私の脳内を占拠し始めたその時、私の眼の前に見慣れたマンションがその姿を現しました。

ああ、天国はここにあったのですね？

私は、それまでの疲れが嘘のように全力疾走でマンションの入り口へと駆けました。

幾つかの暗証番号と指紋入力セキュリティを超えて、私は、とうとう私達の部屋へとたどり着きました。

私は、震える手で恐る恐るドアを開きます。

もし、もしもここに英子ちゃんが居なかったら？

うつん、駄目。悪い方ばかり考えてしまうのは私の悪い癖。

私は、勢い良くドアを開き、部屋の中へ進入しました。

いない。英子ちゃんがない。どこにもいない。

私は、今日ほどのマンションの広さを怨んだ事はありませんでした。

そして、最後の一部屋を探し終わり、私は絶望を携えリビングへと戻りました。

「英子ちゃんが、どこにもいません。私は、私は、やっぱり一人ぼつちなんです。世界に一人だけ。ここはきっと、私の地獄なのですね」

孤独と静寂。

それは、私に対してあまりにも皮肉な世界。
絶望に支配された私は、その場で蹲り声を上げて泣きました。

その声は、正にそんな瞬間に聞こえてきたのでした。

「いや、その考え方はあながち間違っちゃいねーぜ、びーこ」

ああ、何て懐かしく暖かい声なのでしょう。

私は、その声に導かれるかのように、ゆっくりとその意識の糸を手放していったのでした。

あたしは、紅く煌くナイフを床に放り投げ、英子の体をソファーに横たえた。

びーこのやつ、何とかこっち側に戻れたらしい。

つたく、やれやれだぜ。心配と苦勞ばかりかけさせやがって。

「セカイニヒトリダケ」

何の事は無い。全てはびーこが採ってきたこの怪しげなキノコが原因だ。

まあ、名称は今あたしが付けたんだけどよ。悪くないだろ？

それはそれとして、つまり、事の顛末はこうだ。

いつものごとく、その才能と収集癖を遺憾なく発揮し、怪しさ120%のキノコを拾ってきたびーこ。

あたしが発見したときには、既にそいつを食っちゃった後で、びーこは床にぶっ倒れながら、うんうんと独り言を延々と呟いている

始末。

そんなびーこの独り言によると、このキノコ、食った人間の脳みそを孤独と静寂の世界へと連れ出しちまうって代物らしい。

ある意味天国と言えなくも無い世界だが、どうやらびーにとっては地獄だったらしい。

つーわけで、どう考えてもびーこの迷惑この上ない才能が惹き寄せたこの異端なキノコを解毒ならぬ、取り除くため、あたしは件のシリアルキラーに放ったのと同じ紅の煌きで、びーこの中の異端、つまり、キノコの作用を取り除いてやったってわけだ。

脳内の話だったとは言え、あいつもこれでちったー懲りただろう。これからは、こういうバカげたフリーダムかつ自由人すぎる行動は自重してくれるとありがたいんだがなあ。

……と、思ったが、やっぱり今回もその望みは薄いかもしれない。

こんな満面の笑みを浮かべて寝ている奴が、反省なんてしてわけねーもんな。

まったく、先が思いやられるぜ。

END

第十九話 「透明人間は漢のロマン」

第十九話「透明人間は漢のロマン」

「んだよう、びーこお、あたしの酒が呑めないってのかよおー」

あたしは、ほろ酔い気分で隣に座るびーこに絡む。

辺りには飲み散らかしたビール缶やボトルが散乱している。

あたしだって人の子だ、たまにはこんな風に呑みたい明かしたい時だってある。それだけの話。

「駄目です！ もう、子供にお酒をすすめてどうするんですか。というか英子ちゃんだってまだ二十歳前でしょ。お酒は二十歳になってからなんですからね？」

出た。英子の十八番。いっつも言っちゃいるが、ちっとくらいまけるってーの。減るもんじゃなし。

「んだよう、ケチ臭いこと言うなよおー。おっ、もう空じゃねーか。びーこ、もう一本持ってきてー」

「全くもう、仕方の無い英子ちゃんなんですから。今日はもう呑みすぎです、良いですか？ これで最後ですからね？」

「へーい、へい」

びーこは小さな溜息をつきつつ、パタパタとキッチンへ向かった。

…… さて、後はコイツをどうするか、だ。

あたしがソイツの存在に気がついたのは3時間前。

あたし達、つーかあたしが酒盛りを始めたたちょうどその時の事で

ある。

始めはあたしが酔っ払っただけだと思っていた。

例えば眼の前のビール缶が勝手に倒れたり、つまみが微妙に移動したり…

で、試しに気配を探ってみると確かに居る。姿は見えねーが確かにあたし達の近くに、ソイツは居た。

あたしやびーこは霊が視える。だからコイツは霊ではない。つまり、残る可能性は… そう、透明人間だ。

そして、気になる点がもう一つ。
こいつは一体何を考えてやがるんだ？ っるところ。

相手が透明人間なのはほぼ間違いない。恐らく、びーこに惹きつけられてのこのこやってきた馬鹿の一人だろう。

だが、だったら何故すぐに襲い掛かってこない？

ただでさえあたしは酒なんて呑んじまって、隙だらけな状態だったのに。

それともまさか、いや、まさかとは思っが…… コイツはアレを待っているのか？

だとしたらコイツ…。

そして、それを確かめるチャンスはすぐにやってきた。

「はいどーぞ、英子ちゃん。本当にこれで最後なんですからね？
呑みすぎは、めっですよ？」

「あっ、ああ。分かったぜ」

「はい、良い子良い子。というわけで、私はお風呂に入ります。英子ちゃん、そのまま寝ちゃ駄目ですからね？ 風引いちゃいますから」

きた。

あたしはびーこのその言葉を待っていた。

さて、奴さんの反応は？

「びーこと一緒にすんな。あたしはこんなところで寝たりしねーよ」

「そうですか？ とにかく、呑み過ぎないようにしてください」

そう言っただけでリビングからバスルームへと向かうびーこ。

直後、テーブルがガチャリと音を立てて大きく揺れた。

明らかに誰かが立ち上がったのだという事が分かる。

まさかとは思っちゃいたし、冗談半分の推察だったが、悲しいかなどつやらあたしの推理ってやつは当たっちゃったらしい。

だがまあ、こうなってくるとやるべき事もやり方もおのずと決まってくる。

「さーで、と。トイレでも行きますかね」

あたしは、件の透明人間、いや、透明変態男にも聞こえるよう、あえてそんな大声で独り言を呟いた後、素早くびーこのケータイに電話を掛けた。

びーこの体質上、いづれどこで何が起こるかわからない。だからこそ、びーこには常にケータイを常備するようお願いさせてある。

びーことの通話を切り上げた後、あたしは最短距離でびーこの元へと向かった。

コツ、コツと足音を立てながら、男はある場所へと一歩また一歩と近づいている。

これから行う行為。

それこそが男にとっての生きる意味であり、唯一のレゾンデートルであり、この男にとっての全てだった。

男は自分の特性に対し、大いに自信を持っていたし、狙った獲物を逃した事、自分の定めたミッションに失敗した事などこれまで一度も無かった。

そもそも男には敵が居なかった。自分の存在に気がつく人間は、これまで誰一人としていなかったからだ。

だからなのだろう。これから眼の前に訪れるであろう桃源郷を想像し、男は、視えるはずの無いその顔を大きく歪ませ、ニヤリと笑うのだった。

そして、男は、その部屋のドアに手を掛け…。

ガチャっという音と共にバスルームのドアが開かれる。
ハッ、掛かりやがったな？

「ぶアーかめ。残念だったな、ビーこじゃなくて」
あたしは、そんなセリフと共に、そこにあるであろう透明人間痴漢男の手を掴み、一本背負いを決め込む。

「うおーら、よっ」
バスルームの床に叩きつけられた糞野郎がのた打ち回る。
「まあ、定石だよな。映画なんかでも使い古された手だぜ。湯けむ

りでその輪郭がぼんやりと浮かんでくる、なんてのはな」

水に足を取られ、何度か滑りずっこけた後、変態男がよろよろと立ち上がり、声の主、つまり、あたしの姿をじっと睨む。

しばしの沈黙の後、奴の顔から突如として大量の血液が噴射される。

「お？　なんだなんだ？　さっきのが予想以上に効いたってことか？　まあ、んなのどっちだっていい。あたしにとっちゃ好都合だしな」

件の透明人間の体は、自らの鮮血によりその輪郭をくつきりと浮かび上がらせていた。

はん。ざまーないぜ。これじゃ透明人間でもなんでもねーな。あたしの目の前に居るのは、ただの変態野郎。それだけだ。

「お前、今までもその力を悪用して随分と下らねーことをやってきたんだろ？　てめー見たいな奴を女の敵って言うんだろ？　なあ？　もういいだろ。こころで終わりにしよーぜ。勿論、てめーの所業をじゃない。てめー自身をだ！」

あたしは予め準備しておいたナイフを手に取り、素早く精神を集中させていく。

「月は村雲花に風、月夜に提灯夏火鉢。…　今宵の我が月は、半月」
透明人間なんて名前だが相手はあくまで人外。悪霊と同じくくり。相手が人間でない以上、そんな相手に容赦は要らない。

腕を振り上げ、こちらに猛進してくる透明野郎に対し、あたしは狙いを定めて蒼く煌くナイフを一投。

あたしのナイフは見事、奴のどてっばらに命中。

聞きたくも無い、汚ねー断末魔をあげながら、奴はあたしの眼の前から、消滅した。

やれやれ、一段落ってやつだ。

あたしは、そのままの格好でバスルームから出ると、心配そうに
あたしを見上げるビーこがぼつんと佇んでいた。

「おう、急な作戦だったが上手くいったな。つーか馬鹿だよなあ。

透明な姿で女の風呂を除くとか、馬鹿な男のテンプレみてーなくだ
らねーことしやがって。ま、自業自得だな」

「やつぱり英子ちゃんは凄いです。私、一緒にいたのに全然気がつ
きませんでしたもん。でも、その、英子ちゃん。バスルームで私に
成りすましてだまし討ちって作戦自体はいいと思うのですが。わざ
わざ裸にならなくても良かったのではないのでしょうか？」

「そうか？ 仮にも風呂場に服着たまま入れるかよ。それによ、あ
の変態野郎はビーこの裸が見たかったんだろ？ だったら別にあた
しがどうこうしよーが関係ねーじゃん」

あたし何かおかしい事言ったか？ 間違ったこと言ったか？

ビーこは再び小さな溜息をつきながら言う。

「英子ちゃん？ 英子ちゃんだって立派な乙女なんですからね。も
う少し羞恥心とか女性らしさを身に着けましょうね？」

そう言っであたしの胸を凝視するビーこ。

「んだよ？」

「それとも何ですか？ 持つものの余裕ってやつですか？ 英子ち
ゃん、ノブレスオブリージユって言葉知ってます？ まったくー、
やれやれ、です」

ビーこは、あたしにバスタオルを渡しながら、そうオーバーリア
クション気味に言った。

つーか誰の真似だよ、それ。

… やれやれだぜ。

E
N
D

第二十話 「人魚は魚類ですか？ いいえ、ナマモノです」

第二十話「人魚は魚類ですか？ いいえ、ナマモノです」

「あ、あちい…… 死ねる。軽く死ねるな、これは」

あたしは、今、太陽がさんと照りつけるまるで砂漠のような砂浜で、一人、佇んでいる。

基本的に、あたしはこの時期の海が嫌いだ。

何が悲しくてこんな糞暑い中、汗を垂らしながら、塩水なんぞ浴びにゃいけねーのか。

いいか？ 海は泳ぐもんじゃなく。叫ぶもんだ。

こつ、胸に溜め込んだ色んなもんを、海に向けて全力投球してやるのだ。

海は多くを語らない。だが、様々なことをあたしに教えてくれた。

けどまあ、そんな母なる海ってやつも、一つだけあたしに教えてくれなかった事がある……。

「えーいーこーちゃん。一緒に泳ぎましょーよー。気持ちいいですよー」

白のワンピース型の水着とサメ型の浮き輪を装備したびーこが、これみよがしに、満面の笑みであたしに向けて手を振っている。

はっはっは、びーこの野郎。あんなにはしゃいじゃってまあ。

まったく餓鬼だな。

最悪だ。

あたしの目に飛び込んできたのは、ぶくぶくと音を立て沈み行く
びーこの姿だった。

恐らく波にでも流されたのだろう。いや、びーこのことだ。もし
かするとそんな単純な話ではないのかも知れぬ！。

だが、今大切なのはそんなことじゃない。眼の前でびーこがおぼ
れかけてるってことだ。

遠い。

果たしてカナヅチのあたしがあそこまでたどり着けるだろうか？

違うだろ。

馬鹿かあたしは。

辿り着けるかどうかじゃない。死ぬ気で辿りつくしかねーだろ
うが。

あたしが意を決して、海へと飛び込もうとしたその時、必死の形
相のあたしの横を華麗に通り返ぎ、そのまま海へとダイブする女性
が一人。

さつきまで誰も居なかったはずなのに。

しかも、何て見事なフォーム。速く、美しく、華麗。

おいおい、あれじゃまるで… 人魚じゃねーか。

あたしがぼかんと呆気に取られているうちに、女性はびーこを抱
えてあたしの元へと戻ってきた。

「びーこ無事か？ 怪我ないか？」

「げっほ、げほ。ううう、うえええん、こ、怖かったー。ざぶーん、どばーんって」

「だからあれほど気をつけろって言ったじゃねーか。まったく、まあ、無事でよかつたぜ。それと」

あたしは改めて眼の前の人魚もとい、びーこの命の恩人に頭を下げる。

「どこの誰かは知らねーが、スマン。助かった。恩に着るよ。……」

…で、あんた一体何もんだ？」

「え、英子ちゃん！」

「びーこは黙ってる。んで、ノーコメントってわけか？」

あたしは、ハーフパンツのポケットに忍ばせているナイフに手を掛けながらそう言った。

分かってるさびーこ。仮にも眼の前の人物はびーこの命の恩人だ。あたしだってこんなことは言いたくねー。

彼女が居なかったら、今頃びーこがどうなっていたか分かったもんじゃない。何しろあたしは泳げないから。

だが、だ。

びーこが溺れかけたのも、こいつの仕業だったらどうする？

それにあたしは、さっきからこの女性に対し、人間のものとは違う何かを感じている。

眼の前の女性。

あたしも背は高い方だが、あたしを凌ぐスケールの持ち主で、かつてのびーこの髪型を連想させるセミロング。

年は…あたしより下、びーこより上といった程度だろう。

着衣のまま、しかもびーこを担いで泳いでいたにも関わらず息一つ切れていない。

それどころか、終始無言でニコニコ顔。

不気味なくらい、ひたすらにあたし達を見つめている。

が、ひとしきりあたし達の顔を見つめ終えた後、彼女は恐らく私物であるう小さなホワイトボードを取り出し、手馴れた感じでキユツキユと何かを書き出した。

「英子ちゃん英子ちゃん、もしかしてこの方喋れないのでしょうか？」

「さあな」

喋れないだと？

ビーこは極たまにだが、核心をつくような事を言い出すから侮れない。

成る程、それが確かだとするとこいつは…。

マジックペンの蓋を閉じ、再び、満面の笑みであたし達に顔を向け、ホワイトボードを見せる女。

「えーっと、なになに。こんにちワ、ワタシの名前はしいです。

わあ、可愛いお名前ですねー」

そんなビーこのリアクションに対し、こくこくと嬉しそうに頷くしいと名乗る女。

と、ポケットからクリーナーを取り出し、再び何かを書き出した。今度はビーこの代わりにあたしが読み上げる。

「ビーコちゃん、海はたのしいところダケど、キケンなところデモアリマス。もつときをつけヨウね？」

正論だ。

どこかたどたどしい字で書かれたその文章は、ビーこに対しあまりに正論だった。が、あたしが気になったのはそんなところではない。

ビーこの事を知っているだと？

こいつも、ビーこに惹き付けられたアホ共の類ってわけか？

…いや、つーかビーこって名前はそもそもあたしがつけた渾名だ。あたしは、ビーこの事を本名では一度たりとも呼んでいない。

だとしたら、何だ？

そんなあたしの疑問も、次のしいの言葉で直ぐに解決することになる。

「わタシは、人魚デス。いえ、セイかくには、もと、デスが」

人魚。

流石のあたしも実物は初めてみるな。

やれやれ、何ともまたレアなヤツが惹き寄せられたもんだ。

「で？ その人魚さんがわざわざ何の用だ？ びーこを助けてくれたのは感謝してるが、当然それだけってわけじゃねーんだろ？」

人魚は、あたしの言葉に深く一度頷いた後、先程と180度異なり深刻な顔つきでホワイトボードに書きなぐる。

そんな人魚の文章を、今度はびーこが読み上げる。

「ふむふむ。わタシは、エイコさんに、あいニきマシタ。へえー、英子ちゃんにですか？ 珍しい事もあるものですねー、英子ちゃんにお客さんとか。えーと、エイコさん、わタシを…」

びーこは、そこで言葉を止めた。

結論から言えば、この人魚、やはり只者ではなかった。

びーこの事を知っているどころか、このあたしの事も知っていた。いや、むしろこの場合、目的はびーこより、あたしということになる。

…………… どうやらいつ、あたしに消されたいらしい。

比喩的な意味でも、あたしの感情任せのセリフでもなんでもなく、文字通り、ホワイトボードにそう書かれていたのだ。

そう、あなたの手で私を消してください、と。

「そんな！ どうしてですか？ しいちゃん、どうしてそんな事を言うのですか？」

理解できないという風に、ビーこが声を上げる。

生憎だが、あたしには何となく事の次第が読めてきた。

これだから、女って生き物は嫌なんだ。

「エイコさんは、ワタシたちのようなそんざいのあいダでは、ゆうメイじんなんですよ。モチろん、ビーコちゃんモ」

糞が。

元々この手の商売は暗躍が基本だ。あたしは元々目立たず跡を残さずやってきた。そのつもりだった。

だが、事びーこのお守役を引き受けてからは、どうしてもそう言うていられない状況が頻発する。あたしもむやみに動きすぎた。目立ちすぎちまった。

遅かれ早かれ、こうなることは明白だった。

まあ、裏家業としてやっていくには既に致命的だろう。

やれやれ。話が逸れちまったが、つまり、こいつは最初からあたしに消してもらうことを望んであたし達の前に現れたってわけだ。理由は言わずもなだろう。

人魚の癖に立派に生え揃った二本の足と、失った声が雄弁に物語っている。

これだけ材料がありゃ、小学生でも分かるレベルだ。

だからこそ、余計にあたしは聞きたくなかった。
さて、と。

そろそろ決断の時だ。

あたしはこいつをどうしてやればいい？ どうするのが一番の
正解だ？

「お前の想像通りさ。あたしは、あたしの前に立ちふさがる人外共
を問答無用でぶった切って、片っ端から無間送りにしてやった。お
前はその噂を聞きつけて、御丁寧にも自らあたしに消されにやって
きた」

眼の前の元人魚はコクコクと何度も何度も頷いた。深く深く頷い
た。

「だめ、絶対に駄目ですよ、英子ちゃん。だつてしいちゃんは何に
も悪い事してないじゃないですか。それどころか私を助けてくれま
した。それに、私はまだちゃんとお礼も言えていないんですから」
「だつたら、今すぐ言うんだな…………… いや、悪いな、びーこ。
ちつと遅かったみてーだぜ」

あたしは、紅く煌くナイフを眼の前の元人魚から引き抜いた。

「馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿ばかー、英子ちゃんのばかー」

ぼかぼかとあたしを叩きながら、あたしの胸に顔を埋めるびーこ。
力なく、その場に倒れこむ人魚。

「馬鹿とはひでえ言い草だな。まあ、あながち間違っちゃいねーか
もしれないが」

直後、人魚が紅い光に包まれる。

「え？ え？ えーつつ？」

「悪いな。あたしは天邪鬼なんだ」

光はやがて収束し、あたし達の眼の前には、間違う事なき人魚の姿が現れた。

「この紅の力は、蒼と違って人間の異端を取り除く力だ。一か八かで使ってみたが、どーやら大方上手くいった見てーだな」

意識を取り戻した人魚は、自分の姿を見て、驚愕の表情を浮かべながら何度か口をぱくつかせたものの、やがて、ホワイトボードに何かを書き始めた。

「ドウして？」

どうして。どうしてだと？ んなのあたしが聞きてーよ。

「あんたがどうして人間になったのか、どうして消して欲しいなんて言いやがったのかはあえて聴かねー。いや、聞きたくない。だよ、あんたは仮にもびーこの恩人なんだ。どーせなら生きていて欲しい… と、びーこなら言うはず」

「勿論です！ 折角人魚さんとお知り合いになれたんですもの、私もっともつとお話したいです！」

「だとよ。まあ、死ぬほどお節介かもしれねーが、その姿で妥協してくれ。あたしはびーこみたいに優しくかないからな。ほら、声は出ないままだろ？ … つーより、これがあたしの力の限界だな」

眼の前の人魚は、声もなく泣いた。

「まあ、機会があつたらまた姿を見せてくれよ、びーこも喜ぶ」

しいがどんな思いで涙を流したのか？

しいがこの先どんな人生を送るのか？

どちらもあたしには分からない。

一度曲がつちまつた自分を、人生を再び軌道修正させるのは、なかなか難しい。

見てくれは確かに元の人魚の姿に戻つたが、一度失つた声は永遠に戻つては来ない。

後は、そう、全ては彼女次第。

色んなものを抱えて、色んなものを失つて、しいはこれからどんな海を泳いでいくのだろう。

あーあ、だからあたしは海が嫌いなんだよ。

END

第二十一話 「図書館で荒ぶる鷹のポーズ」

第二十一話「図書館で荒ぶる鷹のポーズ」

あたしは、眼の前に詰められた本のタワーから一冊を抜き取り、適当にページを開いた。

相変わらず、ビーこはあたしの隣の席でうんうんと唸っている。

あたし達は今、とある図書館へやってきていた。

期待を裏切るようで申し訳ねーが、ここは別に特別な場所じゃない。

どこの町にも一つはあるような、極極普通の図書館ってやつだ。

ビーこの学園での課題をこなすため、あたし達は頻繁にここを利用する。

確かにあたしはビーこのお守兼ボディーガード兼保護者、のようなものではあるんだが、流石にビーこの宿題を手伝うってわけにはいかない。

いかないっつーより、正直、あたしにはさっぱりだからだ。

っわけで、ビーこには一人で頑張ってもらわなきゃならねーのだ。

で、その間、あたしが何をしているのかといえば…。

こつ見えて、あたしは本をよく読む。読書が趣味だといっても過言じゃねーくらいには読む。

だが、あたしが読む本の傾向は決まっている。

ちなみに、今、あたしの眼の前に積み重ねられている本の一例を上げよ

う。

世界の超常現象、オカルト大全、みずきしげる妖怪百科、世界のモンスターがよく分かる本、そして世界各地の伝承&民俗学書。

あ？ 誰だよ、今笑った奴は？

…………… あたしは至って真面目にこれらの本を読んでいる。至って真面目に、だ。

冗談のようで冗談じゃねー話、これらの本はびーこの日常生活において、大いに役に立つ。

つまりは、びーこの呪われた才能に惹き付けられた糞野郎供を屠るための、貴重な糸口となる情報源っつーわけだ。

事實は小説よりも奇なりなんて言うが、あたしたちにとつちゃ、フィクションすら現実と化す。

あたしは、ケルト神話について書かれた凶器になりそうなほど分厚い本を閉じ、チラシと時計に目を向けた。

あの糞野郎の弱点はねーかと、色々な文献をあたっっちゃいるが、未だ有用な情報は皆無。

リベンジの日は、まだまだ遠い。やれやれだぜ。

あたしは一旦休憩するべく、隣のびーこに声を掛けた。

「びーこ。ここらでちっと休憩にしねーか？ つーか進展具合はどうよ？」

あたしの声に反応し、びーこがこちらに満面の笑みを向ける。

が、次の瞬間、あたしの表情はびーこのそれと異なり、たちまち怪訝なものへと変化する。

「おい、何やってんだ？ びーこ。集中のしすぎでとうとうぶっ壊

れちまったか？」

そんなあたしの言葉に対しびーこは、手をぱたぱたと動かしながら、怒ったような顔で…… 口をパクつかせた。

何の事は無い。よーするにいつもの事、である。

「びーこ、お前…… 喋れてねーぞ。つーより、声が出てない」

眼の前のびーこは何を言ってるのかは分からねーが、何やら驚愕している。

恐らく、えええええええとか、うそーーーとか叫んでるんだろ。

「まあ、これはこれで静かで良いんだがな。試しに、手を叩いてみてくれねーか？」

言われたとおり、何度か手を合わせ拍手をするびーこ。
が、やはりその音は聞こえてこない。

成る程。これはつまり。

「びーこ、お前音を盗まれちまったらしいぜ」

犯人は言わずもがな、所謂びーこのファンだろう。いつもの、とびきり熱心な。

「ったく、おちおち本も読んでられねーのかよ。まあいい、あたしは自分の仕事をするだけだ。びーこ、あんたは大人しく課題の続きをやって待ってな。いいか？ あたしがいねーからってサボるんじやねーぞ？」

こくこくと、肯定を示すように何度か頷いたびーこは、割と落ち着いた雰囲気ノートに視線を戻した。

どうやら、いつもみてーに泣いたり喚いたりはないらしい。

こいつも、これはこれでちっとは成長してるってことかね？

まあ、今はこれで良い。

今はまだ、あたしに存分に護られていればいいんだ。自分出来る事を精一杯やっていけば、それでいい。

あたしは、真剣にノートと向き合うびーこの頭を二度ほどぼんぼんと撫でた後、椅子から立ち上がり、図書館内の徘徊を始めた。

人の多い一階を避け、あたしは郷土展示物コーナーとなっている三階に足を運ぶ。

ここは、この図書館内において一番人気の少ない場所。

あたしのカンってやつが正しければ、この辺りにいそいな気が…

…
ビンゴ！

あたしの視線の先に漂う小さな緑の発光体。

まるで蛍の光のような一体の発光体。

妖精、しかも俗に言うイタズラ妖精・ピクシーの派生種。

恐らく、蛍音って種類だと思う。そう、けいおん…………… ほらな

？ さっそくさっそく勉強したことが役に立った。

ちなみに、苦情は受け付けねーぜ。

「おい、妖精野郎。時にはイタズラじゃ済まされねーこともある、ってことを勉強してもらおうじゃねーか」

あたしは懐からナイフを取り出そうとして、すぐに躊躇した。

ここは図書館。

仮にも公共の場でナイフを取り出そうもんなら、ちょっとばかり厄介な事になりかねない。

幾らあたしでも、法律は切れない。無視できない。

仕方なく他に何か得物になりそいなものはないかポケットを弄ってみるも、出てきたのは貸し出しカード、所謂図書カードだけだった。

……まあい、イタズラっ子をとっちめるにや充分すぎるほどだぜ。

蛍音は、相変わらずあたしの周りを飛び回っている。周囲の、たぶん歴史的価値があるんじゃないかねーかと思しき壺や石器なんかをなぎ倒しながら。

「はえーなおい。流石は妖精ってところか。こういうとき、定石では目で捉えようとするんじゃないか、音とか気配とかで感じるっていうよな」

あたしがそう言い放った瞬間、蛍音はびーこにそうしたように、自らの音をも遮断した。

音も無く飛び回る蛍音。

コイツ、完全にあたしの事を馬鹿にしてやがるな。

「はん。上等じゃねーか。だが残念だったな、生憎ピクシーについては予習済みなんでね」

あたしは着ていたジャケットを裏返しにする。

「こういうの、ピクシーレッドって言うんだろ？ イタズラ妖精にかどわかされることをよ。んで、その対処法が上着を裏返す事」

小さなイタズラ妖精が明らかに動揺したのが分かる。

「終わりだな。大事なものなんだ、返してもらうぜ。そら… よっ」

あたしは、若干の力を籠めて図書カードを手裏剣のように蛍音に向けて放つ。

空を裂きながら、あたしの図書カードは見事悪ガキ妖精に命中。

瞬間、妖精から蛍火ならぬびーこの声飛び出し、持ち主の下へと消えていった。

あたしは、へにゃへにゃと落下した妖精を、むんずと鷲掴みにして言う。

「本来、あたしの前に立ちふさがり、びーこに害をなす存在は問答

無用で無間送りにしてきた。が、あたしだって鬼じゃねー。それにガキをいたぶるのも趣味じゃない。つーわけで、今回はこれくらいで勘弁してやる」

あたしの手でじたばたしていた妖精が明らかにほっとしたのが分かる。

「ただし、条件が一つ。この図書館がてめーの住処なんだろう？ あたしはな、図書館で騒ぐ輩が大嫌いなんだ。だからよ、そんな奴がいたら、てめーの力で脅かしてやれよ。そーすりゃ必然的に静かになるだろう？」

あたしは妖精顔負けの悪巧み顔を浮かべながら、そう言い放った。これで今後のあたしの図書館ライフは安泰、完璧だろう。

…… と思ったのも束の間。

「誰ですか！ 図書館内で暴れている人は！」
階下から司書らしき人物の怒声が聞こえてくる。

前言撤回。

どうやらあたしの今後の図書館ライフは間違いなく前途多難なようだった。

まったく、やれやれだぜ。

END

第二十二話 「ミイラは一日にしてならず」

第二十二話 「ミイラは一日にしてならず」

「うおわっ」

いつものようにびーこを引き連れての学園からの帰り。

いつものようにマンションのドアを開け、いつものように部屋の中に入ると、そこにはとある不法侵入者が居た。

まあ、それすらいつものことなんだが。

「わー、包帯男さんですね？」

包帯男？ 成る程、そりゃ惜しいが違う。

「ちっと違うぜ。あれはな、俗に言うミイラ男って奴さ」

恐らく、びーこに惹き付けられてこんな日本くんたりまでやってきちまったんだろう。

まったくもってご苦労なこった。

あたしは、いつものように部屋の隅に置かれたバッドを手に取り、構えたものの……ふと、とある考えが脳裏をよぎり、その構えを解いた。

ミイラ男。

こついつちや何だか、雑魚中の雑魚。

特筆した殺傷能力を持ち合わせていないし、動きも鈍く、耐久力も低く、脆い。

言っなれば、あたしにとって羽虫を潰すようなレベル・感覚であ

る。

だが、ビーこにとってはどうだろう？

……つまり、あたしが何を言いたいかといえば。

「ビーこ。丁度いい機会だ。あのミイラ男、お前が屠れ」

「はい！ …………… え？ ええ？ ええええええええ」

部屋内にビーこの叫び声が木霊する。つたく、うるせーなー。

「言ってたじゃねーか、あたしに頼りっきりの自分から卒業したいって」

「た、確かに言いましたけど、だって、だって」

「でももだっても禁止だぜ」

「そんなー。まだ心の準備が出来ていないといいますが、何といたしますか」

この期に及んで及び腰とは、ビーこのやつは相変わらずだ。

だが、ここで変わらねーといつまでたっても一步を踏み出せない。

ビーこ風に言うなら、ローマは一日にしてならずってやつさ。

「まあ、そう身構えるなよ。何かあったら必ずあたしが助けに入ってる。だから、まずは一人で何とかしてみな。ビーこの思うようにやってみればいい」

いつもと違うあたしの真剣さが伝わったためか、ビーこは覚悟を決めたように一度大きく頷くと、あたしたちの前方のミイラ先生を改めて直視した。

ふん、やっぱりいい眼つきをしゃがるじゃねーか。

ビーこには才能がある。

それはもう、全世界の霊能力者達が揃ってドン引きするくらいの才能がある。

実用的な業や知識は学園側が提供してくれる。

つまり、今のびーに足りないのは…… 経験と心構えだろう。
それを補う事こそ、つまりはあたしの大切な仕事の一部なのであ
る。

「つーんだ。分かりました。私の実力ってやつを英子ちゃんに見せ
てあげますからね」

「いいねー、その意気だ」

びーはカバンからゴソゴソと大量の退魔関連グッズを取り出し、
のろのろとこちらに歩み寄るミイラ先生に向かっていった。

よし、頑張れびーこ。

お前なら出来る、はず。

…………… どうしてこうなった？

あれから数十分。

あたしの目の前では、とある奇跡が起こっていた。

何と、一体だった筈のミイラが二体が増えたのだ。

なんてミラクル。ああ、やっぱりこの世ってのは不思議な出来事
で溢れ返ってやがるってわけだな？ 流石のあたしも、不覚にも感
動しちまったぜ！

って、アホか！……！！……！！……！！……！！……！！……！！

「びーこの大馬鹿野郎！ てめー、ミイラ取りがミイラになってどーすんだよ！！！」

この諺のこれ以上ナイスでの確な使い方を、あたしは知らない。恐らく、あたしの人生の中で、もっと的確なタイミングでの使い方だろう。

って、知るかよ！！！！！！！！！！

あたしもなんで冷静に、んなくだらねーこと考えてんだよ。

駄目だ、なんつーか、駄目だ。

流石はびーこ。あたしの想像の斜め上を、軽々と飛び越えてくれる。つーか飛び越えすぎ。むしろそのまま太陽に突っ込んで死んでるレベル。

まあ、今はこれくらいが限界だろう。

あたしは、包帯ぐるぐる巻きになったびーこを引きずり、手繰り寄せ、その包帯を解いていく。

「つぷうはああああ。はあはあ、く、苦しかった、です。ミイラ男、悔りがたし」

「ギブアップか？ まあ、びーこにしちゃナイスファイトだったと思うぜ？」

「冗談。英子ちゃん、私は、今、猛烈に燃えてきちゃいました。逆に火がつきました」

お、おお。

びーこが燃えてやがる。珍しい事もあるもんだぜ。

あたしとしちゃ、こんな姿を見ただけでも成果はあったと思うわけだが、ここはびーこのやる気ってやつに期待してみようじゃないか。

「一つ、思いついたといいますが、試してみたい事があります」
そう言うと、ビーこは件のミイラ男の全身に巻かれた包帯のほつれた一部を手を取った。

「むっふっふー。覚悟してくださいね、包帯男さん？」

直後、ビーこが長く伸びた包帯を強引に引つ張り、ミイラ男をくるくると回転させながら包帯を解き始めた。

イメージとしちゃ、時代劇なんかの悪代官の定番、よいではないかーってやつ。

ま、あたしの見た感じとしちゃ、トイレットペーパーをからからと思ひ切り引つ張ってるようにしか見えねーが。

いずれにしても、どうやらビーこは、包帯男の包帯を全部剥ぎ取っちまおうって考えらしい。

…………… たかがミイラ野郎一匹屠るにや随分とメンドクセー、
回りくどいやり方だが、悪くない。悪くは無い。

実にビーこらしいやり方。
そう、それでいいんだ。

最後の一切れまで包帯を剥ぎ取りきったビーこ。

ミイラ男は、とうとうそのカラカラの体を完全に露出させた。

そして、音も無く、消え去る。

「ミイラ男ってのはよ、あくまで包帯あつてのミイラ男なんだよ。
この包帯に守られてねーと、この世に魂を留めておけねーってわけ」
果たしてその事をビーこが知っていたのか、はたまた偶然だったのかはさておき、これで一先ずミッション達成。

「やったな、ビーこ。お前はやり遂げた。自信を持って良い」

「ふふん。私の実力を持ってすれば当然ですよ。えっへん。ところで、英子ちゃん。この包帯、トイレットペーパーとして使いますか？」

「誰が使うか！ つーか、てめーはあたしを何だと思ってんだよ！ せつかく良い感じに終わったと思ったのに、どうにも締まらねーじゃねーかよ。ったく」

びーこが一人前になる日も、そう遠くは無い……………はず。

あたしは心の底からそう願いながら、びーこの頭を二度三度と撫でるのであった。

END

第二十三話 「ほわほわほわ」

第二十三話「ほわほわほわ」

とある日の午後。

この日は、珍しく昼の仕事が無く、びーこを送り出したあたしは唯一人、クーラーのガンガンに効いた部屋でガツツリと昼寝をしていた。

だが、それがいけなかった。

どうやらあたしは、そんな冷房全開な地球に全く優しくねー部屋で、下着オンリーな姿で寝てしまったらしく……

あたしは、今、猛烈な腹痛に襲われている。

「だぁーっ、くっっっ。腹丸出しで寝ちまって腹を壊すなんて、餓鬼かあたしは！」

全身に脂汗を滲ませながら、あたしは震える足でトイレへと直行する。

普段、ちよつとやさつとで体調を崩したりしねーあたしが、よもやそんな下らない理由で脆くも崩れちまうことになるとは……。

これはあれか？ エコが盛んに叫ばれてる昨今にあって、それを尽くガン無視し続けてきたあたしへの罰か？ 天罰ってやつなのか？

いーや。ねーな、それは。

天罰？　はん。馬鹿言っちゃいけねーよな。そもそも、まともな神様なんてこの世にはいねーんだから。居るのは、そう…。

無駄に広い部屋を走り抜け、ようやくトイレへと到着したあたしは、光の速さでドアノブに手をかける。

…が、ドアノブを回そうが、引こうがビクともしないドア。可笑しい。確実に可笑しい。

びーこは当然まだ学園。と、なると残る可能性は二つ。ドアの故障、もしくは…。

「よし分かった。ドアの故障だろうが、馬鹿が潜んで居ようと関係ねー。悪いが、あたしもギリギリなんだよ」

お腹とか、人としての尊厳とか、お腹とか、乙女の矜持とか、お腹とか。とにかくギリギリなんだ。

あたしは懐からいつものナイフを取り出すと、なりふり構わず振り上げる。

ドアなら、例えあたしが粉みじんにぶっ壊したとしても修理できる。

だが、この世の中には決して修理できねーものもある。

そんなあたしのナイフがドアに降りかかろうとしたその瞬間、押しても引いても決して動かなかったその天国へのドアが、突然開かれた。

そして、その中からぬーっと現れた人物…　それは、赤いリボン・おかつぱ頭の一人の少女だった。

「……………私、トイレの神様」

もはやナイフすら持つ事が出来なくなつたあたしは、その場で座り込み、ただただひたすらに、聞きたくも無い歌を聴き続ける。

10分。

恐怖。ホラー。戦慄。激痛。

あたしは、かつて、これほどまでの恐怖を感じた事が無かった。

それは、地獄のような10分間。永遠とも思える長い長い10分間。

失う事への耐え難き恐怖と、苦痛。そして、全てを諦め、開放してしまふという欲求とのせめぎ合い。

ああ、流石は「聴く人誰もが泣ける歌」だけ。あたしも涙が出てきそう。

だが、明けない夜がないように、止まない雨ががないように、地獄のフルコーラスはやがて終わりのときを告げる。

ノリノリで全てを歌いきつた花子は、ゆっくりとマイクを下ろす。

「……………ふゆー、ご静聴ありがとうございました」

この野郎。もう我慢の限界だ。何もかも限界だ。色々。

あたしは、何とかふらふらと立ち上がる。

「……………え？ あなた、トイレの歴史を知りたいの？」

何やら、誰も尋ねないのに、トイレの歴史とやらを嬉々として語り出した花子。

まずい。

このパターンはまずいぜ。今度は10分じゃ確実に済まない。

「ここは、一か八か勝負に出るしかない。
ナイフも握れず、ましてや全身に力も入らねー、限界状態の中、
そんなあたしが出来る事。」

「あつ、あんなところで植村花菜がトイレの神様歌ってやがる！」
あたしは、感情の無い棒読みでそう告げながら、咄嗟に窓の外を
指差す。

奥の手がこんな子供だましとは、我ながら何とも情けない。
だいたい、こんな手に引つかかるようなら苦労は…。

「！ どこ？ どこですか？ 私、サインを、サインを貰わねば」
掛かったあああああああああー！

「しゃーこら、今だあああああ」

「…………… あつ」
あたしは、窓辺へとやって来た花子をスルーし、最後の力を振り
絞ってへブンへと駆け込んだ。

「…………… だって、こうでもしないと、誰も私なんかと遊んでくれ
ないから」

「何だそりゃ？ 餓鬼かてめーは！ ああ、餓鬼か」

びーこにそうするように、あたしは今、花子に説教と言う名の人
生勉強の時間を与えている。

己の生き方を見つめ直すのに、生者も死者も悪霊も妖怪も関係な
い。

と言うか、コイツの場合は妖怪というより幽霊に近い存在。それ
も地縛霊、憑物の類だろう。要は場所に憑くタイプってわけだ。

まあ、どうしてコイツがそんなもんになっちまたかは知りたくもないし、むしろ興味が無い。

「つーか、遊んで欲しかったのかよ」

「うん。…………… ねえ、また遊びに来てもいい？」

「駄目だ」

そんなあたしの言葉を受け、眼を潤ませながら頬を膨らませる花子。

おいおい、勘弁してくれ。そんな顔であたしを見るなよ。

つたく、しょーがねーなーもう。

「ただし、トイレ以外の部屋でなら歓迎してやる。見た感じびーこと同じくらいの年だし。あいつの遊び相手にゃ丁度いいかもしれねーな」

また、この部屋が一段と騒がしくなりそうな予感がして、あたしは小さな溜息を洩らすのだった。

はぁー、やれやれだぜ。

END

第二十四話 「あの日見たトラウマの名前を僕達はまだ知らない」

第二十四話「あの日見たトラウマの名前を僕達はまだ知らない」

得てして、やつらは突然やってくる。

あたしらの都合や予定をオール無視して、唐突に現れやがる。

あたしは、今、ひたすらにだだっ広く、何も無い、寂れた荒野に佇んでいる。

地面があるし、風も吹いてるし、太陽も沈みかけてる。

ここは恐らく現実世界のどこか、なのだろう。とはいえ、ここが現代の地球であるかまでは保障できねーが。

まあ、いずれにしても、ここがどこかなんて大した問題じゃない。ここにあたし達を招いた不届き者をぶっ倒さねー限りは、恐らく脱出不可能なのだろう。

これは、そう、あの首なし鎧ヤローと同じパターン。

こんな事が出来る輩は必然的に限られてくる。

それはつまり、相手は伝承クラスだという事を示唆しているに他ならない。

あの鎧ヤローと同じか、もしくはそれ以上の敵。

あたしは、全身から嫌な汗が滲み出てくるのが分かった。

… つと、そうだ。びびってる場合じゃない。びーこは？ あいつはどこだ？

キョロキョロと辺りを見回すと、無骨な小さな石檻を発見。

急いで駆け寄るあたし。

「びーこ！ 大丈夫か？ 怪我はねーよな？」

「うえええん。英子ちゃん、私、気がついたらここにいて」

「ああ分かつてる。あたしも同じだ。つっても、行きはよいよい帰りは地獄。恐らく、楽に帰してもらえとは思えねーがな」

「英子ちゃん、そ、それって」

びーこがそう言いかけたとき、あたし達の真横に、突如としてドスンという重音を立て何かが落下。

…… 石？ いや、鳥？ 何で、鳥像がこんな何も無い荒野に落ちてるんだ？

あたしが逡巡するうちにも、加えて2羽の鳥の石造があたし達の立ち位置から少し離れたところに落下。

それを見たあたしの全身に、電撃にも似た衝撃と恐怖心が一気に駆け巡る。

嘘、だろ？

最悪だ。

ふざけんな。

あたしは、未だにきよとんとしたままのびーこに向かって大声で叫ぶ。

「びーーこおー！！ 目を閉じろ！！ 今すぐだ！！ いいか？

絶対にこつちを見るんじゃないぞ！ その牢中で目を瞑って伏せてろ、いいなー！！」

力の限りそう叫んだあたしは、いつの間にかあたしの右腕に納まっていた妖刀秋艶を携えて、闇雲に走り出した。

間違いねえ。

あれは石像なんかじゃ断じてない。あれは… 「石」にされちま
った生きた鳥、だ。

伝承クラス、石化能力。
こんな事が出来る奴は、限られてる。

「…………… ねえ、こつちを見てよ？ ねえ、見て？」

荒野に響く不気味な女性の擦れ声。

確定的だ。間違いない。

あたしは、絶対にソイツの顔を見ないようにしながら、その声の
方向に近づく。

聞こえてくるのは、シャーシャーという蛇達の唸り声と女性の恨
み節。

見えてきたのは、全身黒ずくめ女性の体。

ああ、こいつ………… 「メデューサ」だ。

ギリシャ神話に出てくる怪物三姉妹の一人。

その顔を見たものを石へと変える化け物。
間違いなく伝承クラスの相手。

あたしの脳裏に、前回の情けねー惨敗の様子が想起される。

いや、違うだろ？ あたし。

もう、二度とびーこの笑顔を手放したりしないって誓ったじゃね
ーか。

まったく、やれやれだぜ。

あたしは、一度自分の頬を思い切りバチンと叩き、気合を入れ直

した後、眼の前の相手をいかにして倒すかという思考へと切り替え
た。

伝承クラスの相手というのは、その存在が有名であればあるほど、
その逸話も多く残されている事が多い。

そして、このメデューサに関しては幸いな事にその倒し方まで御
丁寧な知れ渡っている。まあ、小学生でも知ってるような超有名な
話って奴だ。

何を隠そう、この間図書館でコイツに関する文献を読んだばかり
だからな、あたしも勿論知っている。

ギリシャ神話だと確か、ペルセウスのやつは直接やつと目を合わ
せず、青銅の楯にメデューサの姿を反射させ、倒したって話だ。
なるほどなるほど。

………
って、ねえーよ！！　んなもん常備してるわけね
ーだろが！！！！

糞、何てこった。どーすりゃいい？　何か代替になるようなもん
はねーか？

あたしは、急いでポケットをぐそぐそと探ってみるものの、打開
策は無し。

こういうとき、女性らしく手鏡の一つでも持ってるやいーんだろ
うが、生憎あたしにはそういう女性らしさって奴が欠如しちまっ
てるらしい。

あたしはひたすら地面を睨みながら、考えを巡らせる。

が、相手はメデューサ。そうやすやすと考える時間を与えちゃ
くれない。

あたしの足元には数十匹もの蛇の群れが忍び寄っていた。

「うげえ。あたしは別に爬虫類が駄目ってことはねーが、ここまで

来ると関係ねーな。なんともおぞましい光景だぜ」

たかだが蛇くらいで恐れをなすあたしじゃねーが、いかんせん数
が多すぎる。

ザクザクと切り捨てていくものの、一人ではどうしても裁ききれ
ない。

「いッッッ。… いったーなコンチクショウ！」

業を煮やしたあたしは、奴の足元を見ながら一気に接近する。

勿論、具体的なプランは何もねーが。

メデューサの頭部の蛇達が騒ぎ立てやかましい。

構わず、あたしは右手の秋艶を振り上げる。

が、奴の両手の尋常なくらいに鋭い爪により、あっさりと防がれ、
逆に奴の頭部の蛇達からカウンターを喰らう始末。

「ちっクシヨ。蛇が伸びるなんて聞いてねーよ」

駄目だ。

相手を正面から見据えられずに、近距離でやり合おうなんて自殺
行為に等しい。

あたしは、急いでバックステップをとり、メデューサとの距離を
稼ぐ。

やつの移動速度が人並みなのはせめてもの救いだろっ。

しかしこの状況、最悪だ。

… さっきので右肩から右腕にかけて結構深い傷を負っちゃった。

近距離では長く殺人的に鋭く伸びた爪に加え、頭部の蛇達を伸ば
しての攻撃。

遠距離では、頭部の蛇を解き放つての攻撃。

その上当然、奴の顔を見たら一発アウト。

こうなってくると、必然的に相手と距離をとりつつ打開策を練る

しか方法は無い。

あたしは、メデューサから放たれた蛇の群れ達を真っ二つにしつつ、毒づく。

「糞ッ。こんなんじゃ拉致があかねー。相手の顔を見ずに戦うつてのがこんなにもやりづれーもんだとは思ってもよらなかったぜ。さっきから防戦一方じゃねーか。かと言って、注意を欠いて奴の顔を見ちまったら一巻の終わり……」

まずいな。

あの蛇、やつぱり毒を持ってたらしい。恐らく神経毒の類だろう。さっきから頭がふらふらするし、感覚がなくなってきた。気を抜くと意識を持つてかれちまいそуд。

このまま持久戦に持ち込まれば、石にされるまでも無くアウトだろう。

まあ、考えようによっちゃあ、奴の蛇達に即効性の致死毒が無かっただけありがたいと思うべきなのかもしれねーが。

「ねえ、見て？ こつちを見て？ わたしの顔を、見て。綺麗でしょ？ ねえ？」

「あああ、うっせー。見るわけねーだろが！ みすみす石ころにされてたまるかよ」

やはりというか、当然というか、奴から放たれた蛇共を何匹葬ったところで、奴本体にダメージは無いらしい。

かといって、あたしの技量で奴に接近戦を挑めば……。

まじーな。これは本格的にまずい。考えが煮詰まってきた。加えてあたしの体力もそろそろやばい。

そんなあたしのダメージに反して、奴にはほぼダメージは入って

ないという反則的な素敵仕様。

これはもう、一発逆転を狙わねーと勝ち目は無い。

あたしは、苛立ちながら秋艶に付着した雑魚蛇共の鮮血を振り払う。

どうする？ どうするあたし。

いっそ、刀を青銅の楯代わりにして、刀に奴の姿を映して戦うか？

いや、無茶だ。つーか、この妖刀は色んな呪いやら負のオーラを溜め込んじゃまっついていて、お世辞にも美しい刀身とは言えないからだ。

妖刀… 妖刀？

…………… それだ！ その手があった！！

いける。これなら、一発逆転つてやつを狙える。

むしろ、あたしが今の技量、今の残された体力で奴を葬れるとしたらこの手しかない。この方法に賭けるしかない。

あたしは、今の位置よりさらに後方へと移動し、メデューサとの距離を十二分に保つ。

やつの足元の姿と音を頼りに、奴の正面へと仁王立ちするあたし。さあ、こっからが本当の勝負だぜ、蛇野郎。

「月は村雲花に風、月夜に提灯夏火鉢。 …… 今宵の我が月は、満月！ 喰らえ、メデューサ！！！」

あたしは、紅く煌く我が妖刀秋艶を、メデューサ目掛けて全力で、投げ放った。

そんな壮絶な過去を持つメデューサだからこそ、今回のあたしの反則技が使えた。

何を隠そう、あたしの妖刀秋艶は、「使用者対してトラウマを見せる」っていう曰くつきの呪われた刀だ。

勿論、その効果はデュラハンとの戦闘時、あたし自身嫌と言うほど経験済み。

相手は、神様によってバケモンに変えられた不幸な女だ。

そりゃ、トラウマの一つや二つあって然りだろう。

ましてや、そのトラウマの一つが、今の自分自身の姿である可能性は極めて高かった。

そう、奴は秋艶によるトラウマ、つまりは 自分自身の姿＝メデューサの姿 を見て、石化しちまったんだ。

石になったとは言え、相手は伝承クラス。いつ復活するとも限らない。

だからこそ、ここは一つ全力を持って完膚なきまでに屠ってやるのが、あたしなりの奴らに対する礼儀ってやつだ。

「色即是空、空即是色…… 消えな、この我楽多が」

あたしは奴の足元の秋艶を手にし、そして、眼の前の石像を24分割。その姿を石像から石ころ片へと変えた。

「やれやれ。たかだか一回トラウマを見せられたくらいで、潰れるんじゃないよ」

あたしなんて、こいつを使うようになってから毎晩うなされてる

つてのによ…… おっと、びーこには内緒だが。
どうだ？ びーこ。あたしはやったぜ。

そのびーこは、どうやら奴が屠られた事で牢から解放されたらしく、こちらへと駆けて来る。

おいおい、そんな全力で走ると転ぶだろ…… って、あーあ、言わんこつちや無い。

それにしても、さっきからやけに目が霞む。

…… どうやら、今更ながら蛇の毒が回ったらしい。

何だよ、奴を消しても、あたしの体内の毒は消えねーのかよ。

まあ、いいか。

あたしは、びーこのそんな姿を見ながら、ゆっくり、ゆっくりと、その目を…… 閉じた。

END

第二十五話 「サボりたい時がサボり時」

第二十五話「サボりたい時がサボり時」

目を開けると、眼の前には体温計と氷枕を持ったびーこが、心配そうにあたしの顔を覗き込んでいた。

何だ？ 何だこの状況？

何であたしの部屋にびーこがいるんだ？ つーか、あたしは何やってんだ？

冷静に周りや眼の前のびーこを観察すると、どうやらあたしはそのびーこに看護されていたのだという事が分かる。

直後、あたしの脳内にメデューサとの死闘が一気に蘇る。

ああ、そうか。どうやらあたしはまた、びーこの奴を心配させちゃったらしい。

状況が飲み込めたあたしは、眼の前で何故かニコニコしているびーこに語りかける。

「よう、びーこ。わりいな、また手間掛けさせちゃったか」

「なーに言ってるんですか英子ちゃん。私が英子ちゃんの看病をするなんて当たり前じゃないですかー。水臭いなーもう」

嬉々としてそう語るびーこ。そんな彼女に、あたしは更に突っ込んで質問する。

「そうか？ ところでびーこ。あたしはどれくらい寝てた？」

「そうですねー。英子ちゃんがあメデューサさんをやつつけてから丸々一日ですね。でもでも、安心してください。蛇さんの毒は一過性のもので、後遺症や命に別状は無いみたいですよ？ それに、

私はずーっと看病してましたから。えっへん」

…丸々一日か。流石はバケモン。いや、相手のレベルを考えれば、むしろ一日程度で済んだのが不思議なくらいだ。

でもそうか、あの神経毒は抜けたのか…。

だが、あたしが声を大にして言いたいのはそんな些細な事じゃない。それは勿論

「びーこ、お前今、一日中あたしの看病をしてたって言ったよな？
あたしの認識が間違ってるのかもしれないねーから一応確認してくが、
昨日も今日も平日だよな？ な？」

そんなあたしの問いかけに対して、露骨に視線を逸らすびーこ。

「あ、あいどんのー。私、ガイコクジンだから日本語、ワツカリマ
セーン」

成る程。何て分かりやすい奴。

つまりはびーこめ、学園、サボりやがったな？

「ふざけんな！ てめーはそんな見た目に反して、日本語しか喋れ
ねーだろうが！」

あはは、と苦笑いのびーこ。

と、まあ、本来ならこのまま続けて説教モードに突入したいところではあるんだが、いかんせん事情が事情だ。

今回は、あたしにも非はあった。実際こうして看護されてるわけだし。

それに、びーこの気持ちも分からなくは無い。

「私は、まだまだ英子ちゃんのように強くありません。いくら英子
ちゃんに護られっぱなしの自分を卒業したいと思っけていても、現状
はまだ以前と何も変わっていない。だから、だからこそ。その英子

ちゃんが怪我をしたときくらい、私に護らせて欲しい。そう思ったんです」

そう言ってその目を潤ませるびーこ。

…ちっ。

やっぱり分がわりーな。こういうのは苦手なんだよ、あたしは。

あたしは顔を見られないようにあえてびーこと逆の方を向いて言う。

「びーこ。氷枕、取り替えてくれるんだろ？ それ」

「あ、はい。勿論です！ 私が用意したんですよ？ 私が」

「はいはい。分かったからとっと取り替えてくれ」

ま、あたしもこんな状況だったしな。

びーこの馬鹿親、失礼、親バカな両親があたしの代わりを寄越したんだろが、こいつはそれを拒否して、丸一日あたしの看病をしてたってわけか。

「この包帯もびーこが巻いてくれたのか？」

「えへへ。授業で習いましたから。どうですか？ 結構上手でしょ」

「…ところでびーこ。今日の授業予定は何だったんだ？」

「はい。ひたすら校外マラソンで体力づくりです。もう、ズル休みしたくもなりますよね？ …… あっ」

ったく、しよーがねー奴。

…………… 今回だけは、大目に見てやるけどな。 本当、やれやれ
だぜ。

END

第二十六話 「違うよ、変態という名の紳士だよ」

第二十六話 「違うよ、変態という名の紳士だよ」

……ふう。

今日も一日無事終了。

びーこの学園からの送迎を終え、何も無い平穏な一日ってやつのがありがたみを十二分に噛み締めながら、あたしはリビングのソファで横になった。

メデューサとの戦闘から二日。

あたしは、辟易していた。

原因は、恐らくアレだろう。そう、メデューサの「毒」だ。

びーこの手前、あたしはすっかり「完治」したものとして、空元気で取り繕っちゃいるものの、その実中身はガタガタだった。

確かに、メデューサの蛇による神経「毒」は一過性のものだった。痺れるような麻痺感覚は、今となってはすっかり消えている。

では何が問題なのか？

それは、呪いという名の「毒」

あたしは、奴を屠るのにあたしの妖刀秋艶の力を使った。奴にトラウマを見せ、石に変え、屠った。

それは、今のあたしが奴を倒せる唯一の方法だったし、起死回生一発逆転の一手だった。

だが、それがいけなかった。

あろうことか、秋艶はメデューサのトラウマを記憶しちまったらしい。

あれから二日。

あたしの体内には、秋艶を通じてメデューサの「毒」ことトラウマが流入してきている。

…… まあ、世の中そうそう上手い話はねーって事だな。

これが唯の毒なら治療法もあるだろう。病気なら治す術もある。だが、それが妖刀の呪いってやつなら、それが対価だというならば、あたしにはどうする事も出来ない。甘んじて受けるしかねーってわけだ。幸いにも、あたしは他の人間よりちょっとばかり丈夫に出来るからな。文句は言えねーってわけだ。

という事で、現状どうすることも出来ないあたしはソファーにもたれながら、アルコールという名の自傷性物質をあおり、やがて、眠りの世界へと身を落としていくのだった。

「英子ちゃん英子ちゃん英子ちゃん」

いつものストンキョーでストレスフリーなびーこの天真爛漫な声が部屋内に響き渡る。

… どうやら、いつの間にか寝ちまったらしい。時間にして一時間くらいだろうか？

頭が痛い。

体が重い。

そしてこの虚空感。体調は、依然として最悪だった。

あたしは、喉の渴きを潤すため、目の前のミネラルウォーターのペットボトルを手に取り、一気に飲み干す。

すっかりぬるくなってしまうた純水が、一瞬にしてあたしの全身を巡るのが分かる。

と、その時、先ほどまでどこぞであたしの名を連呼していたびーこが、ぬっと顔を出す。

「あ、英子ちゃん起きたんですね？ むふふ、丁度良かったです。私、凄いものを拾っちゃいました！！」

頭が痛い。

あたしが眠っている間、どうやらびーこは一人で散歩に出ているらしい。その上、その収集癖を遺憾なく発揮し、また良からぬものを拾ってきたらしい。

あたしは、二本目のミネラルウォーターを口にしながら、祈るような気持ちでその成り行きを見守る。

「じゃじゃーん、見てください英子ちゃん！」

「ぶ……………ぶ……………」

あたしは口に含んだ水を一気に噴射させながら、こう叫んだ。

「なんじゃこりゃああああああああ」

あたしの目の前に現れたもの、びーこが拾ってきたもの。

それは、一匹の白い馬。いや、一角の白い馬。

つまりは、ユニコーンだった。

「ちよ、おま、びーこ。拾ったってお前、何捨て犬や捨て猫を拾ったみたいな空気ですらうってんの？ 拾ったとかそういうレベル

ルじゃねーだろこれ」

「うんうん。いいリアクションですねー、英子ちゃん。それでこそ私も拾ってきた甲斐があったというものです」

分かってない。こいつは何にも分かってない。

ユニコーン。

一般的なイメージとしちゃ、美しく気品のある一本角の白馬ってのが有名だろう。

だがその実、こいつらは凶暴かつ好戦的な性格で、とてもじゃねー人が飼いならす事は不可能とされている。

……が、どういうわけか、ユニコーンはえらく大人しくびーこの側に寄り添っている。

むう、こうして見ると何とも絵になる光景だぜ。ってんな事言ってる場合じゃねーな。

「いや、まあ、流石のあたしも実物を見たのは初めてだからよ、想定外に驚いちまったってのは確かだ。でもな、びーこ？ お前、このマンションがペット禁止だって知ってるよな？ それに、あたし達はペットは飼えないって事は、びーこも痛いくらい知ってるはずだよな？ な？」

というか、そもそもどうやってここまで運んできたんだよ！ っ
て疑問は、なんつーか、怖くて聞けなかった。

「そ、そんなの分かってますもん。こ、この子は、その… そうです。私のお友達なんです！」

拾得物からお友達にランクアップしたユニコーン。

それにしても、部屋の中に馬がいる光景ってのは何ともシユールだ。いつもの部屋がまったく違って見えるぜ。

それに、でかい。でかいんだよ。近くで見ると異様な迫力がある。

「それに、この子はとつても大人しくていい子なんですよ？ ほら、折角ですから英子ちゃんも撫でてみてくださいよー」

何が折角なのかは甚だ理解しかねるが、実際のところ確かに、興味はある。何と言つてもレアな幻獣だからな。

というわけで、一先ずあたしもびーこにならつてユニコーンの体を撫でてみる事に。

まあ、確かに負のオーラは感じられない。だからと言って油断していいわけじゃねーが。

「そついや、ユニコーンつてやつは処女に弱いんだつたっけか」

正確には、弱いというより、好き。言うなれば、処女好きの変態馬っつーわけだ。

「処女？」

「ああ、いや、まあ、あれだ。穢れの無い乙女に弱いんだとさ。こいつらは」

チツ、何を焦つてんだあたしは。ったく、やれやれだぜ。

「んで、もう気が済んだだろ？ とつと元の場所に戻してきなさい」

「乙女だつたら、英子ちゃんだつて充分乙女です。言葉遣いは改善の余地アリですけど、趣味はとつても乙女チックじゃないですか」

露骨にスルーしやがった。しかも改善の余地アリつて何だよ。五月蠅せーよ。その上、あたしの趣味にまで言及しやがってこいつは

……いいじゃねーか、別に。

「ふん。あたしは、その、駄目だな。うん、駄目だ。あたしは、ほら、大人な女だから。びーこに比べりゃーな。色々と穢れちまつてるのさ。染まつちまつてるのさ、色々と。…分かるだろ？」

必死にあたしがそう弁明しているにも関わらず、件のユニコーンは何故かあたしの方に歩みよつてきて、その顔をあたしに近づけてくる。

憎たらしいくらいに台無しだ。

「何故でしょう？ その割にその子、すごい英子ちゃんに懐いちゃってる気がするのですが」

そう言っただと目であたしを見つめるびーこ。

いやいやいや、っーかこの場合あたしはどういうリアクションすりゃいいんだよコンチクショウ。

「さっすが英子ちゃん。乙女の中の乙女。やっぱり英子ちゃんは凄いです」

仕舞いには、ユニコーンはソファアの上のあたしの膝の上にその頭を寄せ、安心しきった顔で… 寝やがった。

…… 言っな。何も言っな。

もういい。何かもうどうでもいいわ。

疲労困憊だったあたしは、そのまま、ユニコーンを膝の上に乗せたまま、再びまどろみの世界へと片足を突っ込んだのだった。

朝の日差しが、あたしの体を照らす。

小鳥の囀りが、あたしの耳を刺激する。

朝の澄んだ空気が、あたしの体を再起動させる。

それは、妙に目覚めのいい朝だった。

「何だ、またあたし、ここで寝ちまったのか。っーか、今、何時だ？」

あたしがキョロキョロと首を動かし時計を探していると、すっかり制服に身を包んだびーこが現れた。

その姿を見る限り、どうやらもつすぐ登校時間である事は間違いないらしい。

「お早うございます、英子ちゃん。昨日は良く眠れましたか？」

昨日？

びーこのその言葉をきっかけに、昨夜の記憶が一気に蘇る。

「そっだ、ユニコーン。あいつはどうした？」

「勿論帰りましたよ？ だって、ペットじゃなくて私のお友達ですから。また遊びに来るって言ってました」

帰った？

何て人騒がせな幻獣だ。それはそうと、結局あいつは何しに来たんだ？ 単にびーこに拾われただけ？ それとも本当にびーこのお友達ってやつだったのか？

「知ってますか？ 英子ちゃん。ユニコーンさんは乙女の守護者。」

その角には不思議な力があるとされています」

「ああ、それくらいはな… そういや、何だか妙に体が軽いな。気分も悪くねー」

「英子ちゃん、あの刀を使うようになってから毎晩うなされていませよな？」

なんてこった。

知ってたのかよ、びーこの奴。まあ、今日みたいにソファで寝ちまう事もあるからな。そりゃ分かるか。

「名探偵びーこを見くびってはいけません。英子ちゃんに関することなら、わからない事など殆ど無いのです！」

いや、どうでもいいが、そこは別に言い切ってもいいんじゃないか？ 言葉の綾だし。

「それと英子ちゃん、英子ちゃんの刀、見てみてください」

そんな意味深なびーこの発言を受けて、つられるようにして部屋の片隅に眼を向けると…

……！

「これは、秋艶？」

実のところ、あたしの秋艶はメデューサとの一戦で、その柄の部分を破損していた。

そりゃそうだ。あんな殺人的に長い爪で握られれば、いくら妖刀といえど、全くの無傷ではられない。

だが、その柄が見事に修復されていた。いや、修復というより全くの別物と言っても過言ではないだろう。

これまでの黒い柄と打って変って純白の白い柄。

ユニコーンの角で作られた穢れの無い白い柄。

「おいおいマジかよ、これ」

「ユニコーンさんからのお礼だそうですよ？ 一晩その膝を貸してもらったお礼」

これまでの妖刀とはまるで逆のオーラ。

いや、もはやこれは妖刀なんかじゃない。これは…。

「ビーこ、お前…」

「英子ちゃん。確かに私の中に在る力は、色んな良くないものを惹き付けてしまいますけど、たまにはこういう事も出来るんですよ？」

あたしは、思わず涙目になりそうなのをぐっと堪え、ビーこを見つめた。

ビーこは、ちゃんと自分の力と向き合っている。理解しようとしている。いや、既にその力を徐々に制御してきている。

あたしにとっては、その事実が何より嬉しかった。

きつと、今のびーこなら、この先その力を才能を、完璧に制御し
理解出来る日も遠からずやってくるのだろう。

きつと。

きつと。

END

第二十七話 「饅頭怖い」

第二十七話「饅頭怖い」

「お、危ない危ない。賞味期限今日までじゃねーか」

あたしは冷蔵庫の奥深くで眠っていた、とある菓子箱を引っ張り出した。

××饅頭。

恐らく、以前びーこが気まぐれで買ってきて、そのままずっと冷蔵庫に放置していたものだろう。

賞味期限は今日まで。

別にあたしは、いちいちそんな細けーことにこだわっちゃいねーが、一応期限は期限。

このまま再び冷蔵庫奥深くに戻しちまうと、次に再び日の目を浴びるのは何時になるか分からない。

ま、こつというのはとつと食っちゃうに限るって話だ。

食い物を粗末にするのはあたしの流儀に反するからな。

という事であたしは、びーこを呼んで在庫整理に取り掛かったのだった。

「わあー、お饅頭ですか。1、2、3… 全部で12個もあります

よ、英子ちゃん。半分に分けましょう」

あたしは甘いものが好きってわけじゃない。

女が皆、甘い物好きだって言うのは大きな勘違いだ。

むしろあたしは辛いものが好物。

Myタバスコは常に持ち歩いている。

「いや、その気持ちは有り難いんだが、そんなには食べねーよ」

「えー、何ですかー。はっ、まさかダイエット!？」

「生憎だが、んなもん生まれてこの方一度もしたことねーな」

あたしのそんな発言がよほど可笑しかったのか、ビーこはジト目であたしを見つめた後、溜息混じりに言う。

「それはそれで何だかずるい気がします。っーんだ、いいですもん。あたしが英子ちゃんの分も食べちゃいますから」

そう言っつてビーこが手をつけようとした瞬間、ぼんつというおよそ超常現象的な怪音を轟かせながら、一匹の緑の発光体が現れた。

「な、な、何事ですか?」

緑の発光体。

デジャヴか? いや、違う。あたしはついこの間、これと似たようなものと遭遇している。

確かあれは図書館だった。

そう、つまりこいつは、ピクシーだ。

この間あたしが出会ったのは音を盗むピクシーの亜種だった。

緑色の服に緑色の帽子。だが、どうやら今回のこいつは、純種のピクシーらしい。

「妖精風情が何の用だ? ったく、てめーらは懲りるって事を知らねーのかよ」

「英子ちゃん英子ちゃん、この子、何だかすっごく怒ってますよ? 勝負しろって言ってます」

「ああ? …… そうか。ふん、この間のヤツの弔い合戦ってわけか?」

まあ、別に殺しちゃいねーが。

つまりこいつは、この間あたしが灸をすえてやった図書館のピクシーのお仲間ってやつらしい。

いいじゃねーか。あたしはそういう骨のある奴は嫌いじゃない。

「いいぜ。そういうことなら受けてやる。で、何でやる？ その意気に免じて方法は任せてやるぜ」

その瞬間、あたし達の目の前のピクシーは、その本文とも言うべきイタズラっぽいにやけ顔を覗かせながら、パチンと指を鳴らした。

… が、特に何かが起こったわけでもなく。

「何だ何だ？」

「ふむふむ。英子ちゃん、この子が言うには勝負方法は激辛ロシアンルーレットだそうです」

「げ、激辛？ ロシアンルーレット？」

相手が相手だけに、単なる戦闘行為になるとは思っっちゃいなかったが、予想外な何とも俗っぽいその返答に、あたしは困惑を隠しきれなかった。

「えーつとですね、さっきので、このお饅頭さん達の半分を激辛に変えちゃったらしいです。それを三人で一つずつ食べていって、最後まで残っていた者が勝者だそうです。と言いますか、えー、私もやるんですかー？ ぶーぶー」

これまで様々な妖怪、魑魅魍魎、伝承、モンスター達との勝負を受けてきたが、間違いない、今回が歴代ワーストワンの勝負になるであろうことは眼に見えていた。

「つーか何だよそのゴールデンのバラエティー番組みてーな勝負はガキか！ いや、ガキか。」

まあいい。一度引き受けると言っちまった以上、例えどんなにくだらねー勝負だろうと途中で投げ出すのはあたしの流儀に反する。

それに、何と言ってもあたしは辛党だ。ちよっとやそっとの辛さじゃびくともしねーのだ。

「その勝負乗った。で、順番はどうする？ 異論が無けりやあたしから始めさせてもらうが。それと、念のために一応シャッフルさせてもらうぜ」

あたしは、念には念を入れて眼の前の12個の饅頭をシャッフルしつつ、皿に並べる。

眼の前に整列する12個の茶色いパンドラ。

その見た目には僅かの差異も無い。やはり見た目での判断は困難。ピクシーの言葉が真実ならば、12個中その半分が激辛。当然ながら確率は二分の一。50%。

さて、どうする？ あたし。

ここはいち激辛党民として、辛さって奴の気を探るんだ。

他には無い情熱ってやつを感じ取るんだ。

なァーに、精神統一し、明鏡止水の心で望めば自ずと見えて……くるわけねーだろが!!!

馬鹿かあたしは。

そもそも何だよ、辛さの気って。んなもんねーよ。

何わけわかんねー思考を繰り広げてんだよあたし。

…ま、まずいぜ。

あたしとしたことが、すっかりピクシーレッド状態じゃねーか。ペースを乱されまくりじゃねーか。やるなピクシー。

こうなったら、ここは己の直感のみを信じて特攻するしかない。

いねー……

あたしは、一番端の饅頭を掴み、一気に頬張った。

「ぶっ。何だよ、何ともねーじゃねーか。こりゃセー…ぶっ、ぐ、

ぐええええええ、ゴフツ」

あたしは、氏んだ。

あたしの中に残された一握りの乙女としての矜持と、ボディーガードとしての意地と根性で何とかびーこの前での全リバーズだけは逃れたものの、まるで全身に電流が流れるかのような常軌を逸した辛さ、いや、むしろ痛覚と言っても差し支えないそれが、あたしの全身を蝕む。

辛いというより痛い。辛いというより熱い。辛いというより呼吸困難。

あたしの体を幾重もの苦痛が一気に駆け巡る。

そんなフローリングでのた打ち回るあたしに、びーこが一言。

「まーったまた英子ちゃんってば、お茶目さんなんですから。幾らなんでもそれはオーバリアクションですよ」

満面の笑みでぱくりと一口で平らげるびーこ。

「んー、美味しい。これは緑茶が欲しくなりますね」

流石はびーこ。この程度の確率、びーこにとっちゃまだまだ序の口なのだろう。

この手の勝負事はあたしよりびーこの方が上手だ。

ありとあらゆるものを惹き付けちまうってことは、ある意味、運否天賦も惹き付けることが出来るって事。

何を隠そう、びーこはあれで運がいいのだ。

つーか逆にあたしは運が無いからな、壊滅的に。それを失念していた以上、最初っからあたしに勝機は無かった。

声は出ないし、全身の震えと発汗の止まらないあたしは、素直に二人の勝負の成り行きを見守る事にした。

……
情けなく床にうずくまりながら。

続いて件のピクシーの番。

奴は、自らの身長の三分の一もあるつかという饅頭を数秒とかか
らずペロリと平らげた。

すげーなおい。

あの小さな体のどこにそれだけの量が入ったのだろう。

そして、どうやら奴もセーフ。

これで確率的には9分の5。

確率的には厳しいが、びーこの超運ってやつを見せてくれ。

「んぐんぐ。あ、すみません。一気に三つも食べちゃいました。て
へへ」

… なん、だと？

ここにきて、掟破りの三つ一気食い。びーこ、なんて恐ろしい子。

やはり、びーこの前にして確率などというものはその意味を成し
ていないのだ。

今日ばかりはびーこの神がかり的な才能に感謝しねーとな。

さて、確率は6分の5。追い詰められたピクシーは、あたしと同
じく全身を小刻みに震わせ、滝のような汗を流している。

奴にしてみれば、完璧に想定外な展開なのだろう。

「おい、どうしたイタズラ妖精。ま、さ、か、ギブアップなんてし
ねーよな？ な？」

あたしは床に這い蹲りながら、擦れた声でピクシーを煽る。ぶっ
ちやけ威圧感はずゼロである。

が、律儀にもそんなあたしに煽られるように妖精は茶色をしたパンドラに一気に喰らいつく。

あたし達の眼の前で、茶色の虹を咲かせる哀れなピクシー。
あーらら、ご愁傷様。

ピクシーはびーこの強運の前に散った。

「やれやれだぜ、実に不毛な時間だった。時間の無駄使いつてのはこついうことを言っただろうな…… まあ、初手で散ったあたしが言えた義理じゃねーけど」

何にしても、今回はびーこの独壇場だった。

真面目な話、びーこがより幸運だけを惹き付ける事が出来るようになれば、その体質も今より改善されていくのだろう。

今回はその兆しが見えただけでも、あたしにとってはまるで無駄な時間だったってわけじゃねーのかもしれない。

あたしがそんな事を考えていたとき、横に居たびーこがポツリと言う。

「残り5個。英子ちゃんも妖精さんもギブアップみたいですし、勿体無いから私が食べちゃいますね？」

「は？ おいおい、何を言って……」

あたしが止めるまもなく、ひよいひよいと一気に全てを口に運ぶびーこ。

1個でも氏ねるってのに、5個も食べちゃったら……。

が、そんなあたしの心配を余所にケロリとした顔でお茶を啜るびーこ。

…………… え？

「び、びーこ？ お前、何とも無いのか？ 辛いだろ？ 辛いよな？」

「いえいえ。普通に美味しかったですよ？」

ああ、ヤバイな。今のびーこ、後光が射して見えるぜ。

つまりは、幸運でも何でもなく、唯単にびーこの味覚が可笑しい
っただけの話。

ったく、相変わらず予想の斜め上に行く奴だぜ。

END

第二十八話 「ポルポルはかく語りき」

第二十八話「ポルポルはかく語りき」

夜。

突如としてマンション内に響く渡るびーこの叫び声。
絹を裂くような女性の叫び声ってやつは、きつとこつという事を
を言っただろう。

あたしは、ソファアールから飛び起きると全速力で声のする方向、キ
ッチンへと向かった。

「どうしたびーこ！ 何があった！」

その光景を見た瞬間、あたしは思わず言葉を失った。

ありのまま、今、あたしの目の前で起こったことを話すぜ。

あたしがキッチンにたどり着いたら、びーこが、冷蔵庫に食われ
ていた。

な… 何を言ってるのかわからねーと思うが、あたしもさっぱり
分からない。

催眠術だとか、妄想だとかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。

もっとも恐ろしいものの片鱗を味わった気分だぜ。

……と、まあ、悪ふざけはこの辺にしておくとして、あたしは改めて眼の前の現実つてやつを直視した。
物が長い年月を経ると意思を持ったり、力を持つちまうって現象はあまりに有名。いわゆる九十九神つてやつだ。

だが、今回の場合相手は冷蔵庫。しかも最新式。100年はおろか1年だつてまだ経っちゃいねー新品だ。
つまり、あたしの眼の前のコイツは、九十九神などではなく単なる憑物の一種ということ。

そしてあたしは、コイツを見た事がある。

白くて、でかくて、壁のようなその巨体。そう、ぬりかべだ。

時代が変化するように、妖怪達もまた、時代に合わせその性質を変える。

この間の獺がいい例だ。あいつらは本来睡眠中に見るユメを食う存在だったが、ビーこを襲った獺は人の夢を喰らった。

それが何を意味するかは割愛するが、つまりはそついう事だ。

そして、このぬりかべという妖怪。こいつもまあ、有名な妖怪だけに知らねー奴はいないだろう。

大昔のぬりかべは突然路上に現れて、人々の行く手を阻害するつて妖怪だった。

が、こと現代においては人ん家の冷蔵庫に寄生し、その中身はおろか近づく人間を食っちまうつてんだから始末におえない。

さて、ここで一つ問題だ。

この冷蔵庫ぬりかべに食われたビーこを助け出すには、一体どうすればいいか？

…

答えは二つ。

A ぬりかべそのものを被うこと。

B 寄生している冷蔵庫そのものを物理的に破壊する事。

あたしはびーこと違ってシスターの卵でも除霊師でも、退魔師でも、霊能力者でもエクソシストでもシャーマンでもない。

あたしは、単なるびーこのお守兼ボディーガード兼保護者みてーな存在だ。

そんなあたしに出来るのは、あたしとびーこの目の前に立ち塞がる糞野郎共を揃って無間送りにしてやることだけ。つまりは、ぶつた切るだけだ。

だから、最初からあたしの答えは決まってる。

びーこはあの冷蔵庫野郎に食われちまってる。

奴に食われたってことは、つまり、冷蔵庫の中に居るってことに他ならない。

びーこの体力にも限界がある。短期でケリをつけるしかない。

しかも、奴の体は冷蔵庫とぬりかべの強度と体躯の合わせ技。いつものナイフやバッドじゃ傷一つつかねーだろう。

と、なると、方法は一つ。

「色即是空、空即是色…… いいぜ、ぶつた切つてやるよ、我楽多野郎」

あたしは右手に秋艶を召喚し、精神を集中させる。

とまあ、意気込んで見たのはいーものの、こっからが問題だ。

さっきも言った通り、あたしに出来るのは奴をぶった切ってやることだけ。だが、それには二つ、大きな問題が立ちふさがっていた。

A 奴はウンザリするくらい固いつてこと。

B これが一番の問題なんだが… 奴は、中にびーこを取り込んでいるということ。やれやれ、なかなか大胆じゃねーか。

結論。

中のびーこを傷つけず、冷蔵庫ぬりかべだけを秋艶で一気に両断、ぶった斬ること。

あたしの妖刀秋艶は、元々、あの程度の壁妖怪くらいなら、たやすく切り刻めるだけの潜在能力とスペックを持っている。

だが、妖刀はあくま妖刀。あたしがその力を最大限まで引き出すことと、その力を制御する事は別問題であり、その実難しい。

それはあたし自身、これまでの経験で嫌と言うほど理解してきたことだ。

本来ならば、こいつはあたしなんかじゃ手に負える代物じゃない。… が、今は違う。

そうだ。この刀は既に妖刀なんかじゃねーのさ。

あの女好き変態ユニコーンの力を経て、秋艶は生まれ変わった。

正直に言っぜ。

あたしは、今、わくわくしている。

これは、生まれ変わった秋艶の力を試す絶好のチャンスってやつだ。

失敗すれば、ビーこはただじゃすまねーだろうし、勿論あたしもただではすまないだろう。

危急存亡の秋。だが、だからこそ、試す価値がある。

斬りたいものだけを、斬るべきものだけを斬ること。力のコントロール。気配。呼吸。居合いと気合。

…さて、準備はいいか？ あたしは出来てる。

「さあ、秋艶。じゃじゃ馬だったお前の、生まれ変わったその姿をあたしにみせてみな」

そう告げた後、あたしは、秋艶を構え、眼の前の壁妖怪を躊躇うことなく……斬った。

ぬりかべは、鈍い音を立てながら、左右に真つ二つに分かれた。中からは、冷蔵庫から生まれた冷蔵庫太郎もとい、困惑した様子のビーこが姿を現す。

「え？ ええ？ えええ？」

……ふうーっ。

どうやら、ビーこは五体満足。傷一つ無い様子。やれやれだぜ、流石のあたしも肝が冷えた。

「あの、私、お夕飯を作ろうと思って冷蔵庫に近づいたら、そのまま」

「食われちまったってわけか。一応聞くが、怪我はねーか？ まあ、

中に入ってたのは短時間だったみてーだし、凍えるほど冷えたってこともねーよな」

「はい！ 私は大丈夫です。この通りぴんぴんしてますから。ありがとうございました、流石は英子ちゃん！」

どうやら、全てうまくいったらしい。やれやれである。本当に。

「そりゃ良かった。ま、冷蔵庫は後で買い直そうぜ」

「それに、今日のお夕飯もですよ？」

そう言っただけで指さす先には、哀れにも粉みじんになった様々な食材達が、キッチンの床一面に広がっていた。

冷蔵庫ぬりかべだけをぶった斬ったつもりだったが、やれやれまだまだ力のコントロールが足りていなかったらしい。

だが、この刀をいずれ使いこなせるようになれば、伝承クラスの敵、そしてあの首なし鎧野郎へのリベンジの日も近いかもしれない。

あたしは、まだまだ強くなれる。いや、強くならなきゃなんねーんだ。

是が非でも、な。

END

第二十九話 「好き嫌いは大人だけの特権」

第二十九話 「好き嫌いは大人だけの特権」

基本的に、ビーこは偏食家だ。

二人暮しをしている以上、あたしもビーこも料理の腕はそれなりに持っている。

毎日とはいかないまでも、あたし達は交代で料理当番を受け持ち、自炊をしている。

で、何を隠そう今日はあたしの当番。

ちなみに、今夜のメニューは八宝菜。

中華はあたしの得意料理だ。

「で、だ。ビーこよ、言いたい事があるならハッキリ言えよ。つか、そんな眼であたしを睨むな」

「英子ちゃん、ふざけているんですか？」

どちらかと言うと、ふざけているのはビーこの存在そのものだと思っただが、あたしは黙って話の成り行きを見守る。

「酷いです。酷すぎます」

… 勿論、あたしの料理の味の話なんかじゃない。

「こんなに、こんなにたくさんの野菜さん、私、食べられないですもん。絶対無理だもん！」

だもん。じゃねーよ。

ビーこは、涙目になりながら、あたしにそう訴えかけた。

訂正しよう。

ビーこは偏食家というより、好き嫌いが激しいのだ。要は、単に野菜嫌いなんだ。典型的な餓鬼なのさ。

何の因果か、一応、あたしはビーこの保護者的な役割も担っている。

とは言え、あたし自身、これまで人に自慢できるような人生を送ってきたわけじゃ断じてない。

間違。むしろ、ろくでもねー人生を歩んできただけに、他の人間に道徳を説くようなそんな崇高なマネは出来ない。

だがまあ、好き嫌いをなくしてやるくらいは、あたしの請け負える範囲内にあると思えた。

「人は誰しも一つや二つくらいは苦手なもんってのはある。だがビーこ、てめーは駄目だ」

あたしは、ビシツと眼の前の皿を指さしながら言う。

皿に残った野菜の数々。

「ビーこの場合、どう見たって一つ二つの範疇じゃねー。野菜という野菜が嫌いとか、舐めてんのか！」

「だってえー」

「でももだっても禁止だぜ」

… さて、問題はここからだ。

野菜嫌いの人間に野菜を食べさせるにはどうすればいいか？

定石としちゃ、野菜をそれだと気づかせないレベルに調理し、料理に取り入れるといったところだろうが、生憎あたしにはそこまでの腕は無い。

こと料理の腕に関しては、圧倒的にビーこの方が上。しかも、自身は野菜嫌いの癖に、あたしのために作る料理に関しては、極普通に野菜を使ったりするから余計達が悪い。

ってなわけで、このままあたしが上から目線で説教を続けたとこ

るで、恐らく効果は薄いだろう。

ここは一計を案じて、ビーこの好きそうな諺や名言の力を借りて説得してみる事にしよう。

ちなみにだが、今日のビーこの諺Tシャツは「焼肉定食」： つーか、もはや諺でも四字熟語でもねーじゃねーか！

どこに売ってたんだよ、そのTシャツ。

「正義なる事が、魂の健康である。 by ナイチンゲール」

「また唐突ですなー、英子ちゃん。ふふん、私、その名言なら知ってますよ？ でも、それがなにか？」

むしろ、こっちが聞きたい。

駄目だ。あたしはビーこと違って、諺好きってわけでも四字熟語辞典を読むのが趣味ってわけでもない。

咄嗟に頭に浮かんだのがこれだったのだ、深い意味なんて勿論無い。

当然、作戦は失敗だ。普段やりなれないことをすると、これだからいけねーよな。

しやーない。やっぱり正攻法でいくしかねーか。

「まあ、あたしが何を言いたいかって言うとな、一人前つーか、仮にもシスターの卵なら好き嫌いすんじゃねーよって話」

「むむむ、それは差別ですよ英子ちゃん。シスターであろうと、何であろうと、人間誰しも好き嫌いの一つや二つはあるものです」

ドヤ顔でそんなセリフを吐くビーこ。つーかそれ、まんまあたしがさっき言ったセリフじゃねーか。これだからゆとり世代ってやつは…。いや、あたしもバリバリゆとり世代だけども。

「やれやれだぜ。知ってるか？ ビーこ。食べ物で粗末にする奴は、勿体無いお化けにとり憑かれちゃうんだぜ」

「ふっふっふー。何を言い出すか思えば英子ちゃん。それは釈迦に説法というものです。そんな子供だまし、他のお子ちゃまは騙せても、この私は騙されませんよ！」

いや、お前も十分子供だけどな。

だが事実、勿体無いお化けなんて類の妖怪は存在しない。

正確に言つと、今は存在しない、妖怪だ。

ぬりかべの例がそうだったが、時代が変化するように、妖怪達もまた、時代に合わせその性質を変える。

この飽食飽物の現代。勿体無いお化けは、その居場所をなくした。存在の意義をなくした。

逆だ、と考える奴もいるだろうが、それは大きな間違いだ。

あたしの柄じゃねーから、エゴがうんたらとか、そんな警鐘を訴えるつもりは毛頭ねーが、簡単に言えば時代が妖怪を殺したんだ。

価値観の変遷。本質を失った妖怪は、消えるほか無い。

と、話が聊か脱線しちまったが、今はあくまでびーこの好き嫌いの話だ。

あたしだって何の意味も無く突然こんな子供騙しなセリフを言い放ったわけじゃない。

びーこにゃ言つてねーが、あたしはと今回のミッションを成功させるため、とある協力者を呼び寄せていた。

さてさて、上手くいきやいーんだがな。

「あのなあ、びーこ。あたしはただ単に野菜嫌いを咎めてるってわけじゃねーんだよ。そりゃ勿論克服はしてもらいてーが、問題はそこじゃない。お前には、いや、お前だからこそ、そういう意識つてやつを持って欲しくねーのさ。……と、勿体無いお化けも言うてるぞ」

そう言っぴーこの後ろを指差すあたし。
「え？」
つられて振り向くびーこ。

足元まで延びた黒髪、白い三角頭巾に白い顔、白い肌に、さながら貞子のような格好をしたその人物は…。

「……………私、勿体無いお化け」

「ほ、ほぎゃあああああああああああ」

突如として背後に出現したその悪霊。居るはずが無い、子供騙しだと思っていた分、その精神的反動は予想以上に大きかったらしく、びーこは、白目をむいて気絶してしまった。

「あーらら、御愁傷様。こりゃちょっとやりすぎたかな？ つーか

お前、その格好似合いですぎだ」

「……………そうかしら？」

あたしが協力を仰いだ人物、それは例のというか霊の、トイレの花子だ。

協力つーか、遊びに来たがっていた花子に対し、どうせならという事でこんな格好をさせたわけだが。

「ああ。効果は抜群だったな」

「……………でも、これで好き嫌いが治るかどうかは微妙だと思うの」

まったくもってその通り。

ちょーっとばかり荒療治すぎたかなと反省しつつ、あたしはびーこをソファアへと運ぶのだった。

END

第三十話 「Calling Me」

第三十話 「Calling Me」

またまた今晚は、びーこです。

こんな登場の仕方もかれこれ3度目ということで、いい加減新鮮味に欠けるなーと思う今日この頃。

私は今、一人でお留守番をしています。

あつ、誰ですか？ 今、お前一人で大丈夫か？ って言った人は
答えは勿論： 大丈夫だ、問題ない！ です。 え？ ネタが古い？ え、私の中では未だに絶賛大ヒット中のネタなんだけども！。

でもでも、私だって子供じゃないんです。 お留守番くらい出来て当然です。

…… はあーっ。

いい加減一人語りも飽きちゃいました。 あーあ、やっぱり一人は
退屈です。

英子ちゃん、早く帰ってこないかなー！。

唐突に部屋の電話のベルが鳴ったのは、丁度私がそんな事を考えていたときでした。

英子ちゃんにはいつも馬鹿にされてしまつのですが、私はこの電話のベルの音が苦手です。

部屋中に鳴り響く金属製のベル音が、どうしても好きになれませ
ん。

ちなみに、この部屋の電話はダディの趣味のアンティーク調の木
製電話。確かに部屋のお部屋の雰囲気にはぴったりなんですけどねー。

でも、何より苦手なのが…… 真夜中に突然掛かってくる電話。

英子ちゃんは、私には滅多に電話してきません。

『そもそも一緒に住んでるんだし、お前がどこにいて何をしてる
かなんて、大体想像出来るからな。電話する意味なんてねーだろ』
というのが英子ちゃんの言い分です。うーん、それはそれで嬉しい
ような寂しいような…… ってそんなこと考えてる場合じゃないです
ね。

私は慌てて電話の受話器をとりました。

「はい、法楽です」

「あ、もしもし？ オレオレ、オレだよ」

随分慌てた様子の、何だか聞き覚えのない男性の声。

「あのー、どなた様でしょうか？」

ちよつとだけ思案した後、受話器の向こうの相手様はこう答えま
した。

「いやいや、お父さんだよ。実は交通事故起こしちゃってさ、早急
にお金が必要なんだよ。お母さんに代わってくれるか？」

まあ大変！

…… なーんちゃんで。このびーこ、見くびってもらっては困り
ます。幾ら私だって、それが嘘だって事くらい分かりますからねー。
だってだって、日頃英子ちゃんに、ウンザリするほど言われてい

ますから。

『お前は騙され易くて信じやすい。詐欺被害者の素質がある』だなんて失礼な話ですよね？ ね？

それにしても、これはこれは型通りのオレオレ詐欺さんですね。

私は、小さなため息を漏らしつつ、そのまま受話器をそつと戻すのでした。

その時です。

まるでタイミングを見計らったかのように、再び電話のベルが部屋中に響き渡りました。

私は、大きく深呼吸して、気分を落ち着かせてから再び受話器をとります。

「はい、法楽です」

「……………」

あわ、あわわわ。今度は無言電話さんです。

こういつものって、何故タイミングが重なるんでしょうか？

そもそも、この部屋の電話が鳴ることは殆どありません。それなのに、たまに鳴ったと思ったらこの有様です。英子ちゃんだったら、こういう時どうやって対処するのでしょうか？ そういえばこの前は、相手さんに向けて大音量でお経を流していたような…。

私は、苦笑しながらそのまま受話器をそつと戻すのでした。

あつ、そうそう。因みに、先ほどから私が口に行っている「法楽」という名前。これは、何を隠そう英子ちゃんの苗字なのです。

普段はこの苗字を使うというのが、この家での私と英子ちゃんのリールなんです。この方が何かと都合がいいからって。

と言つても、英子ちゃん曰く『そもそもあたしの場合名前も苗字も偽名』なんだそうです。

うーん、英子ちゃんの本名？ それって知りたいような知りたくないような。

私の場合、英子ちゃんと知り合つてからずっと英子ちゃんって呼んでますし、今更他の呼び方をするのも何だか変な気がします。

二度ある事は三度ある。

何だかもう一度くらい電話が鳴るかもしれない。私のカンがさつきからそう囁いています。自慢ではありませんが、私のカンって良く当たるんですよ？ だって、ほら、ね？

一人っきりの部屋に良く響く三度目のベルの音。私はちよつとだけうんざりしながら受話器をとりました。

「はい、法楽です」

「……………」

これはちよつと予想外。またまた無言電話さんです。今夜は悪戯電話のバーゲンセールなのでしょう？

何だかちよつとだけ怖くなつた私は、ガチャンと大きな音を立ててすぐに受話器を置いてしまいました。

はあ。どうしよう。どうすれば良かったんでしょうか？

何故でしょうか、何となくまた掛かつてきそうな予感がします。

ここは一つ、英子ちゃん流に私もお経でも流してみましようか？

でも英子ちゃんにみたいに上手くやれる自信はありませんし…

だめだめ、ここで弱気になつてはいけません。私には私なりのやり方が、私にしか出来ないやり方がある筈です。

やはり、このままお互いに一方通行ではいけないと私は思つのです。次、もしもまた電話が掛かつてきたら、私の思いのたけをぶつけてみようと思います。お互いに納得して理解しあえれば、きっと

それが一番の解決方法に違いありませんから。

私がそんな決意を新たにしたその時、予想通り四度目のベルの音が部屋に響き渡りました。

仮にも私はシスターの卵です。だからこそ、私は私の言の葉を信じて突き進むのみなのです。

「法楽です」

「……………ワタシ、メリーさん。今、」

あれ？ 今何か仰ったような？ でも一度決意した私は簡単には止まりません。

「いいですか？ あなたの無言電話がいかに相手に迷惑をかけているか、どれだけ不安にさせているか分かりますか？ あなたには思いやりが足りていません。相手の立場や気持ちになつて考えてみてください。あなただって誰かにいぢわるされたら嫌でしょ？ 私は嫌です。でもでも、英子ちゃんつてばいっつもいぢわる言うんですよ？ 酷いですよねー？ 誰にだつて好き嫌いくらいありますもんね？ つてごめんなさい、少し話が逸れちゃいましたね。つまりですね、私が何を言いたいかと言うとですね、ほんの少しでも、人間同士がお互いに思いやる気持ちを持つことが出来たら、この世界から争いや犯罪、戦争だつてきつと無くなると、私はそう信じています。だからこそ、まずは私達が気持ちを通わせ、互いに思いやることが出来たらきつと素敵で素晴らしい一歩になると思いませんか？

だからもう、無言電話なんて止めましょう？ ね？ ね？」

「え？ エエ。ハイ。す、スミマセンデシタ」

やった！ やりました。私の言の葉が受話器の向こうの無言電話さんの心を動かしたんです！ 流石私です。どうですか英子ちゃん！ 私だつて日々シスターとして成長してるんですよ？

私は、今日初めて気分良く受話器を置くことが出来たのでした。
ちゃんちゃん。

「びーこ！ 無事か！ …………… って何だよ、全然何ともなさそー
じゃねーか。あたしの勘違いか？」

先ほどの無言電話さんから約10分後。何故か息を切らした英子
ちゃんが慌てて私達のマンションへと帰ってきました。

「おかえりなさい英子ちゃん。どうしたんですか？ そんなに息を
切らせて」

「あー、いや。なんつーか、びーこに魅せられて引寄せられた馬鹿
の気配がしたよな気がしてさ、急いで戻って来たんだけどな」

「私は何ともありませんでしたよ？ 心配性さんですねー、英子ち
ゃんは。でもでも、それより聞いてください。私、無言電話さんを
改心させちゃったんですよ。どーです、凄いでしょ？」

「………… はあ？」

こうして、私のお留守番は幕を閉じたのでした。

こんな私でもこんな形で世の中のお役に立てるのでしたら、たま
にはお留守番も悪くないですよね？ ね？

END

第三十一話 「とあるカボチャ男への追憶」

第三十一話「とあるカボチャ男への追憶」

「ハッピーハロウィーン！！」

「あー、はいはい」

「もう！ 英子ちゃん、何ですかそのローテンションは？ もっとアゲアゲで行きましょうよアゲアゲで」

いつの間にやら10月も最終日となった今日。

やれやれ、月日が流れるのは早いもんだ。気を抜いたらこのままあっという間に年末になっちまうぜ。

そんな10月31日。

今日が何の日かすぐにピンと来る日本人は、やっぱり少なーと思う。

そう、日本人にとっては未だになじみの薄いイベント… 「ハロウィン」ってやつだ。

だが、イベント大好きお嬢様体質のびーこにとって、やはりこんな企業の思惑が見え隠れする西欧被れなイベントも見逃せるものではなかったらしく、先ほどから嬉々として部屋の飾り付けを行っている。

一方のあたしはとえば、そんなびーこのハイテンションっぷり（つーかアゲアゲって何だよ）に、若干辟易しつつも一人、酒を煽っている。

ちなみに、今夜はかぼちゃワイン。 …… まあ、そんな酒をチヨイスしちまうあたり、あたしもあたしで実はこのイベントを密かに楽しんじまってるのかも知れねーが。

あたしがくるくと動き回るびーこを眺めながら、そんな事を考えていたとき、唐突に部屋のチャイムが鳴り響いた。

「あつ。来ました来ました。はいはい、ちょっと待っていてくださいねー」

そんなセリフを残し、嬉しそうに玄関へと向かうびーこ。

やれやれ、更に騒がしくなるのか。

しかしびーこの奴、あんなにはしゃぎやがって。野菜嫌いの癖して、こんなに部屋中カボチャで飾って何が楽しいってんだよ。ハロウィンってやつは、少なくともあたしには何が楽しいのかこれっぽちも理解出来ねーイベントだぜ。

…ま、びーこが楽しんでんなら、それはそれでいいんだがな。

が、そんなあたしの思惑とは裏腹に、玄関から聞こえてきたのは絹を裂くようなびーこの叫び声だった。

あーあ、やっぱりこうなりやがったか…。

こんな日に、しかもこんな風に部屋を飾り付けてりゃ、そんなもんどろぞ襲ってくださいと、魑魅魍魎どもに言っている様なもんだ。びーこには悪いが、こんなのは奴らを引寄せやすくしているに他ならねーんだよ。

あいつの気持ちも分からなくはねーんだけどな……いや、やっぱり甘やかしすぎかもしれない。

けどまあ、説教は一先ず後回し、あたしは急いで玄関へと向かった。

「い、ごめんなさい、英子ちゃん。私、捕まっちゃいました」
「だと思った」

あたしの目の前には、びーこに包丁を突きつけ拘束中の「かぼちや野郎」が一匹。

こいつは御誂え向きだぜ。いや、今日だからこそ、か。

一見すると、カボチャ頭にマントを装備した子供に見えなくも無い。だが、そもそもただの子供が、わざわざこんな日のこんな時間にこのマンションにやってくるはずが無い。

ジャックオーランタン。

彷徨える魂、つまりは正真正銘のハロウィンの化けモンってやつだ。

出るべくして出た。呼ばれるべくして呼ばれたって感じだな。真意のほどは、こいつ自身にしか分からねーが。

「いずれにしても、だ。あたしの目の前でびーこを人質に取るたあ、いい度胸じゃねーかよ、カボチャ野郎」

「キヒヒヒヒ、トリック・オア・トリート！」

右手にカボチャも簡単に両断出来そうな出刃包丁。左手にランタン。

ランタンに照らし出された出刃が不気味に光っている。ったく、そもそも何で出刃なんだよコイツ。

「あー、はいはい。お菓子をくれなきゃイタズラするぞってか？」

… 気がついてるか？ びーこを人質に取った時点で、お前の行動は既にイタズラの範疇を超えちまってるのさ」

「トリック・オア・トリート！！！」

「……………」

… 成る程。覚悟は出来てるってわけか。

デジャブか？

あーあ。

一体いつからあたしはこんな役目をするようになったんだ

？ ったく、こっちは慈善事業やボランティアじゃねーってんだ。

「パンプキンパイを切り分ける位なら、これで十分だぜ」

あたしは懐からいつものナイフを取り出し、精神を集中させる。

「月は村雲花に風、月夜に提灯夏火鉢： 今宵の我が月は、満月！
いいぜ、ぶった切ってやるよ… それがお前の望みならな！」

あたしは、蒼白く光をナイフを携え、びーこに囁く。

「びーこ、絶対動くんじゃないぞ。こんな茶番、とっとと終わらせよーぜ」

「はい。私は、いつだって英子ちゃんを信じてますから」

どうやら、びーこの覚悟も決まったらしい。それを態度で示すかのように、そっと目を瞑るびーこ。

あたしは、びーこが目を閉じると同時に、一気にカボチャ野郎に詰め寄り、そして、奴の体に蒼く煌くナイフを突き立てた。

奴に、抵抗や回避のそぶりは全く見られなかった。糞、やはり、最初からこれが狙いだっただろう。

あたしの一撃を受けたカボチャ野郎の体は、声も上げずに消滅した。最後の一瞬、あのかぼちゃ頭が少しだけ微笑んだような、そんな風に見えたのは、恐らくあたしにも酔いが廻ってきたためだろう。

そして、後に残ったのは奴が被っていたカボチャのみ。

「馬鹿野郎が。やり方なら他にもあっただろうに…」

あたしは、玄関に転がったカボチャヘッドを見ながら、ぽつりとそんな事を呟いてしまった。

「英子ちゃん、それってどういうことですか？」

そんなあたしの独り言を、耳聴く聞きつけるびーこ。

「… こんな話を知ってるか？ ジャックオーランタンって悪霊は

元々唯の人間だったんだ。だが、命知らずのそいつはあるうことが悪魔にイタズラを働いた。結果としてそいつは、悪魔とある契約を結んだんだ」

「はあー、悪魔さんにイタズラをしちゃうなんて、随分と勇氣のある方ですねー。英子ちゃんみたい。それで、契約とは？」

「勇氣と好奇心は別モンだけ。悪魔を罠に陥れて結んだ契約、それは、自分が死んでも地獄へ落ちないようにしろってものだった」

「えー、そんなのズルイー」

「まあな。だが、歴史上悪魔と契約を結んで上手くいった奴なんて殆どいない。こいつの場合もその例外じゃない。だいたい、悪魔と契約した奴がすんなり天国に入れると思うか？ 死後、当然の如くそいつは天国に入ることを許されなかった。だが、契約上地獄にも入れない。後は察しの通りだ。カボチャで哀れなそのツラを隠して、ランタンの火を頼りに安住の地を探して永遠に彷徨う」

「何だか可哀想な話ですね」

ビーこは、カボチャヘッドを指でツンツンとつつきながらぼつりとそう呟いた。

「あいつの持っていた出刃包丁。ありゃフェイクだ。見せ掛けだけの殺傷能力の無いおもちゃだった。それに、ビーこに対する悪意がまるで感じられなかった」

「英子ちゃん、それって」

「さあな。さっきの話もただの一説だし。真実は奴のみぞ知る、さ天国にも地獄にも逝けず彷徨う魂。あいつが何者であれ、どんな思惑があつたにしても、やはり、あたしが出来るのはあいつを無間送りにする事だけだった。それは変わらない。」

「生半可な気持ちで悪魔なんぞをからかうからこうなるのさ。いずれにしてもいい勉強になつたらうさ… それを生かす機会がねーってのが哀れだな」

リビングへと戻ったあたし達を待ち受けていたのは、ほろ酔い姿の花子だった。

「あっ、花子ちゃん！ 来てくれたんですね！」

「……………遅い、二人とも遅いわ」

「こ、こいつ、いつの間に？ とは言え、最初からこいつが玄関から呼び鈴鳴らして入ってくるとは思っちゃいなかったが。ってか、あたしのカボチャワインを一人で何本空けてんだよ！ この野郎、勝手に飲みやがってええ。」

「くうら花子！ どこから現れやがった！」

「……………何いつてるの？ 最初から居たわ」

「はあ？ どこにだよ」

「トイレに」

「だーからー。人んちのトイレに籠るんじゃねーって何度も言っ
てんだろ！ つーか、それは居たとは言わねーかなら？」

「……………トリックオアトリ〜ト」

お前もかよ！ ってか、あたしの酒でいい感じに酔っ払いやがって。それにしても、ハロウィンなんて西欧のイベントを楽しむニッポン妖怪ってどうなのよ？ イデオロギー的に考えて。

「でもでも、さっきの英子ちゃんのお話から考えると、トリックオアトリ〜トってセリフも何だか皮肉な感じですね」

「違うない。まあ、イタズラ行為もほどほどにして事だな」

あたしのそんなセリフに対し、感慨深げにうんうんと頷く花子。
が、何故かジト目のびーこがぼつり。

「お二人には言われたくないですね、それ」

やれやれ。この前のドッキリの事、まだ根に持ってたのかよ。相

変わらず頑固な奴だぜ。

あたしは、苦笑いを浮かべながら新たなカボチャワインのコルクを空ける。

今宵はハロウィン。どこかの誰かの、彷徨える魂に乾杯だ。

END

第三十二話 「腐乱死体だ フランちゃん！」

第三十二話「腐乱死体だ フランちゃん！」

とつとつ。

とつとつここまでやって来てしまった…… ぴよん。

思えば長い道のりだった。目を瞑れば思い出す、長く険しかった苦難の道のり。

あれもこれも、全ては我が一族復興のため。

そう。

だからこそ、アタイは今、ここにいる！ …… ぴよん。

「で、さっきからお前は何やってんだ？ 人ん家の部屋の前で」

「ぴよん？ …… ほ、ほぎゃああアアアア嗚呼」

「いや、そんなに驚かれるようなことしちゃいねーだろ、まだ。それとも、何か疚しい事でもあんのか？ 事と場合によっては生かしちゃおけねーが」

あ、あわわわわ。焦るな、焦るなアタイ。まずは落ち着くぴよん。

この展開は予想通り。想定済み、想定内の範囲内ぴよん。

アタイの目の前、と言うかいつの間にか背後に立っていた威圧感抜群の鬼のようなこの女こそ、噂に聞くアイツに違いない。

そう。

地獄の門番。ペットシヨ…… じゃ無くて、地獄の門番、法楽英子

に違いないぴよん。

ぐぬぬ。しかし、早くもジョーカーのお出ましとは。まずはこいつを何とかしないとぴよん。

アタイがそんな風に瞬時のうちに108の謀略を巡らせていた正にその時、唐突にマンションの部屋のドアが開いた。

そして、ドアの隙間からひょっこりと顔を出した人物。アタイが遠路はるばるここまでやってきた目的。それは…

「英子ちゃん？ どなたかの声がしたと思ったら、ドアの前で一体何をしているんですか？」

「びーこか。今帰ってきたんだが、あたし達の部屋の前に見知らぬ奴がいたもんでな。いや、むしろ見知らぬ奴というより、思い切り不審人物。つーか、まあ、いつものパターンだなこりゃ」

「そうやって決め付けるのは良くないですよ、英子ちゃん。ほら、花子ちゃんのような例もありますし。そもそも、そういう悪い幽霊さんや妖怪さんだったら、こうやってドアから部屋に入ろうとはしないものです」

「詭弁だな。例えドアから入ってこようが、トイレから入ってこようが、こいつが不審人物であることに変わりはない。だってこいつ………腐ってるし」

こちらの意思をガン無視した二人の話し合いの末、何故かすんなりと奴らの居住スペースへの侵入に成功したアタイ。

アタイは、リビングルームに案内され、一つのテーブルを挟んでターゲットと向き合っている。ちなみに側のソファーには、だらりとくつろぎながらも、その目だけは先ほどからアタイを鋭く射抜い

ている地獄の門番がギロリ。

このパターンは、我が108の事前シミュレーションにも無かったパターンだぴよん。

とはいえ、ここからが本番。

我が使命のため、ターゲットにはアタイのこの手で、完全なる死を与えなければならぬぴよん。

それはそうと、先ほどからちょっとだけ緊張してきたかも。

ほら、さつきからアタイの心臓の音が…… 全く、聞こえないぴよん。だってだって、アタイは腐乱死体だからNE というわけで、いざ、ミッションスタートぴよん。

「……で、最初の質問に戻るわけだが。結局のところお前は何もんだ？ 何を企んでここまでやって来た」

「はいはいはい。私、知ってます。あなたはキョンシーさんですよ？ ね？ ね？」

何故かテンションの高いターゲット。地獄の門番の制止を振り切ってアタイを部屋に招き入れたのもコイツだし、これってもしかしてもしかすると…… 聞いていたよりチョロイぴよんか？ くぷぷぶ、警戒心がなさ過ぎぴよん 後は適当に話を合わせて。

「いかにも。由緒正しきキョンシー一族が一人、フランとはアタイのことぴよん」

「待て待て。まずそのキョンシーってのが胡散臭い。キョンシーってのは、額にお札を貼った死体の癖に、一切腐敗せず好き勝手に動き回るっていう中国産の妖怪だぜ？」

うむむ、流石は地獄の門番だぴよん。こちらのことは何でもお見通しってわけだぴよんね？ だがしかし、こちらも負けるわけにはいかないぴよん。

「いかにもいかにも。正にアタイのことぴよんね」

「お前、自分の姿を鏡で見たことあるか？ つーか、金髪西欧人のキョンシーがこの世界にいるってんだよ。しかも腐ってる！ おまけにウサ耳だと？ ふざけるな。認めない。あたしは断じて認めねーぞ。この面白ゾンビ野郎」

「ゾンビじゃないぴよん！ キョンシーだぴよん！ この通り、ちゃんとお札もついてるぴよん！ ぴよんぴよん跳ねるぴよん！」

「おいおい、興奮して臍物を撒き散らすなよ」

「キョ、キョンシーには良くあることぴよん」

…… 法楽えいこおおおお。

さつきから聞いていれば、アタイのグラスハートにガンガン傷をつけてきやがってえええええ。

話に聞いた通り、まるで鬼のような、悪魔のような女ぴよん。

こいつ、人の悪口を言っではいけませんって、学校で習わなかったぴよんか？

ターゲットを屠るためにも、やはりまずはあいつを何とかしないと…… そうだ！ いっその事あいつをこちら側に引き入れてしまえばいいぴよん。

あいつを味方に出来れば文字通り鬼に金棒ぴよん。くぶぶぶ。さすがアタイ、実に冴えてる

よーし。そうと決まれば善は急げぴよん。何とかを隙を見ていちよガブリと一かじりしてやるぴよん。

「あっ、急に眩暈が」

アタイは、極々自然なそぶりであんなにふらつと法楽英子の側に倒れこみ、極々自然なそぶりでお口をあぐり、牙むき出し。

が、憎たらしい法楽英子はひらりと身をかわす。

Shit!!

コンチクショウ!!

「お前さ、今、露骨にあたしの事囃もつとしただろ？ やっぱりキョんシーじゃなくてゾンビじゃねーか」

「ひ、貧血ぴよん。ゾンビは常に血が足りないんだぴよん。その上アタイ、低血圧なんだぴよん」

「やっぱりゾンビじゃねーか！ 今、自分で言ったよな？ 確かに言ったぜ！ つーか、もつとまともな言い訳はねーのかよつ。…」

まあ、この際お前が何者なのかなんざ、どうでもいい。問題はお前がここに何の目的でやってきたかだ」

「そ、それは……」

どうする？ どうするアタイ。

ここで選択肢を間違えれば一発アウト。地獄の門番、鬼の法楽英子の妖刀の錆になつてしまふぴよん。

と言つかさつきから物凄い睨まれまくってるぴよん。こ、怖いぴよん。ひしひしと殺意の波動を感じるぴよん。殺る気満々ぴよん。ガクガクブルブル。アタイ、何かもう色んなところから色んなものが駄々漏れしそうだぴよん。し、心臓が今にも止まりそうだぴよん

…… 勿論、キョんシーだからとつくの昔に止まってるけどNE
ということ、ここは慎重に、あくまで慎重に…。

「英子ちゃん英子ちゃん、そんなの簡単ですよ。この子はきつと、私とお友達になるために来て下さつたに違いありません！」

「…… ゲッド！ その通りぴよん」

「なーにゲッドだ、ゾンビ野郎。脳みそまで腐ってるのか知らねーが、どうせびーこを殺して一族の名を上げようとか、復興させようとか、んなくだらねーことを企んでのこのこやってきたんだろ？

しかも仮にもキョんシーの癖して、たった一人で乗り込んでくるあたり、まともな仲間のいないはぐれモノつてとこだな。もしかすると、自分を馬鹿にした同胞達を見返してやりたいのが、本音かもな。違うか？」

「く、腐ってないぴよん！ この通り、ぴよんぴよんしてるぴよん」
「イヤ、そこは否定すんなよ。実際腐ってるし、手、もげてんぞ。
しっかりくっつけとけよな。びーこもびーこだ、脳内お花畑も大概
にしるよ？ 普通に考えりゃ分かることじゃねーか。こいつはまとも
じゃない、そんなの餓鬼でも分かるぜ」

ぐぬぬぬぬ、法楽英子許すまじ！！

……でも、実際のところ奴の言う通り。

アタイはこの見た目のせいで、キヨンシー仲間達から受け入れられていないのけ者。アタイのセンス溢れるあまりに未来的なこの姿は、仲間達からは嘲笑の的。アタイはそれが悔しくて、奴らを見返したくて、単身ここまで乗り込んできたんだぴよん。

だが、それもこれまで。

正体どころか素性まで地獄の門番に見抜かれてしまった今、作戦は完全に失敗。所詮アタイは出来損ないの腐乱死体。まともなキヨンシーにすら成れなかった落ちこぼれぴよん。

アタイは、アタイは…。

「そんな言い方はあんまりです英子ちゃん！ 彼女がどんな姿であれ、見た目であれ、心はキヨンシーそのものなんです。私達が信じてあげなくて誰が信じるって言うんですか。フランちゃんは立派なキヨンシーさんです。それでいいじゃないですか。さあ、私とお友達になりましょうフランちゃん。皆仲良く、平和が一番です。ね？
ね？」

「あ、アタイのこと、キヨンシーって認めてくれるぴよんか？ こんな風に腐ってて西欧人でウサ耳のアタイを、キヨンシーだって信じてくれるぴよんか？」

「勿論です。フランちゃんはとても良いキョンシーさんです。私が保証します」

「……うっうっうっうっ、うっうっうっ、あり、がとう。そして、ありがとう、びよん」

そんなターゲットからの優しい声かけに対し、気が付けばアタイは、涙ながらに実にイイ声でそう言うのであった。 完。

え？ あれ？ アタイ、一体何しにわざわざこんなところまで来たんだっけ？

うーん。

まあいつか。

キョンシーには良くあることだよNE

それに、アタイ今、何だか凄く晴れ晴れとした実に良い気分なんだびよん。

「いやいやいや、良いのかこれで？ つーか、なんなんだよ、この茶番劇は」

…… そんなの、むしろアタイが聞きたいびよん。

END

第三十三話 「馬鹿は風邪を引かない。ただ風のように生きるのみ」

第三十三話「馬鹿は風邪を引かない。ただ風のように生きるのみ」

あたしも、このところの気候の変化は異常だと思う。

暑くなったり寒くなったり。やっと涼しくなっただと思っただら、やはりまた暑くなったり。

急激な寒暖の差ってやつは、思った以上に体に負担が掛かるものらしい。

：らしい、というのはあたし自身はそう感じていないから。当事者ではないから。

だから、らしい。

あたしは、新しい水枕を用意すると、再びびーこの待つ部屋へと戻る。

「おっ、目が覚めたかびーこ。気分はどうだ？」

「んみゅー。お早うございます、英子ちゃん」

「ああ。お早うって時間帯じゃねーけどな。よし、熱測ってみようぜ。ちょっとは下がってりゃ良いんだが」

あたしは、体温計をびーこに渡し、そのデコに冷却シートを貼り、水枕を替える。

甲斐甲斐しくも、あれやこれやと世話を焼くあたし。これはまあ、所謂看病ってやつだ。

びーこの体調管理もあたしの仕事の一つ。本来ならまず、風邪を

ひかねーよう気を使わなきゃならねーところだが、一旦引いちゃったモンは仕方がない。そもそもびーこは、あたしと違ってもやしっ子&お嬢様体質だからな。

基本的にここにはあたしとびーこの二人しか居ない。最近は何故かびーこに看病されるってパターンが多かったし、たまにはこうやってあたしが直々にびーこのやつを看病するってパターンも悪くはない。

それに、今回はあいつも居ることだし。

「……………英子。これ、届いた」

噂をすれば、だ。

「またかよ。で、花子、今度は誰から何が届いたんだ？」

「……………お馬さんから、スク水ね」

「あの変体馬！！！」

あたしは、頭を抱えつつ、ぞんざいにユニコーンから届いたというスクール水着を部屋の隅へと放り投げた。

「何だか悪いですね。皆さんに気を使わせてしまっ」

「あたしには、面白半分に送りつけてるだけに思えて仕方がねーがな」

人間ならば、誰かが風邪を引いたとき、その人のお見舞いをするという行為自体、何ら不思議はない。むしろ感心すべき好意だと思う。

だがしかし、びーこに至ってはそんな当たり前の行為すら普通とは行かないらしい。

ただでさえ、風邪で弱っているところにつけて、大量の魑魅魍魎、妖怪、伝承、悪霊の類がやってきたらどうなるか。そんなのは火を見るより明らか。

だからこそあたしは、敵味方と問わず、何時にも増してこのマンションへ侵入しようとする輩の徹底排除を固く誓っていた。

「……………英子。また悪霊が出た」

「まったく、懲りねー野郎共だぜ。分かった、速攻片付けてくるから
びーこを頼む」

「……………おっけー」

だが、どれだけあたしが気を張ってしようと、来るものは来てしま
まう。それがびーこの力であり、あたしの仕事だ。

まあ、弱っている時に攻めるなんてのは、誰だって思いつく常套
手段。だからこそあたしは、先ほどからびーこの看病と馬鹿退治で
行ったりきたり。

今日も今日とて遊びに来ていた花子に手伝わさせちゃいるが、全
くもって手が足りない。

あたしは、目の前の雑魚達を秒速でぶった切ると、再びびーこの
待つ部屋へと戻る。

「悪いな、花子。また暫く見張りと荷物の受け取りをお願いできる
か？」

コクリと一度だけ頷いた花子は、音もなく部屋から消える。

今、あたしの頭を悩ませているのは、何も悪霊の類だけではない。
先程ユニコーンから届いたスク水が良い例だが、何故かびーこやあ
たしの知り合い達から続々とお見舞いの品が届いているのだ。

あたしがいつにも増して気配を廻らせてるおかげで、やつらが直
接ここにやってくることはねーみたいだが、その代わりにつてわけ
らしい。

正直、そういう行為自体を咎める気は当然ねーんだが、問題は、
例外なくその送られてくるものが総じて役に立たないどうでも良い

品、むしろ嫌がらせの類としか思えないモノばかりが送られてくるという点だ。

ちなみに最初に届いたのは、あの糞忌々しい鎧野郎からだった。さて、ここで問題だ。あいつは一体何を送りつけてきたと思う？

正解は、100本の真つ赤なバラ。な？ 馬鹿だろ？ 気障野郎だろ？

次に届いたのが、人魚のしいから大量の魚。これはまあ、別に役に立たないものってわけじゃない。だが、問題はその量だ。

とてもじゃねーがあたしとびーこ、たった二人じゃ腐りきる前に食べきる自信はないって程の量。

… だが、どうやらあいつもあいつなりに、再び人魚としての路を歩んでいつているんだってのが分かったただけでも、今回は良しとすべきなのかもしれない。

さらにお次が、例のびーこ好きのクマからドデカイ木彫りのクマ像。何なの？ カッコいい俺の姿を側に置いてくれってことなの？ ぶっちゃんけ邪魔で仕方がないし、正直不気味だ。

続いて、この間のゾンビキョンシーことフランから何故かモツ鍋セット…… これ、あいつの臓物じゃないよな？ 違うよな？

それらに加えて先ほどのユニコーンのスク水。まあ、今のところそれが一番殺意が沸いた代物だったな。つーか、マジで何ゆえスク水？

あたしがそんな事を考えていたその時、ピピピという電子音がびーこの部屋に鳴り響いた。

「おっ。どれどれ、熱は下がったか？」

あたしは、びーこから体温計受け取り、そのデジタル表示を覗き込んだ。

「良かった。大分下がったみてーだな。これなら全快もすぐそこだぜ」

「本当ですか？ 良かったあ。私、これ以上皆さんに心配かけるわけには行きませんもの」

「……………良かったね」

「ん？ 花子、また何か届いたのか？」

いつの間にか部屋へと現れた花子は、またまた誰かからのお届け物を抱えていた。

「……………これ、妖精達から」

「うげ、ピクシーの奴らからかよ。中身は… 饅頭」

「……………食べて良い？」

「いや、止めとけ。まず間違はなく激辛だぜ、コレ。あいつらも懲りねーな」

激辛と聞いて興味が失せたのか、花子は再び見張りへと戻っていた。

「えーっ？ これ、別に辛くないですよ？ だって、普通に美味しいですもん」

「って、もう食ってんのかよ！ まあ、お前ならごく普通に食えるんだろうけどさ… けど良かったじゃねーかびーこ」

「？ 何がですか、英子ちゃん」

「馬鹿は風邪を引かない何て言うだろ？ びーこもやっぱり風邪なんてひくんだなーと思ってさ」

「もう！ それは幾らなんでも失礼ですよ！ 私だって風邪くらいひきます、私はお馬鹿さんじゃありませんもん」

「……………因みにあたしは、人生で一度も風邪ってやつをひいたことがない」

「え？ あー、私、急に眩暈が」

やれやれ、そんな迷信あたしは信じちゃいねーっての。そんな迷信。

迷信… だよな？

END

第三十四話 「眠れる鼠のタスラム」

第三十四話「眠れる鼠のタスラム」

「はあ…… ハア……。っ糞、いきなりかよ」

ここは町外れの一角、とある寂れた人気の無い廃屋。忘れ去られた廃墟。

普段は治安の良いこの街にとっての、唯一の例外。未だ整備の届かぬグレーゾーン。所謂、この街のスネといったところだ。

完全完璧全知全能の人間が存在しないように、この街もまた少なからず負の部分を抱えている。

だからこそ、こんな人気の無い場所、あたしだったらまず近づかない。近づこうとしない。

君子危つきに近寄らず。ビーこ流に言うならそういうことだ。

だが、今日のあたしはちょっとだけ事情が違った。

いつも通り、朝のびーこの送迎を終えたあたしは、その足で別件の仕事に向かった。

なに、仕事自体は語るに足りないツマンネー内容だった。ツマンネー割に、時間だけは食うっていう実にメンドクセー仕事。最悪だろ？

だが、本当に最悪の事態ってやつはいつも最後に待ち受けてるもんだ。

一仕事終えた頃には、帰りのびーこの送迎の時間が迫っていた。

いつものあたしなら、例えどれだけ急いでいたとしてもこんな判断はしなかっただろう。何しろツマラン仕事を押し付けられた後だ、この時のあたしは多少気が立っていた。

この廃墟を突っつきれば時間的にかんりのショートカットが出来る。

やれやれ… 急がば回れとは良く言ったもんさ。

多少遠回りになったとしても、こんな道、絶対に選ぶべきじゃなかった。

そんなあたしが、何者かに狙撃されたのは、丁度廢路を半分進んだ時点のことだった。

「よりにもよって足を撃たれるなんてな」

あたしは、一旦廢屋の中に隠れ、自らに応急処置を施しながら毒づいていた。

「ったく。あたしは銃で狙撃される程、恨まれるような真似してねーっての…… いや、嘘。してるな。かなりしてる」

正直、思い当たる節がありすぎて誰から狙われてるのか分からねーってのが、まず笑えない。

そして、もつと笑えないのが今のあたしの状況。

初弾で右足を狙われたのがまずかった。場所が場所だけに、何が起こっても可笑しくは無かった。コーラを飲んだらげっぶが出るくらい確実だったってのに、迂闊だったとしか言いようがねーぜ。

まあ、今更何を言ったところで後の祭り。今考えるべきことは、どうやってここから脱出するかだ。

… いや、違うな。

正しくは、どうやってあたしを狙撃した糞野郎を見つけてぶちのめすか、だ。

何にしてもこの足だ、逃げ切るなんて考えは捨てたほうがいい。今更遅いが、急がば回れってやつだ。元を断つ意外に方法は無い。それよりなにより、やられっぱなしなんてのはあたしの性に合わないからな。

幸い弾丸は貫通していた。応急処置を施したあたしの右足は、短時間なら何とか無理が利きそうだった。

「まずは… 奴の居場所を特定するのが先決か」
そう言っただけだが、廃屋から姿を現した瞬間、次弾があたしの顔を掠める。

後一步、反応が遅れたらゲームオーバーだっただろう。

「おいおい、やってくれるじゃねーか」

とは言っただけのもの、今のあたしには速攻で物陰に隠れる以外の選択肢はないわけで。

例えば、漫画やアニメなら刀で弾丸を真っ二つなんて芸当を平然としてのけるが、そんな真似が出来ればあたしだってとっくにしているし、あんなのは所詮フィクションだけの世界さ。

何とも情けねーが、焦りは禁物。少しずつで良い、奴に近づいてぶちのめすことだけを考える。

ギリギリで3発目の弾丸をかわしたところで、ようやく奴の居場所をつかむ事が出来た。

弾道からみて向かい側の廃ビルの屋上。

成る程、確かにあの場所なら、この忘れられた領域のどこにあたしが居ても狙撃可能だろう。

そして、スナイパーの場所さえ分かっちゃえばこっちのモンだ。

最も、奴がこのままおとなしく、あたしが来るのをぼけーっと待っているなんて事があるはずもねーんだがな。

あたしは件の廃ビルの屋上へと続く階段を駆け上がる。
そんなあたしに襲い掛かったのは、予想外の無数の弾丸だった。

「嘘だろ！？　ここはビルの中だぞ？　曲がる弾丸？　追跡する弾丸だと！？　まさかアイツ…」

あたしは、滴る右足からの出血による血の道程を描きながら、屋上へと続く最後のドアを開けた。

日差しが眩しい、吹き抜ける風が心地いーぜ。だってそうだろ？
これからやっとなと対面できるんだ。気分が悪いわけねーよな。

「よう。よーやく拝めたぜ、てめーのそのツラ。…　あん？　なに驚いてんだよ」

「ど、どうやって…」

「ああ？　どうやって？　どうやってだと？　ふん、そうだよな。
お前は、悪魔と契約した魔弾の射手。その能力を使って放たれた弾は、例え相手がどこにいようと、ターゲットを追尾し、必ず命中するって代物だ」

あたしは、目の前の顔面蒼白男に、一歩また一歩近づいていく。
「きつとお前は、これまでもこうやって何人もの罪なき人間達を殺してきたんだろうな。自分の欲望のためだけに」

あたしは、赤き血に塗れた秋艶を一振りし、血潮を薙ぎ払う。
「安心しなよ。あたしは正義の味方なんかじゃない。その罪でてめーを糾弾しようなんて気はさらさらない。それに、あたしは人間だけ
は裁けねーからな」

窮鼠猫を囓む。

あたしの目の前にいる哀れな男は、この期に及んであたしに向か

って、魔弾を放つ。まったく、懲りねーやつだ。

あたしの心臓に向かって一直線に飛んでくる魔弾。

あたしは、その弾を瞬時に……………切った。真つ二つに。

「どうだ？ 大分上手くなっただろ？ 最も、ここまでくるのに大分血を流す羽目にはなったがな。ま、流石のあたしも弾丸をぶった切るなんて芸当、まさか本当に実践する日が来るとは思っっちゃいなかったさ」

そう。秋艶に付着したこの鮮血は、全てあたし自身の血によるもの。

最初あたしは、弾丸をぶった切るなんてまね出来るわけがないなんて言っただが、ありや嘘だ。

確かに普通の弾丸を切るなんて芸当は出来ない。出来るはずがない。

だが、事、相手が魔弾なら話は別。

そう、逆に言えば、この芸当は相手が魔弾だからこそ通じる技。

「あたしのこの秋艶はな、こう見えて元妖刀なんだ。だから、魔力や霊力の類には殊更敏感なのさ。てめーの弾丸があたしの心臓を捉えるように、あたしの秋艶もまた、てめーの魔弾そのものを捉えることが出来る。それでも、慣れるまで相当苦労したがな。ほら、この通り」

両腕、両足を始め、あたしの体にはいたるところに逸れた弾丸による傷跡が生々しく発生していた。幾ら秋艶が魔弾の魔力を捉え、通常ではあり得ない速度での反応が可能とは言え、そもそも刀で弾丸を切るなんて事そのものが、超A級難易度の技なんだ。

「どうだい？ てめーの疑問は解けたか？ 最初こそ、普通の弾丸であたしへの狩りを楽しんでたつもりだろーが、あたしがてめーの場所を突き止め、このビルに入った瞬間、てめーは通常の弾丸から魔弾へと切り替えた。よほど焦ったか業を煮やしたのかはしらね

「が、山ほど打ち込んできやがって」

あたしは、そう言い終えるのと同時に、スナイパーの右手を銃ごと切り捨てた。それはもう、スパッと。

「そうそう、忘れるところだった。この魔弾の厄介なところは、その本体は銃じゃなくて弾自身、いや、契約者自身ってところだ」

懐から予備の六段式リボルバーを取り出したスナイパーの首元に、秋艶を突きつける。

「だからこそ、悪魔と契約しちまったお前自身を切り刻まない限り、魔弾が尽きることはない…… おっと、動くなよ？」

… さて、そろそろか。

あたしは、奴から数歩遠ざかり、ぼつりと呟く。

「お前、魔弾って言葉の持つもう一つの意味を知ってるか？ 知らなきゃ教えてやるよ。意味は… 都合良く存在してくれないもの、だぜ」

辺り一体に嫌な霊圧が漂う。空気がピリピリするっていう感覚。

何度感じても、到底スキにはなれねー感覚。間違いない、来やがったぜ。アイツが。

音も無く、男の背後に出現したものの、それは……

「悪魔はな、強欲で狡猾でしたたかなのさ。お前がその魔弾で殺した者達の命は、そのまま契約した悪魔の元へと逝く。だが、今回お前はあたしを殺すのに失敗しちまった。いいか？ 悪魔はどこまでいっても悪魔なんだよ。つまり、一度失敗した人間に、わざわざ温情をかけるような悪魔はいないって話さ。そろそろ、あたしが何を言いたいのか分かるよな？」

悪魔。

言つまでもなく伝承クラスの相手。戯れに人間と契約し、その人間の運命を弄ぶ最低な伝承達。

「た、助けてくれ、た…… たった一度の失敗じゃないか。こ、これまでどれだけの魂をお前の元へ捧げたと思ってるんだ、お、お、俺は、まだ、まだ、この魔弾で人間達を」

無駄だ。悪魔に命乞いが利いたなんて話、どこの世界の逸話にも残っちゃいねーぜ。

「お、おいあんた。助けてくれ、あんたのその刀ならこいつも切れるんだろ？　なあ、おい」

やれやれ、これ以上聞いちゃいらねーな。

「お前はな、その悪魔と契約しちまった時点で詰んでたんだよ。とつくの昔にな。それに、残念ながらあたしには、お前を助ける義理も義務も、これっぽっちの正義感も持ち合わせちゃいねーのさ。じやーな、その悪魔と仲良くやんな」

あたしは、そのまま二度と振り返る事無く、ビルの屋上を後にする。

男の口から鬼、悪魔などという罵詈雑言があたしに浴びせかけられ、その数刻後に、男の断末魔が辺り一体に響き渡ったのは言うまでもない。

あーらら、ご愁傷様。

因果応報。自業自得。

しかし、この期に及んでこのあたしに向かって悪魔だなんて、なんて口の悪い野郎だ。……ま、あたしが言うのもなんだけど。

……… 今回の件、実のところ男を救う手段が本当に無かった訳じゃない。

人喰いシリアルキラーや、人魚のしいの時同様、あたしの「紅の力」を使えば、恐らく奴の殺人思考や悪魔との契約そのものすら断

つ事が出来た筈だ。

だが、あえてそれをせず、奴が悪魔に喰われるよう仕向けたあたしもまた、やはり奴の言う通り「悪魔」なのかもしれない。

「……おっと、いけね。こりゃ急がないとびーこのお迎え、間に合わねーぜ」

だが、きっとこれで良かったのだろう。何といてもあたしは正義の味方なんかじゃなく、あくまで「びーこの味方」なんだからな。

END

第三十五話 「鍋奉行に花束を」

第三十五話「鍋奉行に花束を」

いよいよ冬本番な年の瀬。

ここ数日でぐっと気温も下がり、この間はここら一体でも初雪が観測された。

まあ、今年も後わずかなわけだから、寒くなるのも当然。むしろ寒くなつてもらわなきゃ困るって話だ。

何故かつて？ そりやお前、寒くなれば成る程、鍋が美味くなるからな。んな当たり前のこと聞くんじゃねーよ。

「だーからー。さつきから言つてんだろ？ びーこ、鍋つて奴はな、彩が大切なんだよ。まずは目で楽しむ。基本中の基本だぜ」

「それは違いますよ、英子ちゃん。皆でわいわいお喋りしながら、好きな具材を入れて楽しみつつ、温まる。これがお鍋の真髄です」

「ああ？ てめえ、びーこ…… それ、本気で言つてんのか？」

「もう、英子ちゃんの分からず屋っ」

そんな風にお互いのプライドを賭けて火花を散らしていたその刹那、あたし達二人の頭上に衝撃が走った。

「…………… 二人とも、いい加減にして。私、お腹すいた」

ハリセン片手の花子が、ジト目であたし達にそう訴える。

「びーこ様、びーこ様、ここは花子の言う通りですびよん。あの分からず屋法楽英子と言い争っていても、埒が明きませんびよん」

「おいおいてめーら、客の癖して随分な言い草じゃねーか…… と言いたいところだが、確かにあたしとしたことが柄にも無く熱くなっ

ちまったみてーだな。ちつ、悪かったよ」

今夜は鍋。

いつもの、びーこのお嬢様体質による、思いつきイベントの一つであり、折角だからとわざわざ花子とフランを呼んでの鍋パーティーってわけだ。

このところどーにもあたし達の周囲が賑やかになりつつあるってのは、見過ごせない由々しき問題だが、それより何より今、一番の問題は、こいつらが全くもって鍋の何たるかを知らねーってことだ。
… まったく、やれやれだぜ。

「OK、分かった。びーこ、それに、花子にフラン。お前ら、鍋に好きなモン入れていーぜ。あたしが鍋を引き受ける以上、どんな具材でも裁いてみせる」

「鍋の奉行だけに、ぴよんね」
ぼそつとそう呟いたフランを無視して、びーこがパチンと手を叩いて言う。

「やったー、本当ですね？ 英子ちゃん。ふっふっふー、私一度鍋に入れてみたものがあつたのです。さあさあ、花子ちゃんにフランちゃん、皆で好きなものを入れましょう！」

こうして、鍋パーティーは一転、闇鍋パーティーへとジョブチェンジを果たした。

久しぶりの鍋。あたしとしては、普通に楽しみたかったわけだが、こうなつた以上は仕方ねー。

さて、楽しい楽しい鍋パーティーの始まりだぜ。

「やれやれ、鍋一つではしゃぎやがっててめーら」

「……一番はしゃいでるのは、鍋奉行でしきりたがり屋の自分の癖に」

「何か言ったか？ フラン」

「別にーびよん？」

「はしゃいでない。」

あたしは断じてはしゃいでない。これは、あたしの鍋奉行としての業なんだよ。あたしの中の血がそうさせるんだ。うん。

「ったく。んで、お前ら一体何を留意したんだ？ 頼むから常識って奴の範疇を守ってくれよな。そうだな、まずは花子辺りから行くか」

そんなあたしの言葉を受け、花子は一度だけコクリと頷いた後、留意した具材を恭しくテーブル上へと並べ始めた。

「………まずはこれ」

「あ？ 何だよこの銀紙」

「……… チョコレート」

「わぁ、美味しそう」

「な、鍋にチョコびよんか？ 何だか一人目からいきなりカオスじみてきたびよんね」

フランの言う通り、いきなり鍋の本懐をぶち壊した具材が出やがったわけだが、あたしのスキルを持ってすればまだ何とかなるレベル、の筈。

「……… まだあるわ。クッキーにマシユマロにキャンディー。」

今日の私のおやつセットよ」

前言撤回。

どうにもなんねーよ、こんなの。あたしの奉行スキルを軽く凌駕してやがる。

甘い鍋。激甘な鍋。んー、やっぱりあたしの趣味じゃねーな。ぶっちゃけ既に食う気が大分失せてるわけで。

「まぁ、お前が甘党だったのは十二分に理解したぜ。よし、気を取り直して二人目、びーこ、お前は何を留意した？」

あたしの呼びかけに対し、待つてましたとばかりに満面の微笑を浮かべるびーこ。

ああ、これはもうあたしの経験からして悪い予感しかしねーな、おい。

「じゃじゃーん、私はこれです。世界で一番辛いと言われていた唐辛子ハーバーネーロー、を超える辛さと言われているブートジョロキアの粉末です」

あの暴君を超える、だと？

ふざけんなあああ！

何でお前らはそう両極端なんだよ！ もはや鍋の情緒も糞もねーじゃねーか。

ってかすっかり忘れてたぜ、びーこの味覚はイカれてるんだった。メーター振り切っちゃまってるんだった。

そもそも、そんなもん入れたらお前以外誰も食えなくなるっついの。

「ってもう入れてやがるし！！！」

あたし達のことなどまるで意に介さず、にこにこ顔で粉末を全て鍋に放り込んだびーこ。

「びーびーこ様？ 正気ぴよんか？」

「……………綺麗な赤ね」

時既に遅し。花子の言う通り、鍋はびーこの手により真っ赤に染め上げられていた。これはもう鍋ってレベルじゃねーぞ。言うなれば、湯気だけでも目に染みるレベル。匂いだけでも呼吸が苦しくなるレベル。何だこの大量破壊兵器。

この場合、どうすれば一般人が食えるレベルまで戻せるのかね。

「花子、お前の用意したお菓子、全部鍋にぶち込め。今すぐにだ」
「…………… あい」

ドバドバとすいーつを鍋へと放り込む花子。鍋は綺麗な赤から濁りきった茶色へと変貌を遂げる。つーか、もはや見るに耐えない。

「まさか、法楽英子。辛いものに対して甘いものでプラマイゼロと

か考えてるぴよんか？」

「わあ、さつすが英子ちゃんです。そこに痺れる憧れるう」

「……さあーで、最後はフランてめーだぜ」

「あつ、ごまかした。今、露骨にごまかしたぴよんね！ まあいいぴよん。今こそアタイの常識力つてやつを見せてやるぴよん」

そう言いながら自信満々でフランがテーブルへと用意したものの、それは……。

「もーっーなーべー。のセットだぴよん」

「……………」

一瞬の静寂。

苦笑いを浮かべる事しか出来ないあたし達。

「ああ、うん。確かにこれまで比べるとまともで普通なんだが、何しろお前がそれを用意すると洒落にならない。っーか、びーこが風邪引いたときもそれ送ってきたよな」

モツ鍋。医者要らずとも呼ばれる栄養満天の冬の定番。何を隠そうあたしも好きな鍋の一種。

「な、失敬ぴよん！ 失礼ぴよん法楽英子」

「因みにもしも、あたし達普通の人間が、キョンシーもといゾンビの血肉を食つちまったらどうなるんだ？」

まあ、出来れば聞きたくないっーか、聞かなくても分かるっーか。

「そりゃ、目出度くアタイ達の仲間入りぴよんねー」

「ああ？」

「こ、怖いぴよん。そんな目でアタイを睨まないで欲しいぴよん。人殺しい」

「イヤ、流石のあたしも人は殺したことねえけどな。だが、未だにあたしをゾンビにしたがるキョンシーなら、うっかり殺しちまうかもしれないねーぜ？」

具材を切るのに使用していた包丁を片手に、フランを睨みつける

あたし。まったく油断も隙もねーぜ。

「だいたい、未だにあたしはこいつを全面的に信用したわけじゃねーからな。」

「もつっ！ 英子ちゃん、めつですよ。折角のお鍋なんですから、皆仲良く楽しく食べましょう。喧嘩なんて言語道断です。さあ、丁度良い温度に煮えましたし。早速頂きましょう。」

相変わらずのこにこ顔で、あたし達に鍋を取り分けるびーこ。それでも、フランの用意した具材だけ鍋に入れず、そつと脇へと片付けたのをあたしは見逃さなかった。事食い物に関しては、何気にちやつかりしてるからな、びーこの奴は。

それはさておき……これ、本当に食べるのか？

料理つて奴は、味の振り幅があると意外と合ったりするらしいが、激辛と激甘じゃどう考えても両極端すぎる気もするが……。

「どうしたんですか英子ちゃん？ 早く食べないと私が全部食べちゃいますよ？」

「…………… 英子。見た目に反して美味しいよ、これ」

おいおい、この二人、平気な顔して既にお代わりまでしてやがる。流石は両極端コンビ。味覚も腹も化け物じみてやがるぜ……。

だが、仮にも鍋奉行であるこのあたしが、二人の手前食わないわけには行かない。例え、どんなことになるうとも、だ。

気合を入れるあたし。こんな伝承クラスの相手に比べりゃ屁でもない、そうだろう？

しかし、あたしの目の前にはぐつぐつと煮立ち、鼻を突く異臭とへドロのような色をした地獄の釜がその存在を主張するかのよう。湯気を立てている。かつて地獄の門番などと謳われたこのあたしも、いざ実際の地獄そのものを目の当たりにすると、聊かの震えと発汗を禁じえないわけ。

「あ、ああ。いや、勿論食べるぜ、あたしも。勿論、フランも食べるよな？ な？」

こうなれば、地獄への道連れは一人でも多いほうがいい。

「も、もももも、勿論ぴよん。折角びーこ様が招いてくださった鍋パーティー。残すなんて失礼な真似、アタイには出来ないぴよん」

そんなあたし達の鍋パーティーと言う名の地獄が、今、幕を開けた。

「ごちそうさまでしたー。ふうーっ、美味しかったー。ねっ、花子ちゃん」

「…………… うん。やっぱりゲテモノ食いは美味って相場は決まってるわね」

あれからどれくらいの間が経過したのか？

あたし達の目の前の鍋は、もの見事に空へと変わり果てていた。勿論、あたしも食べたには食べたが、ほぼびー一人の腹に入っただと言っても差し支えは無いだろう。

「はん。これくらいどーってことなかったなあ、おい」

「アタイだって、こんなの昼飯前だったぴよん。一昨日きやがれぴよん」

……………。

あたしは、おもむろに椅子から立ち上がる。すると、タイミングを同じくして、隣のフランも立ち上がる。

「おいおい、昼飯前って割には、どこに行こうってんだよ、お前」

「法楽英子こそ、どこに行くつもりぴよんか？」

「……」
「……」

その瞬間、椅子を蹴り上げ、示し合わせたように同時にダッシュするあたしとフラン。

まさかこいつも？ こいつもなのか？

あたしは、わき目も振らずある場所を目指す。

地獄での洗礼が終わったんだ、あたし達が目指す場所なんてひとつに決まってるんだろ？

そう、トイレと言う名の天国へ。

「はっはっはー。今度と言う今度はお前には負けないぴよんよ、法楽英子！ 何といてもアタイはキョンシーぴよんよ？ 移動力には自信があるぴよん」

「うっせー、キョンシーじゃなくてゾンビだろ？ てめーはよ。それに、昔からゾンビはのろまって相場は決まってるんだよ！」

「それはどうかな？ ぴよん」

そう言っただけで不適な笑みを見せたフランは一気に加速する。

「あっ、てめー、ゾンビが全力で走るなんて反則じゃねーか！」

「だーからー、アタイはキョンシーだって言ってるぴよん」

「だったら、うさぎ跳びしろうさぎ跳び！ ぴよんぴよん跳ねて見せやがれ！」

「おッ先いーびよん」

成る程、そっちがその気ならこっちだって手段を選んじやいらねえーな。

「甘いぜ、フラン、あたしはこのマンションの構造を知り尽くしてる。当然、近道もな！」

地の利を生かしたあたし、逃げ足のフラン。

「あたしが先だあああああ」

「アタイぴよん、是が非でもアタイぴよん！」

そんなあたし達が、天国のドアノブへ手をかけたのは、ほぼ同時だった。

が、その瞬間、動きを止めるあたし達。

デジャブか？ いや、現実だ。これが現実、紛れも無い、現実。

「あ、開かない、だと？」

「ア、アタイ。もう、駄目、ぴよ……」

天国は、無いのか？

そして、トイレから響く不敵な声。

「…………… 入ってまーす」

「花子おおおおおおお！！！！」

薄れ行く意識の中で、あたしは思った。もう一箇所、トイレを増設するべきだ、と。

天国へと至る階段は、未だ遠く、険しい。

END

第三十六話 「酒は呑んでも飲まれるな！」(ドヤッ)

第三十六話「酒は呑んでも飲まれるな！」(ドヤッ)

時刻は、草木も眠る丑三つ時。

一説では、妖怪・魑魅魍魎供が一番血気盛んになる時間帯とか云われている。

まあ、真実の程ってやつは一旦置いておくとしても、出来るならば、そんな時間帯にわざわざ夜のお散歩なんてしたくはない。

そんなの、誰だってそうだろう？ 勿論、あたしだってそうだ。

「こんな夜遅くに、一体どこに行くんですか？ 英子ちゃん」

「あら。何だよびーこ、お前まだ起きてたのか。今何時だと思っ
てんだよ、夜更かしは感心しねーな」

「はぐらかさないでください！ その上、またそうやって私に内緒
で！」

「… 念のために花子を呼んでおいた。なに、ただ宴会にお呼ばれ
されちまっただけさ、心配すんな… それじゃ、逝ってくるぜ」
「英子ちゃん、英子ちゃん！！」

そう言い残し、あたしがマンションのドアを出た次の瞬間、あた
しの体は、とある山奥へと瞬時に移動していた。

どうやら、あたしの登場を待ちきれない何者かが、わざわざあた
しを転送させたらしい。

こんなことが出来る輩はそう多くはない。そうだ… 「伝承クラ
ス」の何者か。

だが今回の場合、考えるまでもなく、アイツの仕業だろう。

あたしが、「酒呑童子」からサシでの勝負を持ちかけられたのは、数日前の事だった。

酒呑童子。

鬼族の中でも特に悪名高い悪鬼。真紅の体、髭、髪を持つ、熊の数倍はあろうかと言う巨躯の赤鬼。その昔、京都の大江山に住み着き、京の女子供を悉くさらい、そして喰らい尽くしたという筋金入りの糞野郎だ。とある文献によると、九尾の狐・大天狗と並び、日本の三大悪妖怪などと揶揄される存在であり、言わずもがな伝承クラスの存在。

正直に言つと、あたしの今の実力と新たな秋艶の力をもつてしても、勝率は5割程度といったところだろう。

…… イヤ、今のは嘘だ。しかも大嘘。

あたしの目算では勝率は恐らく1割切ってる。それだけ奴の力はデタラメだということ。鬼の力は、決して伊達や酔狂なんかじゃない。

だが、あくまでそれは、まともになりあつた時の話。

そして、今回の勝負は…… 言わずもがな、まとも何かじゃない。

「ヨオ、待ってたぜえ。法楽英子」

「わざわざ転送してくれるとは、随分と気が利いてるじゃねーか。酒呑童子」

「アア。一刻も早く、アンタと呑みたかったからな。それに、あの嬢ちゃんを……」

「おい。御託は良いだろ。さっさと始めようぜ」

そう、奴が指定した勝負方法は、「飲み比べ」。
先に意識を無くしぶっ倒れた方の負け。勿論、相手はあの酒呑童子だ。気を失って倒れた時点で、命なんて無い。

奴から仕掛けられた奴のフィールドでの勝負。賭けの対象は勿論、びーこの命。

あたしが負ければ、それはそのままびーこの死を意味している。

例えこの勝負を断っていたとしても、一度びーこに目をつけた酒呑童子は、決して諦めることは無いだろう。それどころか、問答無用でどんな手段を使ってもびーこの強奪をしてくるはず。

だからこそ、これは同じ土俵で奴を叩く一世一代のチャンスでもある。イヤ、違う。どんな手を使ってでも奴をこの場で屠る必要があるんだ。このチャンスを逃したら、次は恐らく無い。

「フン。最近の若いモンは忍耐ってやつを知らんから困る」

「ああ？ てめーがそれを言うかよ」

「ガハハハハツ。喜べ、法楽英子。銘柄は貴様が指定したものを用意してやった。それがこの勝負を引き受ける条件だったよな？」

「…… そうだ。あたしは、その銘柄に目がなくてね。それを呑むなら、例え相手が鬼だろうと負ける気がしねーからな」

「結構、結構」

ここは、一体どこなのだろう。どこかの山奥なのは確かだが、辺りには人っ子一人居ない。あるのは互いの側で真っ赤に燃える松明が一对。加えて、赤の杯が一对。そして、あたしの指定した酒ビンの山。

「フーム、さてと。そろそろ始めるかのう」

あたし達は、地面に敷かれた古めかしいゴザの上に座り、松明に照らし出されながら互いに杯を手にする。

「では、ワシの勝利に！」
「ざけんな！」

あたし達のたった二人きりの宴会が、今、幕を開けた。

酒が好きって奴が、総じて酒に強いってわけじゃない。それどころか、日本人の約半数近くは酒に弱いか下戸らしい。厳密に言えば、アルコールを分解するなんちゃらって酵素を持っていないか、持っているも代謝速度が極端に遅いのだそうだ。

幸い、あたしは酒に強い。無論、それはあくまで人間の中ではって話。鬼が酒に強いかなんて、言うまでもないだろう？

ああ、不味いな。これは。

「ワシが勝った暁には、そうじゃな、まずはあの譲ちゃんの手足をもいで……」

「おい。喋るんじゃないよ、酒が不味くなる」

「ガハハハッ。怖い怖い、そう睨むな。これではどちらが鬼だか分からぬではないか。それとも、まさかとは思うがもう限界ではなからうな？　あまりこのワシを失望させてくれるなよ？」

「限界？　てめーこそ、酔いが廻ってんじゃないのか？　自分のことは自分が一番良く分かってる。てめーに言われる筋合いは、断じて無い」

こんな不味い酒を飲んだのは、生まれて初めてだった。勿論、味の話なんかじゃない。

他の伝承達がそうであるように、この「酒呑童子」という鬼の伝

承もまた、かなり有名な話。だからこそ、奴の弱点、対策を立てることはさほど難しいことではなかった。

その昔、四天王と呼ばれた朝廷の戦士達は、酒呑童子に酒を飲ませ酔わせたところを、4人がかりで切つたのだという。その上、ご丁寧にもその酒には毒まで入れていたという念の入れよう。何を言いたいかと言えば、要は、そこまでしなければ倒せない相手なのだ。

同じ事をして、勝てるとは到底思えない。何しろあたしはたった一人だし、朝廷の戦士達のような用意周到な事前準備をする時間すら、あたしにはなかったのだから。むしろ、今回は逆のパターン。あまつさえ、あたしが酒を呑まされている立場なのだから。

だからこそ、これは、あたしの精一杯の手段。これが、あたしなりのやり方つてやつだ。

この体格差で、何より天と地のスペックの違い。そもそも、酒呑み比べであたしが勝てるわけがないのさ。最初っからな。

だからこそ、奴はこんな勝負を持ちかけてきた。あたしが断れないのを知っていないが。いや、奴にとつてあたしとの勝負なんて、どうだつていいのだろう。単なる通過点。あいつのちっぽけな脳みその中は、既にびーこをいかにして喰らうかでいっぱいなんだろうさ。

だが、例えどんな時代であろうと、例えその姿形を変えようと、伝承達の本質そのものは変わらない。変わりようがない。

…… そんな事を考えながらも、やがてあたしは、意識の手綱を手放してしまった。

「フン。噂通り、存外しぶとい女ではあったな。が、毒が廻った今となつてはそれも終わり。小娘、正直言つてワシはほつとしておるのだ、貴様のような輩を早々に始末できたことをな。どれ、ここは一つ、腕の一つでももいで、貴様の死を確信へと変えてやるうではないか」

グググググ、バギヤツ。

……
ベチャッ。グチャッ。ぼとつ。

「ガハハハツ。ピクリともせん。確かに死んでおるわ。このまま残りの四肢をもいでやつてもよいが、何しろワシは人間をそのまま生で喰らうのが何より好きでな。なーに、貴様に盛つた毒は特製だ、我ら鬼一族には無害の代物。安心してワシに喰われるがいいぞ。では、あーーーーーん」

スパーーーーー

鬼の口があと数センチまで迫つたその刹那、あたしは、瞬時に秋艶を召還すると、残された右腕で、驚き固まっている鬼のその首をためらう事無く、両断した。

「おいおい、冗談はその顔と口臭だけにしてくれよな、酒呑童子さんよお。あたしが死んだって？ 馬鹿言っちゃいけない。あたしは

な、死んだ振りをしていただけさ。それこそ、とびきり究極の死んだ振り、つてやつをな」

鬼は、首だけになって尚、その視線をあたしに向け、言葉を投げ掛ける。

「こ、小娘えええ、き、貴様、一体、どう、やって」

「悪鬼で名の通ったためーが、あたしとの勝負を真っ当に真っ向から受けるはずが無い。そんな事は、最初から分かっていたことだ。ためー自身が昔、やられた手口、毒を盛るくらいのことをやらかすだろー事も、最初からあたしに勝ち目がないことも。だから、あたしも賭けに出るしかなかった。あたしの力量であんたを屠るには、一番無防備な一瞬のチャンスを狙うしかなかったからな」

あたしは、酒吞童子にもがれた左腕を拾うと、無理やり左肩へとねじ込む。

「ああ？ 何驚いてんだよ。ためーが毒を使うなら、あたしはその毒そのものになるしかなかった。今のあたしは、人間じゃない。それだけの話さ」

一步、また一步、あたしは、体全体を引きずるように、ゆっくりと鬼の首へと近づいていく。そう、まるでゾンビのようにゆっくりと。

「まさか、貴様… 死人に？」

「大正解。ファンファーレの一つでも鳴らしたい気分だが、生憎今は真夜中。悪いが割愛させてもらうぜ。そして… 今のあたしは、あんたの言つとおり、ゾンビ。まあ、半ゾンビ状態ってやつだ。ためーの毒・人間一人の摂取量を超えたアルコール・失うことの出来

ない意識・痛覚の遮断・そして、一瞬の隙を狙うための究極の死んだ振り。これらの問題を解決するにはどうすればいいか？ … あたしの知り合いに、ヘンテコなゾンビキョンシーがいるんだ。あたしだって必死さ、勝つためなら何だってやる。そもそも、勝負に綺麗汚いなんて概念は存在しねーからな」

あたしは、懐からいつものナイフを取り出すと、精神を集中させた。

「外面如菩薩、内心如夜叉」

紅く煌くあたしのナイフ。人間の「異端」を取り除く紅の煌き。

あたしは、ためらうことなくそのナイフをあたしの腹部へと突き刺した。

「……………ふうーっ。何とか、ぎりぎりセーフだった。完全なゾンビ化ってやつは防げたみてーだな。本当、やれやれだぜ。こんな危ねー賭け、もう二度とするもんか。そして、待たせて悪かったな、いよいよてめーの最後だ。……………そうだな、冥土の土産に一つ良い事教えてやるよ。酒は呑んでも飲まれるな。良い酒飲みってやつはな、常に自分の力量・限界ってやつを理解しているものなのさ。自分の力量に自信過剰なうちは、立派な酒飲みとは言えねーぜ。それじゃ、あばよ」

あたしは、右手の秋艶と左手のナイフに全神経と力を込め、奴の頭部を粉みじんに切り刻んだ。

奴の顔が音も無く消えると同時に、奴の体もまた、この世から消え去る。

自らの肉体のゾンビ化。

我ながら馬鹿馬鹿しい手だったと思う。一步間違えば、あたし自身が究極のプロレタリアに成り下がっちゃうところだった。まともな思考回路を持った奴なら絶対に用いない手段。

だが、幾つかの偶然が重なり、あたしは、この手段を思いつき、決行するに至った。

例えばフランの存在や、酒呑童子がわざわざあたしに酒の銘柄を選ばせたこと。まあ、奴からしてみれば、あたしに選ばせることで警戒心を無くそうって単純な考えだったんだろうが、それがむしろ好都合だった。何故なら、あたしの選んだ酒は、所謂、神酒と呼ばれる類の酒だ。別名、聖水酒。これには、あたしの完全なるゾンビ化を遅らせ防ぐ意味があった。

ちなみに、あたしの愛刀秋艶の刀身の一部には、かのユニコーンの角が埋め込まれている。つまり、こいつを持っているだけでもある程度の毒を中和する能力があるってこと。こいつの力もまたあたしの完全なゾンビ化を影ながら防いでくれていた。だがまあ、あの鬼野郎の仕込んだ毒は、そんなある程度なんて量を逸していたし、そもそも例えユニコーンの角でもアルコールは分解してくれない。だからこそそのゾンビ化。

全ては、奴の一瞬の隙を突くために。

だが、奴の最大の敗因は、その自信過剰な性格にあった。奴がもし、あたしとの勝負を単なる通過点だと考えず、かつての怨念をばらすかのような、こんな余興染みたららない勝負方法を選ばず、あたしとのサシでの真剣勝負を指定していたならば、恐らく今頃あたしはこの世に居なかっただろう。勿論、びーこも。

奴は、自分のその力量に吞まれていたのさ、最初からな。

さてと、びーこの奴も今頃心配しているだろう。そろそろ帰ると

するかな、ぴよん。

……え？

???

……?!?!!

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8403t/>

英子とびーこのあいどんのー!?

2011年12月11日14時52分発行